



K131.8

5

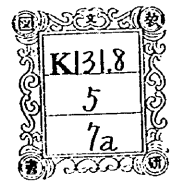
7a

初等科國語

文部省

教師

三





國語三

教師用

文部省

文部省調查局刊行課寄贈

初等科國語三教師用書目錄

總 說

- 一 國民科指導の精神……………七
- (1) 國民科の意義……………七
- (2) 國民科に於ける教科と科目との關係……………九
- (3) 國民科の教科書とその指導方針……………一一
- (4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關係……………一六
- 二 國民科國語指導の精神……………一九
- (1) 國民科國語の意義……………一九
- (2) 國語指導の四分節……………二二

- 分節の基礎……………二二
- 音聲言語指導と文字言語指導……………二三
- 讀み方……………二五
- 綴り方……………二八
- 書き方……………三〇
- 話し方……………三一
- (3) 國語愛護と國語の醇化……………三三
- 三 國民科國語教科書……………三九
- (1) 編纂方針……………三九
- (2) 第三期の國語教科書……………四一
- 初等科國語(卷三—卷八)……………四二
- 教師用書……………五〇

各 說

- 一 朝の海べ……………六五
- 二 潮干狩……………七一
- 三 日本武尊……………八三
- 四 君が代少年……………九八
- 五 靖國神社……………一四
- 六 光明皇后……………二三
- 七 苗代のころ……………三一
- 八 地鎮祭……………四〇
- 九 笛の名人……………四九
- 十 機械……………五六
- 十一 出航……………六二

- 十二 千早城……………七三
- 十三 錦の御旗……………八一
- 十四 國旗掲揚臺……………八八
- 十五 夏……………九五
- 十六 兵營だより……………一〇二
- 十七 油鐔の一生……………一二
- 十八 とびこみ臺……………二〇
- 十九 母馬子馬……………二七
- 二十 東郷元帥……………三三
- 二十一 くものす……………四二
- 二十二 夕日……………四八
- 二十三 秋の空……………五四
- 二十四 濱田彌兵衛……………五八

附 録

新出讀替文字一覽	二七七
運筆順序	二八四
綴り方指導要項	二八九
指導の發展段階	二八九
初等科第四學年	二九〇
一、指導要項	二九〇
二、指導要項例	二九四
三、參考文題	三〇〇
話し方指導要項	三〇七
指導の發展段階	三〇七

初等科第四學年指導要項……………三〇八

總 說



國民科指導の精神

(1) 國民科の意義

國民科の目的

國民學校は「皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スヲ以テその目的とする。國民科はこの目的を全うするため」に設けられた教科の一つであつて、特に國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命を自覺せしめる點に於いて重要な任務を有する。

國體の精華

教育に關する勅語には
朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深

厚ナリ我力臣民克ク忠ニ、克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我力國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と仰せられてある。國體の精華を明らかにすることは、とりもなほさず皇國の道を明らかにすることであり、道を體得實踐して億兆一心の實を擧げることである。

國民精神

國民精神は皇國の道に基づいて發揮せられる。しかもそれは、無窮に生々發展する皇國の相を體現して、あらゆるものを包攝する博大な精神である。義勇奉公を中核として活動することは勿論であるが、また優にやさしい「ものあはれ」を知る心もそれであり、外來文化を攝取して、これを自家藥籠中のものとなし、獨自の文化を創造展開して行く精神もそれである。

皇國の使命

皇國の使命は肇國の大精神に發源する使命であり、皇國の道を體とし、國民精神の發揮によつて遂行せらるべき使命である。随つてこの使命は、肇國の事實に基づいて本來道義的であり、皇國の生々發展に即して歴史的であり、また世界的であるといふことができる。さうした皇國の使命についての自覺を促し、將來の活動に資せしめんとするところに、國民科指導の窮極の目的はある。

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係

皇國の道と國民科

皇國の道とは、教育に關する勅語に示し給へる「斯ノ道」にほかならないのであるが、「斯ノ道」を學ぶとすれば、まづ道の教に即して國民道德を體得し實踐することが、國民科の任務の一重點となる。しかも「斯ノ道」は皇祖皇宗の御遺訓であり、皇祖皇宗の宏遠なる肇國、深厚なる樹德を始め奉り、國史的事實に基づいての道であるから、かうした國史的事實

に即して皇國發展の相を明らかにし、皇國の大生命を感得せしめることによつて、皇國の道を學ばしめることが大切であり、ここに國民科教科内容の第二の重點がある。しかも歴史と分つべからざるものはわが國土であり、わが國土國勢を明らかにすることによつて皇國の道を學ぶことが大切である。ここに第三の重點がある。この三重點を通じて學ぶことによつて、始めて古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる「斯ノ道」が體得されるわけであるが、更になほ「斯ノ道」及び「斯ノ道」に基づいて發現する國民性、國民精神、國民文化等は、わが國の言語によつて表現され、理會される場合が極めて多いのであるから、國語の習得もまた國民科の重點となる。

國民科の四科目

即ち國民科といふ教科は、皇國の道を明らかにし、これを體得實踐する立場から、おのづから右四つの重點を含むのであつて、これがとりもなほさず國民科が修身、國語、國史、地理といふ科目に分化するゆゑんと

なるのである。随つて國民科が四科目に分れることは、在來の小學校に於ける修身、國語、國史、地理が、簡單に國民科の中に束ねられたことを意味するものではなく、むしろ逆に國民科の目的を遂行するための重點として四科目が分化するのであり、あくまでも原理的に一貫して國民的自覺を喚起し、信念に培ふ教科である。

(3) 國民科の教科書とその指導方針

教科書の分化と指導方針

國民科に屬する教科書は、その科目に應じてそれぞれ分身するものであるが、その目的に於いて精神に於いて一致するのは當然であつて、指導に際しては、まづこの點に對する十分な考慮が肝要である。

しかも教科書には、それぞれの特色があり、教材は多種多様であるが、しかしどの教科書どの教材を取扱ふにしても、常に大局から見て次の如き指導方針を見失ふことのないやうにしなければならない。

一、皇國に生まれた喜びを感じしめ、敬神奉公の眞義を體得せしめること。

一、わが國の歴史、國土が優秀な國民性を育成したゆゑんを知らしめるとともに、わが國文化の特質を明らかにしてその創造發展につとめる精神を養ふこと。

一、他教科と相俟つて、政治經濟國防海洋等に關する事項の教授に留意すること。

これらの條項はいづれも、わが肇國の大精神を堅持し、皇國の使命を自覺せしめんとするところから生まれ來るものである。天壤無窮の皇位を中心とし奉り、一君萬民、君民一體の國家活動に對する信念、正しく明かるい國民生活の展開に對する信念、無限の努力に基づく卓越した國民文化の創造に對する信念を、周到な注意のもとに獲得せしめなければならぬ。

教材の排列

但し、かくの如き指導目的は一足跳びに達成されるものではない。隨つて國民學校に於いては、教材を兒童心身の發達に即せしめ、その生活の實際並びに生活環境と照應せしめながら、段階を追うて進むものである。即ち教科書は教材を精選しつつ、左の四期にわたつて發生的に組織する。

第一期 初等科第一、二學年

第二期 初等科第三學年

第三期 初等科第四、五、六學年

第四期 高等科第一、二學年

右は國民學校の教科書全般にわたる編纂方針であるが、國民科についていへば、

第一期に於いては、特に兒童生活に於ける躰と國語の初歩的練習とを主とし、日常行爲に現れて來る事象について見方考へ方、並びに實踐を指導し、かつ想像力を豊かならしめるやうにつとめる。「ヨイコドモ」

「ヨミカタ」はこの目的を達成するために編纂された教科書であつて、それらは修身國語の教科書であるとともに、國史地理の萌芽を含むものである。しかもこの期の兒童の心情と理會とに即し、全國共通の兒童生活に取材するとともに、生活曆によつて排列されてゐることも見落すべきではない。

第二期に於いては、生活體驗に對する正しい理會力と發表力とを伸張せしめ、次第に道德的理想構成の方向に向かはしめようとするものである。この時期は兒童前期から兒童後期に移る過渡期として、特に考慮した教科書が編纂され、隨つてそれに應じた取扱が考慮さるべきである。

第三期に於いては、兒童を自覺的ならしめることに重點を置いてゐる。隨つて實踐の能力を助長するとともに、道德的判斷が十分に行はれるやうに輔導しなければならぬ。この時期に至つて國民科は修身國語のほかに、郷土愛の念を涵養し、郷土の觀察をなさしめるのであ

るが同時にまた國史地理の二科目を分化せしめ、それに應じた教科書を提出する。

第四期に於いては、第三期に至るまでの基礎的な鍊成の上に、東亞の情勢並びに世界の動向を知らしめて、ますます國體の精華を明らかにし、大國民たるの資質に培ふものである。

第三期の教科書

兒童の理知的方面の著しい進展に鑑み、この期の教科書は全般的に、教材の排列を次第に整備して系統的ならしめるやうに編纂される。隨つてこの期以降各科目の教科書は、その教科の目的に即する限りに於いて、やうやく獨自の體系を以て編纂されることになる。

國民科教科書は、この期に於いて、専ら兒童の自覺を促し、道德的判斷及び實踐の能力を助長する一面に、やうやく深まつて行く兒童の情意的方面を、男女その他種々の特質に應じて陶冶し、情意を洗煉し、發表を多面的ならしめることを考慮して編纂する。即ち「初等科修身」は専ら

前者を擔當し、初等科國語は多分に後者を擔當する。更にこの期の最初に「郷土の觀察」が分身して、郷土を國史地理未分化の立場から實地に觀察させ、郷土愛の精神に培ふとともに、國史地理學習の基礎たらしめ、やがて第五學年から「初等科國史」「初等科地理」に分化して、一は主として史實の展開に即して編纂體系を立て、一は國土國勢の理會に適合する教材系統を定めて編纂する。かくして分化した修身國語國史地理の教科書は、相携へて國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命の自覺に培ふことをめざしつつ、第三期を以て一應の段落とするやうに編纂される。

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關聯

理數科との關聯

國民科は皇國の道を明らかにし、國民的自覺信念に培ひ、實踐せしめ

ることを目的とする。随つて皇國の新たなる伸張を意圖する限り、國民科は同時に科學の重要性の理會と、文化創造の任務を自覺せしめるものでなければならぬ。その點全く理數科に於ける合理創造の精神の涵養と軌を一にする。また理數科的な考察處理を重んずる生活態度の養成と、自然の觀察への契機を與へる點で、極めて密接な關聯を有するものである。

體鍊科との關聯

體鍊科とは保健衛生に關する指導によつて堅く結びついてゐるが、心身一體の境地をめざす國民學校教育としては、同時に、獻身奉公規律協同服従公明正大の精神を涵養するとか、體鍊に關する禮法の修練を基礎づけるとか、武道精神を鼓吹するとか、體鍊科に於ける修練と不可分の關聯にある。

藝能科との關聯

國民科は國民精神の涵養を意圖するものであるが、その中には當然

國民的情操を醇化し、高雅な趣味を涵養することを含んでゐる。随つて藝能科ともまた不可分である。特に表現鑑賞の能力に培ひ、家庭生活の理會、婦徳の涵養を期すること等、藝能科教育のめざすところと離るべからざるものがある。

實業科との關聯

實業科は一面に於いて、國民科の精神を實生活に具現することを意圖する教科である。特に職分を通じて公に奉ずるの精神を養ひ、産業の國家的使命を自覺せしめ、海外發展の素地に培ふ等、國民科に於ける指導はそのまま實業科に於いて擴充せられるわけである。

儀式學校行事との關聯

儀式行事等に對してその本義並びに由來を明らかにし、禮法を修練し、生活體驗を發表し整理する等、國民科の分擔するところは極めて重大である。

二 國民科國語指導の精神

(1) 國民科國語の意義

國民學校令施行規則第四條に

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理會力ト發表力トヲ養ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス

とある。國民學校に於ける國語指導の範圍方法目的の三者がこの中に要約されてゐる。

「日常ノ國語」とは、日常生活に使用する國語の意義で、特殊専門乃至高尚な國語に對し、ここに國民學校教育としての限度が示してある。「日常ノ國語」は換言すれば普通の國語である。もちろん生活言語としての生きた國語を基礎とするが、といつて方言訛語や燕雜野卑な言語を含むもの

ではない。それらは教育的立場から當然矯正醇化さるべきものであり、どこまでも醇正な國語を對象とすべきものである。更に「日常ノ」といつたからとて、單にわれわれの日常の話しことば及びそれを基礎とする口語文に限るわけではなく、普通の文語やある程度の古典語をさへ含んでゐる。これを要するに「日常ノ國語」とは、普通の國民生活に必須であり、基本的規準的な國語を意味するものである。

日常生活に使用する國語には、いはゆる話しことばとしての音聲言語と、文字に書き表す文字言語とがあり、國民學校に於ける國語指導は、この兩者にわたつての理會力發表力を養はなければならない。即ちその理會力は、讀むこと、聽くことによる理會力であり、その發表力は、話すこと、書くこと、綴ることによる發表力であつて、ここに國語指導が「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」等に分節する基礎がある。

國語を指導する者は、豫め國語の本質を見定めておくことが大切である。

言語を單に思想傳達の道具とする考へ方は、極めて通俗的な言語觀であるが、これがためにしばしば教育上の過誤を來たすことがある。なるほど言語を結果からのみ見れば、一種の符徴であり、道具である。しかし言語によつて發表される思想は、元來言語を通して考へられ、感じられた所産である。換言すれば、われわれは言語を通して思考し、感動して思想を構成するのである。思想と言語とが紙の表裏の如く一體不可分であるといふ理由はここに存する。これを國語についていへば、われわれ日本人は、國語を通して考へ、感じ、思想を構成する。われわれの思考なり、感動なり、思想なりは、どこまでも國民共有——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。さうしてここに國語指導の大切な鍵が秘められてゐるのである。

即ち國語指導の第一義諦は、國語そのものと分つべからざる國民的思考感動を通じて國民精神を涵養することにある。換言すれば、國語は國初以來國民がなし來たつた思考感動の結晶體であり、國語指導は、この思

考感動と一體たらしめることによつて、國民精神を啓培することにあるのである。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを輕視し、言語發表の題目たる材料を内容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も實物そのものの指導の如き觀を呈せしめる。もとより實物そのものの指導は教育上大切なことはあるが、少くとも國語指導に於いては言語が主であり、實物は客であつて、この主客を顛倒するに至つては既に國語指導は存在しないといはなければならない。

(2) 國語指導の四分節

分節の基礎

國語に音聲言語と文字言語の兩面がある以上、國語指導はこの兩者に

かけての理會力發表力を養はなければならない。即ち音聲言語の指導には「話し方」「聴き方」が、文字言語の指導には「読み方」「書き方」「綴り方」が分節し得るゆゑである。但し實際問題として考へれば、「聴き方」は「話し方」の一面として相即するのであるから、「聴き方」は「話し方」に包含するものとして、「読み方」「綴り方」「書き方」「話し方」の四つが國民科國語に於いて取立てられたのである。

音聲言語指導と文字言語指導

在來「話し方」は、國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ためにわが國語指導は、ややもすると文字言語に限られがちであり、ここに國語指導の弱點があつたと考へられる。國民科國語に於いて新たに「話し方」が拾ひ上げられ、表面におし出されたのは、大に注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したの

である。随つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地盤たる音聲言語としての國語が正しく豊かに培はれることが大切であつて、そこに「話し方」の重要性がある。

しかし、それかといつて、國語指導の窮極の目標が音聲言語にあるかの如く考へるのは、早計であり誤りである。殊に國內の兒童を、相手とする國語指導は、國語を外國語として教へる日本語教授と、その出發點に於いて趣を異にする。學齡兒童は既に家庭なり社會なりから音聲言語を學び、數千の語彙をもつてをり、彼等の生活に必要な程度に於いてそれを自在に驅使してゐる。國內に於ける音聲言語の指導は、兒童のかうした生活言語を基礎として、次第にこれを醇化し、發音語法を適確ならしめ、進んでは音聲言語そのものを高めて行くことにある。さうして、かうした役目は、むしろ文字言語の習得によつて果されることが決して少くないのである。今日國內に於いて用ひられる話しことばが、文字言語によつて統一され、醇化され、高度化されて行くのと同じやうに、兒童の言語もまた

文字言語の習得によつて統一醇化され、高度化されて行くのである。ただ文字言語のみによる教育は、ややもすれば音聲言語の重要性を閑却し、その修練を等閑に附する結果、文字言語と音聲言語との分裂を來たし、文字言語は陶冶されながら、音聲言語は野卑な方言訛語のままに放置される。その結果一般社會の音聲言語をして健全な發達をなさしめないで終ることになる。故に國語指導に於ける音聲言語文字言語の指導は、互に相倚り相俟つてその効果を全うすべきものであることを忘れてはならない。

讀み方

「讀み方」は在來國語指導の主體であつたが、今後といへどもその重要性は決して變らないはずである。いはば「讀み方」は、國語指導の中核であり、その縮圖である。即ち「讀み方」は、單に讀むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自體に包含してをり、随つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と

密接不可分の關係をもつからである。

言語文章は思考感動と不可分であり、それ自體生命的な存在である。正しく讀むことは結局文字を通じてこの思考感動と一體になることであるが、それが操作としては、まづ正しい發音抑揚による音感から出發して、言語の意味語感に没入しなくてはならない。なほ讀むといふことは、文字の正しい發聲を出發點としていふのであるが、進んだ階梯に於いては、發聲段階を通過した默讀をも含むことはいふまでもない。

「讀み方」は、要するに正しく讀む力を養ふことを目標とするものではあるが、それがためには單に讀むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の兒童に對しては、教材に即して種々の言語活動をさせることが、一面には意味感情に徹して讀みを深からしめるゆゑであるとともに、一面には音聲言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、あるひは挿畫掛圖や文章について話をさせるとか、あるひは文章を暗誦させ、またこれを劇的に演出させるとかが、「讀み方」に於ける大切な

操作となるわけである。かくの如くして「讀み方」と「話し方」とは指導の實際に於いて相即一致することが考へられる。

更に書くこともまた「讀み方」の一操作であると考へられる。即ち文字の劃や筆順を正しく指導し、正確に書寫せしめることに始つて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、ここに實際指導に於ける「讀み方」と「書き方」の相即がある。この場合注意すべきことは書くことを徒に機械的ならしめ、言語の取扱を形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語文章の意義とか構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。随つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍内で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて、思考感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。

以上の如く、「讀み方」は讀むこと、書くこと、話すことを包攝することによ

つて、國語の正しい理會力を養成することを目標とするものであるが、この理會力はやがて言語の發表力として、話し方「綴り方」に發揮せしむべきものである。

綴り方

「綴り方」指導は、「読み方」指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を鍊成する國語指導の一分節であつて、「読み方」と密接な關係をもつものであることはいふまでもないが、しかもまた「綴り方」は、「話し方」と分離すべからざる間柄にある。即ち「綴り方」は、話すことの文字言語化であり、随つて「話し方」の延長發展と見なすことができる。特に低學年に於ける「綴り方」は、「話し方」から出發することが大切であり、ここに指導の實際に於ける「話し方」「綴り方」の相即があることを忘れてはならない。

「綴り方」は、話すことの文字言語化であるが故に兒童の生活言語は「綴り

方」を通して醇化せらるべきであつて、ここでもまた當然方言訛語を矯正し、醇正な國語による平易明白な文章を作らしめるべきである。

「読み方」の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが年級の進むにしたがつてやうやく高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると「綴り方」は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、「読み方」よりもむしろ「綴り方」に於いていひ得ることである。そこで「綴り方」に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に即して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために「綴り方」指導はある程度の發達を遂げながらも、不幸にして不健全な思想を醸成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から、物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捉らはれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。「眞を描く前

にまづ如何なるものを書くべきかを指導する必要がある、道に照らして心にうつり行く情意を表さしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は、綴り方に於いても例外なく要求されるのである。

しかも「綴り方」は、國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の営みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いてほかになく、しかもその最も積極的なものが「綴り方」である。即ち兒童の見方、考へ方の指導は、常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ創造力に培ふことが大切なのである。

書き方

「読み方」「綴り方」に於ける文字書寫の基礎として「書き方」がある。國民學

校の制度では在來の「書き方」の一部が「習字」として藝能科におかれたのであるから、國語の「書き方」はほとんど「読み方」に包攝されることになる。即ち「書き方」は初等科一、二年に於ける文字練習の基礎をなすもので、「読み方」の書取と相俟つて明確端正に書くことを指導するものである。

話し方

音聲言語指導としての「話し方」の意義と、その重要性については既に述べたところであるが、しかも「話し方」指導の實際については將來の攻究に俟つべきものが頗る多い。

音聲言語は、文字言語に先だつものであるから、「話し方」は文字言語から離れた自由な立場から指導すべきものとする考は一面の理であつて、實際的效果も甚だ疑問である。國民科國語に於いては、「話し方」の時間を特設しないのを建前とし、「読み方」「綴り方」等と密接に關聯してその基礎練習を行ひ、更に他科目他教科に於いて常に話し方指導の擴充を期すること

としたのは、専ら音聲言語と文字言語との關係に鑑みて實際指導に意義あらしめ、實績を収めんがためである。

即ちまづ「読み方」に即して兒童に自由簡明に發表させる機會を與へ、話す心構を作らせることを手始めとして、一面にはこれをことばの躰や、読み方の文章に即應しつつ次第に醇化し、他面に「綴り方」に延長して文字言語化しつつ統制し、その間絶えず兒童の音聲言語を指導して、不完全より完全へ、正確へ、雅馴へと進展させることを心掛くべきである。在來「話し方」と稱して兒童にお伽話や體験を語らせ、それが言語發表として不完全であつても何等指導に工夫しないやうな、だらしない「話し方」でなく、躰を中心とした齒ぎれのよい「話し方」に導くことが大切である。

もとより時宜に應じて時間の特設し、感興深き兒童の共通話題を中心として談話させ、進んでは多數の面前で演述させることも大切であるが、しかも絶えず醇正な言語の指導をすることを忘れてはならない。

「話し方」の半面たる「聴き方」に至つては、更に將來の研究を要するのであ

るが、まづ人のことばをおちついて聞く習慣を早くから養ひ、進んでは聴いた話の要領を語らせ、感想を述べさせる等、發表の進展と相即してその實際を工夫すべきである。

なほ「話し方」の指導は常に修身の禮法と結び、禮の精神を言語の上に體現せしめる指導が大切である。他人の感情を害し、他人の非を擧げて快しとするやうな言動を戒むべきは、もちろん、口先のみ巧みで、然諾を重んじない氣風をなさしめるのは更に禁物である。如何なる場合に如何に、いひ、如何にいふべからざるかをわきまへしめ、進んでは巧みに語る人に對してはよき聴き手となり、ことば少き人に對してはよき話し手となる等の社交上の心構をも一應は指導すべきである。

(3) 國語愛護と國語の醇化

國語が單なる思想發表の具でなく、國民的思考感動の結晶體であり、國民の思想精神と不可分のものであることを考へるとき、われわれは今更

に國語の重大な意義を知るとともに、如何にこれを尊重愛護しなければならぬかを痛感する。随つて國語指導は、國民をして國語の重大性に目醒めしめ、國語尊重愛護の念を啓培することに徹しなければならぬとなつて来る。

國語の尊重愛護は、國語に對する道を闡明し、これを實踐することである。さうして國民學校に於ける國語指導は、まづその實踐によつて國語の規準法則を體得させ、進んで國語の特質を知らしめ、國語を醇化愛護するの念に培ふことを任とすべきである。

即ち國民學校に於いては、まづ發音を正し、抑揚に注意することによつて國語の道の實踐に入らしめる。發音を正しくすることは、在來既に久しく唱道せられ、一部教育の實績に見るべきものがないではないが、國內全般としては前途なほ甚だ遑遠の感がある。抑揚にはいはゆるアクセントをも含めていふのであるが、これが實際指導は更に多難であることを思はせる。しかし今日、國語が東亞共通語として重大な役割をなさん

としつつあるを見れば、その發音なりアクセントなりは、在來の如く方言的に放置せらるべきでなく、話しことばとしての標準語の指導とともに、發音アクセントの醇化統一を徹底し、以て東亞共通語として、更に進んでは世界語としての文化的資質を備へしめることが今日の急務であり、しかもそれが専ら教育によつて果されることを考へなければならぬ。

發音アクセントばかりでなく、國語はなほそれ自體の法則を有する。われわれが日常使用する國語が、この法則に支配されてゐればこそ、われわれはその意義を解し、また誤りなく傳へることができるのである。國語の法則は即ち語法であるが、わが國語の語法はいはゆる文法として一見簡單であるやうであつて、その實運用の上に甚だ微妙性があり、それがことばの選びや、いひまはしにまで延長して修辭法に密接なつながりをもつてゐる。國語指導はこの點に鑑み、適宜語法修辭に注意し、無意識的な使用を意識化し、法則の體得實踐に導くことが大切である。國民學校に於いては、敢へてそれを系統的知的に授けることを期するものでなく、

重點的に指導し、しかも常に實踐的に導くことをなさなければならない。かくの如くして國語指導は音聲言語に於ける標準語の使用のみならず、文字言語に於いても常に醇正な國語の使用に留意し、これを他科目他教科の指導に擴充するはもちろん、兒童の生活の上にまで體現させることをめざさなければならぬ。そこには非常な困難があり、在來の國語指導はこの困難を克服することに於いて甚だ不徹底であつた。しかし試みに臺灣朝鮮南洋に於いて正しい國語の普及徹底を期し、その他外地に於いても、この理想の實現に努力しつつある今日であることを思へば、國語指導はまさに在來の墮眠から目醒めなければならぬ時である。

國語愛護の精神に培ふためには以上の如き實踐的指導とともに、なほ理念として國語の特質をもある程度認識させることが大切である。

例へばわが國語はこれを歴史的に見るとき、未だかつて外國語に征服されたことのない國語であり、肇國以來連綿として傳はり發展し來つた國語である。よし多數の漢語及び漢語法を取り入れ、また近世歐米語

に若干の影響を受けたとはいへ、國語の生命は脈々として連なり、生々發展し來つたのである。この歴史面から見てわが國語は、一面に包容性に富むとともに、他面に儼として純粹性を保つてゐる。「あはれ」「うれし」「かなし」等、多數のやまとことばが、ほとんど上代そのままの姿で、今日の生活語に用ひられてゐることや、純粹なやまとことばによつて表現される和歌の如き文學が、國初以來傳承され、しかも現代に於いていよいよ盛に行はれてゐることなどにそれを見ることができる。しかもわが國語は前述の如く歴史的に外國語の影響を受けたことも多大であつて、そこに包容性のあることは見のがし得ないところである。この點から往々國語の混亂を來たすのであるが、そこにまたわが國語が世界語として發展すべき素質を藏してゐるとも見るのである。

またわが國語をその表現に即して特質を考へるとき、和歌俳句の如き短い文の中に豊富な意味感情を盛り得る含蓄性があり、しかもまた物語文學の發達に見る生活の精細な描寫をなし得る描寫性を併せ具へてゐる。

ることが、何よりも著しい特徴として考へられる。

かくの如き國語の特質を知らしめることは、やがて國語愛護の念に培ふゆゑんであり、更にその尊重愛護が一面の理に走つたり、末梢に流れたり、乃至頑迷固陋に陥つたりせしめないゆゑ、ゑんになるのである。

國語は生命體であり、常に生動し發展するものである。随つてこれを使用する國民の心掛如何によつて國語はよくもなればわるくもなるのである。われわれが發音を正しくすれば國語そのものの發音が醇化される。われわれが醇正な國語を使用して話し、又文章を書けば、國語そのものが次第に醇化される。ここに國民として國語に對する實踐道があるのである。

されば醇正な國語とは、決して固定した觀念のものでなく、將來の國語に對する理想をもつて考ふべきものである。即ち國語の醇化は、單なる外國語の排斥でもなく、翻譯語の忌避でもない。要は國語の法則に基づき、特質に鑑み、またその傳統と實際に照らしつつ、音聲言語に於いても文

字言語に於いても平明雅馴を保ち、文化性創造性を賦與することに努力することにほかならないのである。

三 國民科國語教科書

(1) 編纂方針

國民科國語教科書は、國民科の教科書であり、随つて國民科全般に通ずる教科書の編纂方針に基づき、これを國語の立場から具體化することによつて編纂される。

まづ國語教科書の教材は、醇正な國語を通じて國民精神を涵養し、情操の醇化、創造力の啓發に資し、併せて國語愛護の念に培ふものであることを期する。

さうして、これらの教材は第一期乃至第四期の段階に即して排列され

るのであるが、國語教材はその表現面たる文章と、素材たる表現對象と、この二つの方面から排列を考慮し、系統を樹立しなければならない。

文章の系統 第一期は言語の發生系統を考慮して、叫び聲、獨言、對話その他専ら主體的な敘述を按配し、第二期に入つて次第に客觀的な敘述に移り、第三期に至つて口語文、文語文に分化する。第四期には更に文語の書簡文や名家の作品をも採擇する。なほ韻文としては、第一期の叫び聲から出發して第一二期を通じて童謠、童詩の類を排列し、第三期に入つて現代詩和歌俳句等に分化せしめる。

表現對象の系統 表現の對象は兒童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる。即ち第一期は専ら遊戲、童話等を中心とする兒童生活を表現の對象とし、これを以て第二期以降の教材の母胎たらしめる。童話は傳説、寓話等を経て第二期に於いて神話、英雄物語に移行し、第三四期に於いて更に歴史物語、歷史的文化財に發展させる。遊戲は、模倣、作業運動、觀察等を経て、次第に現代の國民生活、文化の諸相に展開させる。

特に第一二期に於いては修身教科書と相俟ち、國史及び地理の教材の萌芽を啓培して、第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめる。

以上は第一期乃至第四期の國語教科書の教材の體系であるが、なほ文字語句語法の提出もまた右體系と相俟つておのづから基準が定まるのである。今その提出の基準を極めて概括的にいへば次のやうである。

- (1) 簡單にして基本的なものから始め、次第に複雑なものに及ぶ。
- (2) 兒童の生活や心情に關係の深いものから始める。
- (3) 具體的意義を有するものを先にし、抽象的意義を有するものを後にする。

(2) 第三期の國語教科書

第三期國語教科書として、初等科國語（兒童用書卷三より卷八までと、その教師用書を編纂する。兒童用書と教師用書とが一體的機構を有し、兩者によつて國語指導の全機能が發揮されることは第一期、第二期の教科

書と同様である。

初等科國語（卷三―卷八）

この期の教科書は各教科科目にわたり、それぞれその教科科目の目的に即應して、教材が系統的に配列される。換言すれば各教科書は、それぞれ教科科目の性質に従つて獨自性を發揮することになる。

「國民科修身」に於いては、この期以降卷頭に「教育ニ關スル勅語」がまづ奉掲され、教材は直接に聖訓を根基として選擇され、排列系統もまた専ら聖訓を基準として組織だてられる。もちろん第一期、第二期といへども、教材は常に聖訓を根基として作成されてはゐたが、一面常に兒童生活の實際に顧み、また特に排列に於いて生活層にしたがふところが多かつたのであつて、この點で第四學年以降、いよいよ修身としての體系組織が次第に樹立されて行くのである。

「國民科國語」に於いても、この傾向は第四學年以降次第に現れて來る。

もとより國語教科書は、音聲文字兩面にわたる言語を修練せしめるものであり、言語によつて表現されるところは廣く國民生活文化のほとんど全面にわたり得る。随つて教材の體系は、他科目他教科の教科書の如く、素材によつてのみ決定されるものでなく、多分にその表現面即ち文章の種類程度や、語彙語法等に依據しなければならぬ。しかも言語の生活は決して理知一點張りのものでなく、むしろ深く情意に根ざすものであるから、言語現象はまことに複雑多岐であり、これを單なる論理的體系によつて整へようとすれば、却つてその眞を失ひ、迂遠にしてしばしば無味乾燥なものになる傾きがある。殊に言語の理知的な表現は、他科目他教科の教材に於いて次第に展開されて行くのであり、國語教材は、むしろ情意を基調とする表現を中心とし、これを排列するのであつて、随つてその系統は極めて大まかに取つて、文章の易から難へ、單純から複雑へ、表現の種類分化へと展開し、語彙語法等の論理的な階梯は、むしろ與へられた教材につき、重點的に選びつつ、指導に於いて適當に系統をととのへるの

が適切であるといへるのである。

第三期は第二期の過渡性を受けて表現態度は更に客觀的となり、一その文章としての體を整へるとともに同じ口語文も主として事實を敘するもの、情意を表白するもの、説明を基調とするもの、論旨を説述するもの等種々のものに分化する。もちろん國語教材は前述の通りすべてが情意を基礎とする表現、換言すれば文學的表現を以て本領とするのであるから、事實といひ、説明といひ、論旨といひ、決して知識を客觀的に敘するものでなく、常に情意の坩堝に融かしこんだ表現であることに注意すべきである。

更にこの期の卷四以降、文語文を提出する。これが提出方法は小學國語讀本が試みたものを繼承するもので、興味ある韻文若しくは戰記物語の韻律的な敘述に出發し、まづ素讀的方法によつて文語を直觀的に了解せしめ、つづ、次第に文語に親しませて行かうとするものである。しかもこの文語に移る階梯として、卷三に「日本武尊」「笛の名人」「千早城」「錦の御旗」等の文が掲げてある。これらは口語文とはいへ、既に單なる話しことばの表現でなく、多分に文語的な手法の加味された文章であることに注意すべきである。

韻文についていへば、第二期のいはゆる兒童詩は、この期に入つて一段の進展を示してゐる。即ち卷三の「朝の海べ」や「靖國神社」になほ兒童生活の表現はあるにしても、詩題に於いて一そう高いものがあり、「夏」や「秋の空」に至つては、既に詩の境域に迫つてゐる。更に卷四の「林の中」「廣瀬中佐」は文語詩であり、「防空監視哨」は自由詩としての雄篇である。かくの如くして韻文は現代詩の域に達するとともに、やがて俳句和歌等の古典的な韻文形式をも分化するのである。

次に表現の對象から第三期の教材系統を一瞥すると、この期に入つて始めて童話的興味から脱却した本格的な史話や英雄物語が現れる。その排列に於いて、卷三が上代の「日本武尊」から現代の「東郷元帥」まで大體歴史の時代を追つてゐるのは、卷二の排列を今一度繰り返すとともに、卷二

のそれを相補つて一そう時代を詳らかにするものであり、かくして卷一以降神代から現代までの歴史を極めて重點的に形成して、國民科國史の母胎を作りつつあるのである。

卷四に於ける説話は、くりから谷「ひよどり越」扇の「的」弓流し等特に文語教材とからむものが中心となり、それに「萬壽姫」が配せられて源平物語の敘事詩に集中し、やうやく古典文學たる性向を示してゐる。これらは卷五以降に出現する説話文學、古典文化教材、和歌俳句等と相提携して、國語の傳統的意義を次第に深めて行くものである。

國語教材は、以上の如き説話から展開する生活文化の歴史性とともに、兒童生活から出發する國民生活文化の現代性をも一環として包攝しつつ、彼此相提携して高度國防國家體制の確立に資するものである。さうしてかくの如き現代生活文化には、敬神（靖國神社、地鎮祭、國體國防、靖國神社、兵營により觀艦式、大演習、小さな傳令使、大砲のできるまで、防空監視哨、國民精神、君が代、少年體鍊とびこみ臺スキ）、科學（潮干狩、國旗、掲揚臺、油蟬の一生、くものす、燕はどこへ行く、グライダー、日本號、振子時計、産業機械、大砲のできるまで、地理、田、航船は帆船よ、大連から、大阪、早春の滿洲、自然（朝の海、苗代のころ、夏、馬子馬、夕日、秋の空、林の中、川、土手）等の體系がこの部に於いて、兒童生活から發展し、重點的に組織だてられつつある。なほ説話教材の「光明皇后」「萬壽姫等」とともに、母の「日」が特に女子に關するものとして選ばれてゐることに、注意を要する。

しかもかくの如き素材が、國語教材たり得るゆゑは、一にかかつて情意を主とする國語によつて表現されてゐることにある。科學産業に關する教材といへども、國語に於いては言語表現を通じて思考感動に訴へ、國民精神に培ひ得るものたることを期するのである。

卷五以降に於ける教材の排列については、後卷に譲ることとしてここには省略する。

文字の提出並びに使用について、在來の方法を改めた點を述べると大體次のやうである。

(1) 新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げなかつたこと

新出並びに讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げることは、國語讀本の長い傳統であつたが、これがためにややもすれば國語指導即文字教授の感を抱かしめ、指導方針を誤る向がないでもなかつた。殊に音聲言語の重要性を認め、音聲言語文字言語兩面にわたつての理會力發表力を修練する國民科國語の立場からすれば、この方法は絶對に改める必要がある。よつて在來の方法を變更し、兒童用書の欄外に文字を掲げないこととしたのであるが、しかし兒童用書の卷末には新字表を附し、教師用書には新字讀替を仔細に指摘し、以て指導上の手がかりとした。もちろんかくの如き方法の變更は、決して文字の意義を軽く視たのでなく、國民科國語に於いては、國語そのものの指導を徹底せしめる點からして、ことばとともに文字の指導の任務は、むしろ一そう重要であることを考ふべきである。

(ロ) 漢字の提出

教材が單純で、しかも兒童の機械的記憶力の旺盛な時期に、漢字を多

く提出することが適切であることは、教育の實際に於いて意見の一致するところである。小學國語讀本が既にこれがある程度實行して來たのであるが、國民科國語教科書に於いては一そうその度を進め、第一期及び第二期に於いて漢字の提出を多くし、第三、四期に於いて減少した。なほ仔細にいへば、新出漢字の提出は第二學年に於いて最も多く、第三學年は既に減少してゐるが、第一期に於いてはできるだけ讀替漢字を出さないやうに、第二期に入つてそれがずつと増加するから、結局漢字の負擔は次第に多くなるであらう。略字は第二期から教師用書に提出するが、正字と同様に取扱ふべきである。

ハ 文字使用上の留意

「ヨミカタ」以降、文字の使用について在來と異なつた觀點から特に留意したことは、漢字はある程度提出してもその使ひ方を著しく制限し、國語を漢字の桎梏から解放することにとめたことである。特に話しことばを尊重し、國語の醇化を期する上から、できるだけカナ

文字の使用を擴充し、漢字の種々な訓みを制限し、當て字當て訓みを整理し、一部送りガナを在來より精しく附して、全體として讀みやすからしめるとともに、醇正な國語を生かすことにつとめてある。

教師用書

教師用書は、「初等科國語」と編纂機構に於いて一體たる關係がある。まづ各教材の取扱を示して讀み方指導の重點を掲げるとともに、常に綴り方話し方指導への發展擴充を圖り、別に綴り方話し方の指導要項を掲げ、以て國語指導の全機能を發揮することを期するものである。

教師用書は、「初等科國語」の教材に即して、教材の趣旨、文章、取扱の要點、注意すべき發音文字、ことば等、備考の五項を掲げて説明し、更に附録及び綴り方指導要項、話し方指導要項が掲げてある。今これらの項目に即して説明と注意とを加へておく。

(イ) 教材の趣旨

主として教材を採擇作成した趣旨を述べたもので、おのづから教材の目的や精神に觸れて説く部分であり、教材の持つ思想感情について解説する部分である。學年の進むにつれ、教材が深みを加へかつ多面的になるにしたがつて、この項及び次の文章の項は、かなり詳述されることになるであらうが、しかしそれは主として指導者の心構を作り、自信と用意とを持つて臨ませるためのもので、決してこれを兒童に與へるものと考へてはならない。世に、良教師は、最もよく調べ、最も少く與へる」といはれてゐるやうに、心に多く蓄へ十分の用意を持つてかかれればとて持つすべてを兒童に與へようとするのは最も下策であつて、指導は徒に煩瑣に流れ、兒童の理會を混亂せしめるばかりである。特に讀み方指導に於いては、讀むことに即して理會せしめ、兒童の理會を限度として適切に與へることが最も大切である。

(ロ) 文章

選ばれた材料が如何に表現されてゐるか。——読み方教材の價值は、ほとんどこの表現によつて決定するものである。随つて特にこの項を掲げて、表現の態度、方法、效果等を主として説明するのであるが、これも學年の進むにつれて、表現の深み、多様性等を加へるので、この項の解説も詳密になる傾向がある。しかしこれもまた主として指導者の用意として掲げるのであつて、兒童にそのまま與へるものと考へてはならない。その點教材の趣旨に述べたところと同様の注意が肝要である。

(ハ) 取扱の要點

教材の如何なる點を如何に兒童に與へるかについて、極めて重點的に示す項であるが、この學年以降重點を更に「読むこと」「書くこと」「話すこと」の三點に集中し、第一期「ヨミカタ教師用書」に於ける「文字の指導や」とばの仕事若しくは「コトバノオケイコ」に該當するものを、この三項目のもとに摘記することとした。

読むこと 朗讀を主體とする読み方指導の一操作であるが、要するに讀むことは文字文章を理會し、それを通して兒童の體驗や思想や感情を豊富ならしめるのが目的であつて、随つて「読むこと」は敢へて直接に實物を學ばせることもなければ、實物によつて理會させることもなく、文章を通すことによつて理會させるのが本體である。もちろん、文章語句等の理會を助けるために、實物や繪畫等を觀せることが大切な場合もあらうが、それはどこまでも文章を理會させるための手段であることを忘れてはならない。

なほ「読むこと」は反復的に習慣づけることによつて正しく読み理會に到達し得るのであるから、いづれの兒童にも反復して讀ませるやうにするのが大切である。

しかも音聲言語指導の立場から、まづ「読むこと」に於いて正しい發音の練習をさせ、訛音方言等を矯正することが極めて大切であり、それもできるだけ早期に於いて基準を示し、これによつて習慣づけるやうにす

べきである。

「讀むこと」は當然解釋を伴ふ。いはゆるセンテンスメソッドの觀點から、最近語句の適切な解釋を等閑視する傾向があるが、兒童の理會力を向上せしめるには、何をにおいても反復朗讀させることと、語句を適切に解釋することが大切である。解釋はできるだけ具體的になすべきであり、この期に於いてもなほ動作に訴へさせ、必要に應じては實物繪畫を示し、また方言と比較して意味を捉らへさせることもあながち無用のことと斷言すべきではない。

讀むことには當然文字の指導が大切である。新出並びに讀替の文字を中心として指導することは、いふまでもなく、既出の文字によつて構成された熟語の指導に注意し、また常に書くことと關聯して文字の記憶を確實にすべきである。

なほカナヅカヒについては、第一期の「ヨミカタ教師用書」に示した趣旨にしたがつて、主として國語の法則に關係の深いものについて適切な

指導をなし、反復練習せしむべきである。

在來の國語指導に於いて、凡そこの「讀むこと」ほど、種々の面から考へられ、随つて種々な理論と方法とが持ち込まれたものはあるまい。その結果、國語指導を著しく「讀むこと」の上に廣げながら、しかも徒に空理に走り、煩瑣にして空疎な指導案と方法を生み、兒童をして却つて讀む機會を失はしめ、的確に理會力を培はしめない現狀にある。試みにその指導案を見れば、あるひは通讀精讀味讀の如き過程がある。讀みに音讀徹音讀默讀といった種類がある。あるひはまた讀ませかたに指名讀列讀齊讀といったことが數へられる。範讀伴讀摸讀といふやうなことも考案される。かくの如き種々の分類はあるひは指導者の用意として一應なされるにしても、これらを一々指導の實際に表さうとすれば、ほとんど技巧の末節に捉らはれるだけで、甚だしきは「讀むこと」それ自體が解體されてしまふことになる。例へば通讀精讀味讀にしても、結局は通讀によつて精讀も味讀も行はるべきであり、特にしばしば

見る精讀の如きはあまりにも技巧的であつて、時間の空費に過ぎないことを思はせることがないでもない。音讀微音讀默讀の如きも、これを教室に即して考へればほとんど抽象論であつて、音讀即ち朗讀が本體であり、他は特殊の場合のほか考へられないものである。なほ兒童の發表を重んずることはよいとしても、全體の兒童の理會に一定の方向を與へず、殊に文の意味や、語句語法の解明が確實でなく、曖昧模糊の間に終らしめるが如きは最も禁物である。兒童が如何なる點に困難を感じ、理會し得ないかを察し、指導者はむしろ進んで簡明的確に解明し、全體の兒童をして疑問を持たしめないやうにすることが大切である。

話すこと 讀み方指導に於ける「話すこと」は、つとめて簡単な發表をさせることを目標とする。即ち教材を共通の話題として兒童と問答し、簡明な話をさせることを意味するものであつて、指導者は常にその話に留意しながら、よきことばを取りあげ、誤れるを正し、殊に教材中のこと

ばを身につけさせるやうにし、これによつて「話し方」の基礎練習をなさしめるとともに、一面教材の理會に資せしめるものである。但し第一期の未分化の時期と異なり、讀み方は讀み方として獨自の面を持つやうになるから、教材の性質によつては、あるひは「話すこと」を制限し、専ら「讀むこと」「書くこと」に専念せしめることが却つて適切である場合も次第に起つて來るであらう。例へば韻文の如きものは徒に「話すこと」のために詩を破壊し、興味索然たらしめる場合が少くない。この「話すこと」の項には、各教材に即して、如何なることを如何に話させるかについて示してあるから、それを標準とすべきであり、なほ話し方指導要項の(一)「話し方」は讀み方指導と緊密な關聯のもとに指導するをも參照して、適切に指導すべきである。

在來も讀み方指導に於いて種々問答や話合は行はれたのであるが、多くは教材の意義に踴躍し、甚だしきは教材からある種の理念や思想を提出させるために行はれがちであつた。兒童に深く考へさせるやう

な負擔の多い話題では、言語練習の役には立たない。この點も併せて注意すべきところである。

書くこと 既にこの期に入れば書き方は課せられてゐないのであるから、ここに「書くこと」といふのは「讀むこと」に即して行ふべき書取及び書寫の範圍に限られる。しかも「書くこと」は「讀むこと」の一面であり、讀んで理會するとともに、書いて理會を深めること、文字の記憶を確實にすること、及び文字書寫の能を養ふこと等を目標として指導すべきである。

この項には、特に讀み方教材中から、具體的に書く教材を選んで掲げてあるから、それに基づいて確實に書かせるとともに、時間の許す限りに於いて、書取または書寫をさせることにつとめる必要がある。

(二) 注意すべき發音文字とは等

特に注意すべきことばの發音につき、アクセント、訛音方言、正しい發音（訓み方等の立場から指摘し、新字讀替文字略字を掲げ、また注意すべき

語句語法修辭等を重點的に示して指導上の手がかり、もしくは參考としたのがこの項である。

(ホ) 備考

教材相互の連絡、修身の教材との連絡、他教科との連絡を示して取扱上の考慮を促し、また極めて必要と思はれるものに限り、教材の參考資料、出典等を掲げたのがこの項である。

元來「讀み方」教材は、文章そのものが教材であつて、資料や原據は素材に過ぎないのであるから、これによつてみだりに教材を補説したり、殊に單純化することによつて始めて教材となつたものを逆に複雑にしたりして兒童を困惑せしめ、況んや原據によつて教材を變更するが如きは、最も戒むべきである。かかる見地から、資料や出典の掲載は、できるだけ少數の限度に於いてなしたのである。

附 録

附録として「新出讀替文字一覽」「運筆順序」が掲げてある。いづれも指導上の参考に資するものである。

綴り方指導要項

話し方指導要項

「綴り方」「話し方」ともに教師の實際指導に俟つて始めて生かされるのであるから、特に教科書は編纂しないのである。しかも大切なことは、どこまでも國語指導の精神に鑑み、各分節が密接に提携して行はるべきことであり、「話し方」の如きは施行規則にも時間を特設しないことが建前となつてゐる。

この見地から、新たに「綴り方」「話し方」兩者の要項を定め、第一期乃至第四期に應ずる指導段階を設け、更に各學年の指導についての大綱を示した。なほ綴り方は要項に即し参考として要項例及び文題をも併せ掲げた。これらの文題は廣く他科目他教科の教材と連絡を取り、兒童生活の實際

を考慮して選んだもので、かくの如くして「綴り方」に於いてもまた國語表現の全體性の發揮を期するものである。

「話し方」はこの要項に定めたところにしたがつて、一面には「読み方」指導に即して基礎練習をなさしめ、一面には兒童の自由な發表を「綴り方」と結んで音聲言語の醇化をはかり、更に他科目他教科の指導、學校行事及び兒童の生活に即して、絶えずよき言語を奨めることを心掛くべきである。

なほ時に時間を特設する場合には、「綴り方」指導要項に掲げた文題を參考とし、これを話題として指導することも可能であらう。

各

說

一 朝の海へ

教材の趣旨

よみかた三の巻頭の詩は、野山を背景に、さくらや小鳥を點出して、おだやかな春景色の中に、二年生になつた喜びを歌つたのであるが、本教材は、朝の海洋を背景とし、兄弟二人の少年を配し、潑刺として無邪氣に伸び行く童心を具象化した韻文である。このやうな詩情を通し、初等科第四學年の第一歩を踏み出した兒童をして、元氣におほらかな希望を抱かせ、快活にして明朗な生活の喜びに浸らせようとするのが本教材の趣旨である。

文章

四句五聯の詩で、まゝ七七、六五、八五などの句もあるが、基調はやはり七五になつてゐる。

まづ第一聯は、朝の海へを元氣よくかけて行く二人の子どもの姿を歌ひ、第二聯は、水天髣髴たる明かるい海洋風景を描き、第三聯は、その海上に向かつて力いっぱい石を投げて遊ぶいかにも子どもらしい動作を活寫し、第四聯は、かもめの可憐な游泳を眺め、最後に靜かに深呼吸をする子どもたちのやうすを歌つてある。

このやうに全五聯のうち、三聯は、直接子どもゝの活動を敘し、他の二聯は、朝の海の自然を歌ひ、これらが交互に排列された構成になつてゐる。しかしその自然なり、子どもゝの活動なりは、第三者が客觀的に表した形のものでなく、詩中の兒童の主體に即して表されてゐるのである。随つて全體を通讀する時、そこに自然と兒童との分離がなく、主客一體たるの境地がうかがはれる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。重韻の反復の多いことに注意し朗讀を指導する。讀みにしたがひ、朝の海へを背景にして

元氣な兄弟の姿を捉らへさせるやうにし、爽やかな春の朝の氣分を感ぜしめる。第一聯では、濱で潮風を浴びてかける兄弟が讀み取られ、第二聯では、明かるい銀色の廣々とした海が開け、第三聯では、この海に向かつて石を投げる兄弟の子どもらしい姿が見え、第四聯では、その海面を飛び水にもぐる美しいかもめが眼を樂しませ、第五聯では、兄弟が元氣一ぱいに潮風に向かつて息を吸ひながら、春を樂しむ氣持を味ははせるやうに指導する。

讀みを反復させることにより、自然に暗誦に導く。

話すこと 韻文であるから、詩の内容に深入りした問答はさし控へ、詩の雰圍氣を想像させるやうに話をさせ、讀むことによつてその詩情をさらに味ははせて行く。なほ次のやうな話合によつて、この詩の構成の理會に資する。

「この詩は、どんなところを歌つたのですか。」

「第一番目では、誰がどうしてゐますか。」

「第二番目では、どんな景色が歌はれてゐますか。」

「第三番目では、兄弟がどうしてゐますか。」

「第四番目では、何が歌はれてゐますか。」

「第五番目では、兄弟がどんなにして、どう思つてゐますか。」

書くこと 新字を中心として指導し、全文の暗誦を利用して詩の形のまゝに書寫させる。なほ次のカナヅカヒに注意させる。

海べをかける

砂をけりながら

波うちぎはをどんどんかける

地平線は銀色で

ばくらは石を投げてみた

ばくたちは

両手をあげて息を吸ふ

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

あさ(朝) — アサ あさ(麻) — アサ

かける(懸) — カケル かける(懸) — カケル

うみ(海) — ウミ うみ(塵) — ウミ

すふ(吸) — スウ すう(懸) — スー

訛音方言

石 — 「エシ」と訛る地方では矯正する。

かもめ — 「カゴメ」といふ地方では注意する。

もぐつて — 「ムグツテ」の訛音を矯正する。

發音

潮 — シオ 弟 — オトート

二人 — フクリ 地平線 — チヘーセン

銀色 — ギンイロ 五六羽 — ゴロッパ

出て — デテ 吸ふ — スウ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 潮(シオ) 銀色

語句語法

「朝の潮風あびながら」波うちぎは「地平線」空と海とがとけあつて「水にもぐつて」海べ「等」は指導を要する語句である。なるべく文に即して理會させるやうにする。

この詩には次のやうに各句の脚部が重韻的に反復され、輕快な感じを與へてゐる。その點を味ははせて行くことが大切である。

朝の潮風あびながら
しめつた砂をけりながら

弟と二人海べをかける。

波うちぎはをどんだんかける。

明がるい海だどこまでも。

明がるい海だどこまでも。

地平線は銀色で。

空と海とがとけあつて。

ぼくらは石を投げてみた。

二の三で投げてみた。

弟の石が海に落ち。

つづいてぼくのが海に落ち。

かもめが五六羽とんで来て。

水にもぐつてひよいと出て。

波にゆられて浮かんでる。

ひよいと浮かんでまたもぐる。

みんな楽しい。
新しい。

備考

連絡

ヨミカタ「トビトカメ」、同「山ノ上」、よみかた三「海」、初等科國語一「夏やすみ」と連絡がある。
初等科音楽二「春の海」と連絡して取扱ふ。

二 潮干狩

教材の趣旨

前課を受けて、海岸での潮干狩に取材した。そもそも學校行事としての潮干狩は單なる遊びではなく、教育目的が考へられての上でなければ意味をなさない。

本教材は、かかる觀點から潮干狩を取りあげ、愉快な海岸での遊びの中に、潮の干満のやうすや、貝類や海藻や、魚などを手に取つて觀察し、兒

童相互に研究し合つたり、先生の説明を聞いたりして、海に親しみつつ海をわからせようとするものである。

随つて本教材を眞に生かさうとすれば、なるべく、児童の體驗と結ぶことが肝要である。しかし、農山村等で、潮干狩の機會に恵まれない地方では、本教材を児童によく讀ませることによつて、児童の他日の經驗に役だつやうにすべきである。

なほ本教材は、よみがた三「海へ」、初等科國語一「おさかな」「ふなつり」、同二「大れふ」、同四「水族館等」と連絡して、水産に關する觀念の萌芽に培はうとするものである。

文章

先生に引率された四年生の児童が、潮干狩をする有様を敘したもので、海岸は、一面に潮が引いてゐても、もう大勢の人たちが、潮干狩をしてゐましたと、突如、海岸の有様から書き始められてゐる。先生に引率されて潮干狩に來たのであるから、いつたん學校に集合し、相當な距離を歩くなり乗物に乗るなりして、海岸に到着したものであらう。しかし、その間の事情を敘述せず、海岸に到着したところから起筆してゐることは、直ちに事件の核心を突いた書き方である。但し、實際の教室に於いて、本教材を中心に、その前後を話合等によつて補足して取扱ふならば、この文章は更に児童の身邊に身近く生かされるであらう。

先生はまづ人員の點呼を行ふ。海岸での危険を顧慮しての用心深さであるとともに、生徒を四人づつ一組の班に分つための便宜からである。四人を一組にし、協同して事物を觀察處理させることは、既に自然の觀察に於いてなし來つたところで、児童はめいめい勝手な考察や操作をするのではなく、どこまでも協同して作業する國民學校の指導精神に則つたものである。しかも、子どもに對して、先生の與へる「海には、どんな生きものがあるかをよく氣をつけて見るやうになさい」といふ注意のことばのうちには、自然の觀察的な指導性がにじんでゐる。さて、この課で登場して來る子どもたちは、例の勇正男、花子、春枝の四

人て、春枝が自分のことを「私」と呼んでゐるので、この文章は春枝が書いたことになる。この四人が一組になつて熊手で海岸を掘ると、餘り深く掘らないうちに、まづ「三センチぐらゐのあさり」が出た。そこで春枝は「あさりは、こんな浅いところにも、ぐつてゐる」ことを知り、ほつたあとに水がしみ出て、まはりの砂が、少しづつくづれて行くので、手ですくつて「かい出すと、大きなはまぐりが出た。そこで「はまぐりは、あさりよりも、少し深いところにあることがわかつたのである。このやうに子どもたちは貝の居所を自然の情態に即して知つて行く。子どもたちは「貝の名前を思ひ出してみました」とあるから、あさりも、はまぐりも、單なる知識としては知つてゐたであらうが、實地に則して觀察したことは始めてのことである。

更に正男は、六七センチもある細長い貝を見つけた。さすが物識りの正男にも名前がわからない。四人で考へても見當がつかない。そこで、子どもだけではわからないので、始めて先生の力を借りるのである。そこに兒童としての學習態度が暗示されてゐる。一方、先生の方では「これは、いいものを見つけたね」と子どもとともにめづらしがり、「まてがひといふ貝です」と教へ、持つて歸つて、みんなて標本を作つて「ごらんなさい」と、その處理の仕方を指導するところに教師の指導の態度が示されてゐる。

貝掘りをすませて、四人の者は「波うち、きはを、ばちやばちや歩きながら、子牛がねてゐるやうな、恰好をした岩の方へ行く。すると、ひやりと、足にさはるものがある。「ぬらぬらした、茶色な海藻で」「はばの廣いひものやうな形をしたものである。「ひやりと、足にさはる」といふ記述から、海岸に打ちあげられてゐるわかめであることがわかる。また「ぬらぬらした、茶色な」はばの廣いひものやうな形」と、わかめを感覺色彩形態の三方面からいひ表してゐる。

花子はそれがわかめであることを知つてゐたが、春枝は、花子にいはれて始めてそれとさつたのである。しかし、春枝からかけ離れたも

のとして、わかめを知識として知つたのではなく、「おわんの中に浮いてゐるわかめ」と結びつけることによつて、わかめをほんたうに會得したのである。

勇の持つて來た葉の根もとにまるい玉のやうな袋のついてゐる、茶色なほんだはらの袋を、みんなておもしろく「バチン、バチン」とつぶして遊んでゐることが敘してあるが、教師のほんのわづかな指導によつて袋の中には空氣がはいつてゐること、海中ではそれが浮袋の役目をするなど、を補足して兒童にわからせることもよいであらう。その際、ほんだはらといつても、兒童には縁遠い名前であらうから、ほんたうに納得させるためには、その身邊にある「お正月のおかざり」を引き合ひに出して、それを聯想して理會を深めるやうに書かれてある。

海藻を拾ひ、それを觀察した子どもたちは、岩のそばの潮溜で「べら」を見つけた。これまで拾つた貝も、海藻も、皆靜止したものであつたが、今度は「からだをくねらせて岩に生えた海藻の間を上手に泳ぐ動的な

魚である。「すきとほつた水の中で、きれいな、六七センチばかりの「べら」が泳いでゐるのであるから、さう簡單には取れない。取れないとなると、子ども心には何とかして「べら」を取りたいと思ふのは自然である。しかし、すばしこい「べら」は、なかなか子どもたちの手にはおへない。やむを得ず子どもたちは、先生の助力にたよるのである。先生が「たもて勢よく、さつとおすくひ」になると、「べら」がたもの、中でびちびちとはねる。子どもたちは思はず萬歳を叫んで、とび上つて喜んでに相違ない。「びちびちとはねました」の一句は、そのやうすを躍如たらしめる含蓄のあることばである。

「べら」の收獲を最後に、波うちぎはを引きあげ、海岸で晝のおべんたらをおいしくたべたのである。ゆつくりした氣持で四方をながめながら、おべんたらをたべてゐると、貝や海藻や「べら」に夢中になつてゐた時には、氣づかなかつた潮の干満にふと氣がつく。おべんたらをすまして、海岸でいろいろな遊びなどをしたことであらうが、そのことは讀

者の想像に任せて一言もふれてない。

いよいよ歸途につくころには、あのあさをほつたところも海藻を拾つた波うちぎはも、もうすっかり海の水でかくされてしまつてゐるのである。この結末の一句は、冒頭の「海岸は、一面に潮が引いてゐて、もう大勢の人たちが、潮干狩をしてゐました」に呼應するもので、兩者相俟つて、この文章の發端と終末とをなしてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、全文の構想に注意させて、冒頭の二行は潮が引いて大勢の人が潮干狩をしてゐること、結尾の三行は潮が満ちて歸ること、その間の部分は子どもたちの潮干狩の敘述であることをわからせる。潮干狩に行つたのは、先生と四年生の一同であり、この文に現れる主な人物は、同じ組になつた男と正男と花子と春枝の四人であることを讀み取らせ、文を通して潮干狩の愉快なやうすを想像させて行く。そのうちに獲物によつて貝類や海藻などを自然に理會させるやうに指導する。

話すこと 海水の干満のことや潮干狩について見聞したことや、拾つた貝類や海藻などについて話をさせる。

書くこと 新字・讀替の文字を中心として指導する。新字は少いが、「狩」「調」「拂」「標」ともに字形筆順の困難なものであるから、扁旁に分けて確實に指導することが大切である。

次の如き文によつて書取を練習させる。

もう大勢の人たちが、潮干狩をしてゐました。

先生が、人員をお調べになりました。

砂を拂つてよく見ると、大きなはまぐりでした。

持つて歸つて、標本を作つてごらんない。

潮がだんだんさして來ました。

次のカナヅカヒに注意させる。

何といふ貝だらう

まてがひといふ貝ですよ

行きませう

するでせう

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

かひ貝——カイ
かひ甲斐——カイ
は葉の——ハノ
は齒の——ハノ

訛音方言

先生——「シェンシェ」と訛らないやうに注意する。
するのです——「スルデス」といはないやうに注意する。
おもしろい——「オモロイ」といはないやうに注意する。
何といふ——「ナンチュ」と訛らないやうに注意する。
名前——「ナマイ」といはないやうに注意する。
ねてゐる——「ネテル」「ネトル」といはないやうに注意する。
岩——「ユワ」といはないやうに注意する。
ひも——「シモ」「ビボ」と訛らないやうに注意する。
拾ひ——「ピライ」と訛らないやうに注意する。
指——「イビ」と訛らないやうに注意する。
いつた——「ユーク」といはないやうに注意する。

からだ——「カガラ」の訛音を矯正する。

魚だ——「ウオジャ」「ウオヤ」といはないやうに注意する。

發音

潮干狩——シオヒガリ
四人——ヨニン
しみ出て——シミデテ
かい出し——カイダシ
六七センチ——ロクシチセンチ
細長い——ホソナガイ
思ひ出して——オモイダシテ
拾つて——ヒロツテ
何だか——ナンダカ
何とか——ナントカ
ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

大勢——オーゼー
一組——ヒトクミ
行くので——イクノデ
出た——デク
出しました——ダシマシタ
何といふ——ナントユー
行きませう——イキマシヨ
勢よく——イキオイヨク
ほんだはら——ホンダワラ

文字

新字 潮干狩 お調べ 拂つて 標(ヒョ)本
讀替 潮干狩

語句 語法

本課には「あさり」「はまぐり」「まてがひ」「わかめ」「ほんだはら」「こんぶ」「べら」等貝類や海藻などが現れてゐるが、これらは挿畫や標本などによつて理會に資するやうにする。

その他指導を要する語句には、人員「熊手」、水がしみ出て「すくつてかい出しました」「標本」「たも」等がある。

なほ本課には貝類や海藻等の形狀をいひ表すために次のやうな修辭が用ひられてゐることに注意する。

小石のやうなもの

子牛がねてゐるやうな岩

ぬらぬらした茶色な海藻

はばの廣いひものやうな形

まるい玉のやうな袋のついでゐる茶色な海藻

備考

参考

十頁の挿畫の右方五箇の貝は「あさり」、左方の七箇は「はまぐり」、上方の細長い貝は「まてがひ」である。十二頁の挿畫は「ほんだはら」である。

連絡

ヨミカタ「川アソビ」、よみかた三海、初等科國語一「ふなつり」「夏やすみ」、同二「大れふ」、同三「朝の海べ」と連絡がある。

三 日本武尊

教材の趣旨

初等科國語卷一の神話は、卷二に於いて「神の劔」「田道間守」「聖德太子」「養老」「菅原道真」「雪舟」「三勇士」に展開して、上代から現代に至る説話の史的系列を見せたのであるが、卷三は更に「日本武尊」「光明皇后」「笛の名人」「千早城」「錦の御旗」「東郷元帥」「濱田彌兵衛」によつて、今一度説話を上代から現代に列ね、卷二卷三相補つて大體國史の各時代を代表させるとともに、卷一の神話と結んで、ここに國民科國史の母胎を養ひつつあるのである。

上古皇威振張の期に於いて、勅にしたがつて東西にまつろはぬ賊を

平げたまうた「日本武尊」は、また實にわが國が生んだ一大英雄であらせられる。古事記があれほどすばらしい大文章を掲げて、尊の御一生を敘し奉つてゐるのは決して偶然ではない。もちろん日本書紀にもその記述はあるが、説話として興味のあるのは古事記である。古事記によると、小碓命こすきのみこと即ち日本武尊は、初め大碓命おすきのみことを殺され、その贖罪の試練として小碓命の武勇傳が展開する。ここにいはゆる末子成功的な英雄説話の形式がある。更に古事記によると、川上建にも兄弟があつて、兄はたちまち殺され、弟があゝの傑物らしい遺言をするのである。つまり日本武尊とからんで、ここに末子成功形式の二重奏が見られる。その東國御征伐にしても、古事記では、尊が西國からお歸りになると、息をつかせられるいとまもなく、勅命によつて、東下し給ふのであつてほとんど悲壯な氣分が漂つてゐる。それはなほ發端からの贖罪試練と思はれる。〔書紀では熊襲征伐後十餘年、即ち尊が三十歳前後になられてから東國へ御出發になる。更に饒津の御難では、駿河と相模と國名の相違があること、賊

の欺く口實が違つてゐること、これらは小異に過ぎないが、書紀の向かひ火の火打石は倭姫命と何等關係がなく、尊は偶然お持ちになつてゐた火打石で、向かひ火をお鑽りになる。〔書紀の一書の文では向かひ火のことさへない〕と、ところで古事記によると、御劔と火打石と、いづれも倭姫命のお授けになつたものであり、つまり二重にからんだ御叔母の御恩情によつて、尊が危くお助りになるところに説話の興味は萬全である。思ふに尊が大碓尊をお殺しになるところに、如きは、書紀に全く記述のないところでおそらく虚説であらう。その他史實として信憑すべきものは、書紀に多いであらう。國史の記述は在來も書紀によつて書かれてゐる。本教材は、一面古事記によつて説話の興味を生かすことにとめては、あるが、國民科國史との關聯を考慮し、それと衝突する部分は、すべて書紀式に改めてある。

この教材は、いふまでもなく、卷一の神話教材と深い關聯がある。特に皇大神宮や草薙劔については、天の岩屋「八岐のをろち」ににぎのみ

ことの發展として、この教材の位置を考ふべきである。

文章

本卷中長篇の一であり、川上たけると「草薙劍」の二篇から成つてゐるが、兩者ともに勅を奉じて賊徒を平定したまふ日本武尊の御事蹟である點に於いて主題の一貫性がある。

前篇「川上たける」は朝廷の仰せに従ひまつらぬ川上建の増上慢を説明し、その具體的事實として宮殿の造營を思ひついたことから、すぐ新築祝ひの宴に移つて、説話が劇的に展開してゐる。

力のあるに任せて、勝手に四方に勢を張り、朝廷の仰せに従はない川上建が「ひとつりつばな宮殿を建て、たくさんの兵士に守らせて、大いにばつてやらう」と考へるのは、上を憚らない僭上沙汰であり、しかもこの計、晝が實は彼の破滅を招く伏線となつてゐるところに説話の妙趣がある。

文章に於いては、以上を序として、滞りなく新築祝ひの宴に移つてゐ

るが、ただ、その日は朝から、大勢の人が出はいりました以下によつて、一人の美しい少女が、何のわけもなくはいり得る隙のあつたことをほのめかしてゐる。

現れたその少女は何か——それはこの宴席の興味の對象であるとともに、實は讀む者の興味の對象である。かひがひしく働き、酒をついて廻るのは何氣ないやうであるが、波瀾はここから生じさうである。飽くまで日本武尊を正面から點出しないで、ただ一少女として敍して行くところに、劇的な表現の効果は十分である。

はなやかな宴は終つて、夜が次第に更け、客はちりぢりに去つて行つた。危機が既に迫りつつあるのを感じしめる。突如、件の少女はすつくと立ちあがつて「たける、待て」と叫ぶが早いか、電光石火、懷劍を抜いて相手の胸を突いた。「たける、待て」と呼びかけたのは、それが卑怯な不意討ちでないことを表すに十分である。

「あつ」と叫んでたけるはたふれた。ふりかへると、今まで可憐とのみ

見えた少女の顔態度に尊い威厳がみちみちてゐる。たけるがぶるぶるとふるへたのは、その威厳に打たれたのであり、「お待ちください」以下のことは、今までの一少女に對することはでなく、その威厳に懾伏した彼が、一面自分の面目を保たうとしながら尋ねたことばである。「西の國で、自分より強い者はない」はずのたけるが今や「苦しい息の下から」かう尋ねるとすれば、その一突きが、如何に適確で猛烈であつたかを考へさせる筆致である。

「自分は女ではない。天皇の御子、やまとをぐな。汝、おそれ多くも朝廷の仰せに従ひまづらぬによつて、汝を討てとの勅をかうむり、ここへ來たのである——」まことに凜然たるおことばである。層一層と力があるばかりでなく、「天皇の御子」といひ、「朝廷」といひ、「勅」といひ、名分はまづかうからかざされ、僭上がたたきのめされ、思はず胸のすつとするものを感じる。

たけるの最後のことばは、さすがに日本人らしいことばである。大

義を正されて、迷妄から一時にさめ、あわてずその罪を謝しながら、尊の御榮えを祈つて御名を奉つたのである。

最後の三行は、前篇の餘收であり、一少女として出現された日本武尊を、改めてここで正面から表し奉り、徐ろに後篇への連絡を用意するものである。

後篇「草薙劍」は、二つの場面を中心として表されてゐる。即ち伊勢に於ける御叔母倭姫命と御對面の場と、駿河に於ける御危難の場で、その前後及び中間に數行づつの文があつて、それらの場面を引き出し、場面と場面とをつなぎ、餘收を以て全篇を終つてゐる。

最初の三行は、後篇を起す序であるが、ここにもまた勅をお受けになつたことが大書せられ、御叔母倭姫命は、さすが御女性として尊が二度の大任をお受けになつたことを、勇ましくも、また、いたはしくお思ひになつた。大切な天叢雲劍をお授けになつたのも、小さな袋をお渡しになつたのも、かうした御慈愛の御心からであるが、それが後の場面で尊

の御危難を救ひ奉り、大任をお果しになる契機となつてゐるのは、實に説話のいふべからざる妙趣である。

さて駿河の御危難は、賊のだまし討ちによるもので、尊の御勇武を恐れた賊は多勢をたのみ、しかも虚偽の策略によつて尊を失ひ奉らうとした。「この國の野原には、大きな鹿がたくさんをります」といひ、尊はおほやうに「それはおもしろからう」と仰せられて、野原へお進みになつた。「身の丈にもあまる草を分けて」とあり、だんだん奥へはいつていらつしやつた」とある。後に賊が火を放つ伏線として大切な敘述である。即ち「火は、ものすごい勢でもえて來ます」と照應する敘述である。

「さては、だましたのか——」川上たけるでは、初めからの御計畫を御遂行になり、最後は目にもとまらぬ御早業で御成功になつた。今度は反對に、一旦賊の術中に陥られ、活路を見出すことによつて却つて賊を苦もなく御平定になつた。説話として變化に富んでゐることが感じられる。

その活路は、御叔母の心づくしの小さな袋によつて見出された。「もしものことがあつたら、忘れずに、この袋の口をおあけなさい」のおことばは、ここでふと尊の御胸によみがへつたのである。袋の中には火打石があつた。これによつて向かひ火をお鑽りになるお考がとつさに浮かんだのである。「天叢雲劔を抜いて」以下、尊の敏捷な御行動が目に見えるやうである。

「あわてたのは、わる者どもです——向かひ火によつて火は方向をかへ、わる者どもは、自分の術中に陥つて焼き殺されてしまつた。そこにも、さつきの「身の丈にもあまる草」の敘述が照應する。

御危難をおのがれになつた尊は、わる者どもを残らず平げ、なほも不退轉の御志を以て東へお進みになる。それにしてもあのふしぎな威力を發揮した御劔は、この時以來草薙劔と申しあげることになり、尊の御歸路、尾張にお残しになつたことが御奇縁となつて、爾來熱田にお祀りすることになつた。熱田神宮がそれである。つまり最初の一節は、

この説話に因縁の深い靈劍の物語によつて、餘情を残しつつ筆を終つたのである。

取扱の要點

讀むこと 「川上たける」と「草薙劔」の二章からなつてゐる長文であるから、一章毎に分けて指導し、後に全體を通じて取扱ふやうにする。
文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。敬語が多く用ひられてゐるから、特に範讀に意を用ひて指導し、次第に讀みになれさせて行く。「川上たける」は特に劇的な構想で書かれてあるから、文の筋を生かして取扱ふやうにする。「草薙劔」は「川上たける」を受けて取扱ひ、尊の御勇武と草薙劔の由來を明らかにする。

話すこと 文章挿畫を中心にして日本武尊の御勇武な點について話をさせ、御名及び草薙劔の由來を明らかにさせる。

次のことばを用ひて敬語について練習させる。

御子 御出發

さしあげませう

いかがでございます

申しあげることになりました

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。字数も多く困難な文字も少ないから、字形筆順に注意して取扱ふ。殊に、「延」「從」「與」「勅」「特」等の如き複雑な文字は、偏旁等に分けて確實に指導する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

くまそは四方に勢を張り、朝廷の仰せにも従ひませんでした。

だんだん増長して、りつばな宮殿を建て、お祝ひをすることになりました。

一人の美しい少女が座敷へ出て、酒をついでまはりました。

たけるが酒によつて、奥の間へ行かうとしました。

給仕をしてゐた少女が、劔を抜いて、たけるの胸を突きました。

汝を討てとの勅をかうむり、ここへ來たのである。

失禮ながら、ただ今、お名をさしあげませう。

いひ終つて、たけるは息が絶えました。

途中、皇大神宮に參つて、御武運をお祈りになりました。

二度の大任をお思ひになつて、特に大切な劔をお授けになりました。
身の丈にもあまる草を分けて、奥へおはいりになりました。

劔で草をなぎ拂ひ、火打石で火をおつけになると、火は急に方向をかへて、わる者
どもの方へもえ移つて行きました。

次のカナヅカヒに注意させる。

立つてをります

たくさんをります

さういふお方でいらつしやいましたか

奥へはいつていらつしやいました

考へていらつしやいました

さういふお方

さうして

かうして

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

さけ道——サケ

さけ鮓——サケ

ひ(目)は——ヒワ

ひ(火)は——ヒワ

訛音方言

強い——ツオイといはないやうに注意する。

いばつて——エバツテと訛らないやうに注意する。

祝ひ——ユワイと訛らないやうに注意する。

手下——デヒタと訛らないやうに注意する。

東——シガシの訛音を矯正する。

わづか——ワツカといはないやうに注意する。

發音

從ひ——シタガイ

思ふと——オモード

手下——テシタ

手傳ひ——テツガイ

一人——ヒトリ

少女——シヨージ

酒もり——サカモリ

夜がふけて——ヨガフケテ

奥の間——オクノマ

行かう——イコ

劔——ツルガ

倒れ——タオレ

息の下——イキノシタ
御年——オントシ
供人——トモビト
御武運——ゴブウン
大任——タイニン
御勇武——ゴユープ
一度——イチド
あやふい——アヤウイ
御いのち——オンイノヂ
ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

御子——オンコ
草薙劔——クサナギノツルギ
皇大神宮——コノダイジンゲ
御をば——オンオバ
一つ——ヒトツ
お出に——オデニ
御心——オンココロ またはミココロ
移つて行きました——ウツツテイキマシタ
御筋——ミツルギ またはオンツルギ

文字

新字 朝廷^テ 從^リ 御視^イワ^リ 座敷 奥の間 給^キキ^ユ 任^ニ 決^ケナンジ^ニ 討^ツて
勅^ツ 失禮^シ 絶^エ お祈^ノり 大任^ニ 特^ニに 身^ノの丈^サ
讀替 増^ゾー長^シ 少^シシ^シー女^メ 突^ツき 平^ヘグイ^ラげ 仕^シへて 大切^ニ 方^ハ向^コー

語句語法

長文で歴史的説話であるから、増長、宮殿、兵士、少女、酒もり、失禮、皇子、供人、御出發、御武運、大任、御勇武、火打石、なぎ拂ひ、方向、かたはし等の指導を要するものが少くない。次の如き句法にも注意して指導する。

「熊襲のかしら、方のあるにまがせて、四方に勢を張り、朝廷の仰せにも従ひませんでした、かひがひしく働いて、夜がふけて、すつくと立ちあがつて、いふが早い、か、尊い、るげん、ぶるぶると身ぶるひをして、苦しい息の下から、おそれ多くも、従ひまつらぬによつて、もしものことがあつたら、うやうやしく迎へて、いかがでございます、さてはだましたのか」

本課には次のやうに敬語が多く用ひられてゐるから、それぞれその用法について指導する。

御子 御年 御をば 御心 御いのち
御出發 御武運 御勇武
御劔 御心
お方 お名 お一人 おもてなし おなぐさみ おことば
おほろぼしになりました
お歸りになった
お待ちください
おあけなさい

お名をさしあげませう

申しあげることになりました

狩をなさつてはいかがでこさいます

おつしやいました

いらつしやいました

備考

連絡

初等科國語一「天の岩屋」八岐のをろち」にぎのみこと、同二「神の劍」と連絡がある。

初等科修身二「能久親王」と連絡して取扱ふ。

四 君が代少年

教材の趣旨

初等科修身二「君が代」と連繋する教材で、重傷を負ひ瀕死の境にありながら、よく國民的信念に生き、兩親を思ひ師を思ひ級友を思ひ、國語の實踐に生き、臨終に「君が代」を奉唱し、つつ十二歳の生涯を雄々しくもまた美しく生き抜いた少年の美談である。

しかも本教材は、初等科修身二「能久親王」とも連絡がある。畏くも金枝玉葉の御身を以て遠く御渡臺あらせられた親王が瘴癘の地に、あらゆる危険と困難とに打ち克たせ給ひ、つづつ皇軍を進め給うて以來、半世紀に滿たない間に臺灣の統治は着々と進み、新附の民の間にはかくも美しい國民精神の花が咲き、つづつあることを物語るもので、まさにこれ大君の御稜威の光被である。ことをつくづくと思はざるを得ない。これを古に考へれば、初等科國語二の田道間守が、垂仁天皇の勅を蒙つて遠く外域に時じくの香の木の實を求め歸り、たまたま天皇の崩御を知つて、御陵前に誠忠の心を捧げつくしたことをも思ひ合はされ、古も今も變らぬ國體の精華に感激を深くするものである。

なほ、國語の教材として特に生かすべき面は、徳坤の國語に對する極めて熱心な實踐的態度である。今もしこの熱意をわが全國の兒童に

活かすならば標準語の指導訓練の如きは期せずして徹底せられ、國民の國語に對する熱愛は、徒に觀念としてではなく、日常の實踐に於いて發揮されるであらう。特に臺灣公學校の三年の兒童にこの事があつたことに鑑み、全國兒童の奮起を促すとともに、これが指導に於いて新たな自覺がなくてはならない。

文章

冒頭は突如として臺灣に地震があつたことを述べ、一轉してその日の朝に於ける徳坤少年の行動が敘してある。場所は、この少年が六歳の時からあづけられてゐる石圍^{いしゐ}牆^{かき}の祖母の家である。

目がさめると、まづ顔を洗つて神棚の拜禮をした。これはこの少年の平常を知る手がかりとなるもので、神棚には皇大神宮の大廳が安置してあることが簡単に説明してある。

それから父を迎へに行くのであるが、その父は昨日出礦^{しゅくわう}坑^{こう}から出て來て、昨夜おそくまで少年と語つたといふ、前後やや複雑な事情がある。時間の餘裕を見て適當に補説してよいところである。

父を探しに出た徳坤は、路上で地震にあつた。内地の建築と違ひ、土と石で固めたやうな本島人の家は、地震には甚だ危険である。ちやうど廟の前にゐた少年に、このやや大きな建築物である廟の土角^{どかく}が落ちて來て、その下敷きとなつたのである。

「おかあさんは、大丈夫でせうね——母は、やや遠い出礦坑にゐる。父がまつ先にかけて、祖母もかけつけたのであるから、少年の心にかかるものは母であつたのである。」

「少年の傷は思つたよりも重く——頭に四十種の裂傷を受けたことは誰にも氣がついたであらう。大腿骨の折れてゐたことは後に醫師の診察でわかつた。」

「かりに作られた治療所——石圍牆から、半籽はなれた德基^{とけき}に設けられた臨時治療所であるが、兒童に地名を教へる必要はない。」

「このつらい手當の最中にも、少年は決して臺灣語を口に出しません」

でした——苦痛を訴へるほとんど無意識的な語も臺灣語でなかったことを意味し、以下徳坤の國語に對する平生の心構が簡明に敘してあるが、これも適當に補説して感銘を深くするがよからう。

「徳坤は、しきりに學校のことをいひました。先生の名を呼びました。また、友だちの名を呼びました——瀕死の床にありながら、學校を思ひ、先生を思ひ、友だちを思ふところに、少年の人格が思ひやられる。それは皇大神宮の大廟を拜し、震害のつさに母を思ひ、堪へがたい苦痛に際しても、臺灣語を口にしないといふ事々の敘述に即して、次第にその全貌が表されて行つてゐる。

「ちやうどそのころ、學校には、何百人といふけが人が運ばれ——突然に起つた大災害であるだけに事情は甚だ複雑である。先生のすぐ見舞に來られなかつた事情を簡明に敘したところである。

「よく、早く、なほつて、學校へ行きたいのです——致命的な重傷を負ひながらこの言を聞く。まことにけなげであるとともにいぢらしいも

のがある。「かはいさうでたまりませんでした」は、先生を通してすぐ讀者に呼びかけた感がある。

「父と、母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある醫院へ送られて行きました——二十二日正午ごろ、苗栗にある醫院へ送られた。それは徳坤が重態だからである。母はこの時までに出礦坑からかけつてゐた。

「その夜、つかれて、うとうとしてゐた徳坤が——苗栗に送られ、やがて受持の先生は歸られた。その夜半、徳坤はしきりに先生を慕つた。夜半過ぎから疲れてうとうとし、東の空が白々と明けるころまたばつちりと目をさました。

「もう一度、先生におあひしたいなあ——父も母もそばにゐる。先生にもう一度あひたい心でいつばいである。もう一度といふことばが、下の「これつきり、自分は、遠いところへ行くのだと感じたのかも知れません」とつながりを持つてゐる。

「ぼく、君が代を歌ひます」——誠に突然であるが、徳坤の平生を知る者には決して偶然でない。神棚を拜し、國語に生き、父母に孝であつた少年の人格の核心が今、國歌を通じて發現するのである。

「少年は、ちよつと目をつぶつて、何か考へてゐるやうでしたが——少年の敬虔な心持の現れと見るべきであらう。果して何を考へたか、それは誰も知ることができない。人間の行動のごくちよつとしたことが、周囲の人々の險に永久に残るものである。これもおそらくその類であらう。」

以下「君が代」の奉唱は、歌と地の文とが交錯して、その光景が簡明に、しかもはつきりと出してあるとともに、感情は一段一段と高潮して行つてゐる。「病室にゐる人たちの心に、しみこむやうに聞えました」といひ、「すすり泣きの聲が起りました」といひ、最後まで、りつばに歌ひ通しましたといふ反面には、最後の努力を集中しながらも、氣息奄々たる徳坤の姿が見えるやうである。

「父と母と、人々の涙にみまもられながら——人々は誰か、看護婦もあらう、君が代を聞いてすすり泣いた人々も考へられる。涙にみまもられるは、合理的にいへば、涙をいっばいためた目に見まもられるであらうが、さういはないところにむしろ味がある。

「やすらかに長い眠りにつきました——もちろん死んだことであるが、君が代をうたひ、國民としてりつばに生きた者の安らかな往生を物語り、頗る餘韻に満ちた終末をなしてゐる。」

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、主人公徳坤の環境を明らかにさせ、感すべきその行ひを文に即して讀み取らせる。

神棚を拜禮したこと

自分の重傷をも忘れて、母のことを氣づかつたこと

常に國語を使ひ通したこと

早くなほつて學校へ行きたいといったこと
最後に苦しい息の下から、君が代を歌つてなくなつたこと
等がその主なる點であるが、あくまでも本教材の表現を通して、兒童に感銘を與へ
るべきである。

話すこと 文章、挿畫を中心にして、徳坤の美談について話合をさせる。

また次のことばを用ひ、話すことを練習させる。

心にしむやうに

心をこめて

目がまはるほどいそがしい

書くこと 新字、讀替の文字を中心として指導する。「震」「傷」「術」「當」等誤りやすい文
字が多いから、偏旁等に分けて確實に書かせる。

次の如き文によつて書取をさせる。

大きな地震がありました。

神だなに向かつて、拜禮をしました。

皇大神宮の大廬がおまつりしてあります。

土角といふのは、ねんどを固めて作つたものです。

おかあさんは、大丈夫でせうね。

傷の手術を受けました。

つらい手當の最中にも、國語を使ひました。

君が代を歌ひ終つて、やすらかに長い眠りにつきました。

次のカナヅカヒに注意させる。

〔國語を使ひ、通し

國語を使ふ

君が代を歌ひます

心をこめて歌ふ

いひました

徳坤といふ少年

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

けさ(今朝)——ケサ

けさ(袈裟)——ケサ

な(名)を——ナオ

な(名)を——ナオ

訛言方言

徳坤といふ——「ト」を抜かさぬやうに注意する。
洗つて——「アローテ」といはいやうに注意する。
向かつて——「ムコーテ」といはいやうに注意する。
使ふものだ——「ツコーモノダ」といはいやうに注意する。
目——「メ」といふ地方では矯正する。
行きたいのです——「イキタイデス」といはいやうに注意する。
出るのですよ——「デルデスヨ」といはいやうに注意する。

發音

皇大神宮——コウダイジングー 大庭——タイマ
ぐらぐら——グラグラ 煉瓦——レンガ
大けが——オーケガ 倒れて——タオレテ
一口——ヒトクチ 治療所——チリョージョ
日本人——ニッポンジン 使ふもの——ツカウモノ
來られました——コラレマシタ 行きたい——イキタイ

行きました——イキマシタ その夜——ソノヨ
夜明近く——ヨアケジカク もう一度——モーチド
何か考へて——ナニカカンガエテ 歌ふ聲——ウタウコエ
いはほ——イワオ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 地震 大麻 固めて 傷 手術 手當
讀替 拜禮 大丈(ジャウ) 天

語句語法

新しい語句が次第に多くなるがなるべく次の如く關係づけて指導する。
「少年」(少女)、「公學校」(國民學校)、「手術」(手當)、「不自由」(自由)、「醫院」(病院)、「病室」(最中)、「最後」
括弧の中の語句は既習のものである。
その他指導を要するものには、「地震」「拜禮」そのとたん「煉瓦」「治療所」等がある。
次の如きいひ表し方の意味を理會させるやうにする。
目がまはるほどいそがしかつたのです。
遠いところへ行くのだと感じたのかも知れません。

心をこめて歌ふ聲は同じ病室にゐる人たちの心にしみこむやうに聞えました。
人々の涙にみまもられながらやすらかに長い眠りにつきました。

『君が代』の歌詞の意味は、國民科修身及び藝能科音楽と連絡して理會を深めるやうにする。
次の「られ」について、受身と敬語との區別のあることに留意し、指導上の心構とするこ
とが大切である。

學校で教へられて

かりに作られた治療所

けが人が運ばれて

先生にまもられて

送られました

みまもられながら

見まひに來られました

けがをしたと聞かれて

先生もはげますやうにいはれましたが

(以上受身)

(以上敬語)

備考

參考資料

筑徳坤少年は、臺灣新竹苗栗郡公館公學校今の公館國民學校の三年生であつた。石圍
塔の祖母の家に托せられ、そこから毎日四軒の道を往復して學校へ通つてゐた。徳坤が祖
母の家に起臥してゐたのには、次のやうな事情がある。

元來徳坤の両親は、石圍塔から更に三軒ばかり離れた出礦坑といふ地に住み、徳坤もそこ
で育つたのであるが、特にわが子の教育に熱心であつた父は、徳坤が六歳の時既にこれを石
圍塔の祖母の家にあづけ、そこから公館公學校に通はせることを楽しみにしてゐたのであ
る。しかるに徳坤は健康ではあつたが身體が頗る小さく、八歳になつても四軒の道を通ふ
ことが困難であつたので、更に二年延ばし、昭和八年四月に始めて十歳で學校へ行くことと
なつた。

徳坤が二年生に進級した時は、七十人の中十位の成績であつたが、そのころから徳坤の行
ひは特に目だつて來た。下手でもよいから國語を使ひなさいと先生からいはれた教を實
によく守つた。級友はもとより、上級生の中にも、先生がゐるられないところでは、つい臺灣語
を使ふ者もあるのであるが、徳坤は決してそれを使はうとしなかつた。時に極めて無意識
に使つた場合に、徳坤は一々先生のところへ行つて、私は今臺灣語を使ひました。どうぞお
許しくださいといつて不注意を謝した。かくの如く彼は國語の使用に對して極めて熱心
であつたから、もし級友中に臺灣語を平氣で使ふ者があれば、相手に忠告し、相手が惡かつた
とあやまるまでは、だしなめて止まなかつた。また學校から歸ると近所の小さい子どもを
集めて學校ごっこをするのが何よりの楽しみであつたが、それも畢竟熱心に國語を教へる

ことを目標としたやうである。まことに彼は國語の符徳坤であつた。

彼はまた日本の神様を祀ることを祖母に頼み、すけた壁に神棚を設けて、皇大神宮の大座をかざり、以來朝夕の禮拜を缺かさなかつた。神棚の掃除は毎日の彼の仕事であつた。

お親の日に學校でもらつた菓子や、學校の實習地でできた米でついたお正月のお餅や、その他よそから貰つた果物など、一度は必ず神棚に供へ、その後でなければ口にしなかつた。この徳坤の敬神の態度に化せられて、家族はみな大座を禮拜するやうになつた。

神に奉仕する精神は、おのづから徳坤の日常の行爲面に現れるやうになつた。學校の水汲みや、便所掃除や、喫煙掃除なども、みんなのいやがることを自分が進んで引き受けるやうになつた。

かうした間に彼は三年生となつた。成績が最優等でなかつたことを、今度も徳坤は残念がつてゐたといふ。

地震のあつた四月二十一日は日曜日であつた。その前日の土曜日に父が出礦坑からたづねて來たので、徳坤の喜びは一通りでなく、その夜はおそくまで父と語つた。

前夜が更けたので、いつも早起きの徳坤は、日曜日の朝誰よりもおくれて起きた。見ると父がゐない。父は早く起きて近所へ出てゐたのである。徳坤は急いで顔を洗ひ、いつもの通り神棚を拜して後祖母に告げて父を探しに出た。村の廟のところへ來たのが朝の六時、ちやうど臺灣の中部地方をゆすつたあの大地震である。徳坤はいにく崩れ落ちて來た土角の下敷きとなつてしまつた。

まつ先に父がかけつけ、祖母がかけつけ、近所の人々がかけつけて掘り出された時、徳坤が口にしたのは、痛いでも、苦しいでもなく、出礦坑にゐる母のことであつた。

少年の傷は意外に重く、頭部の眉の上に左右へ廻る約四十種の裂傷で、頭の骨ががくがく動く程であり、その上、右脚の大腿骨が折れてゐた。

その日の午後、石圍塔から半籽の福基といふところにできた臨時治療所に運ばれて、醫師の手術を受けた。その際も、徳坤はただの一語も臺灣語を發しなかつたといふ。

やがて傷の痛みもうすらぎ、心が落ちついて來ると、徳坤は學校のこと、先生のこと、友人のことを心配し始めた。先生が無事だと傳へ聞くと、しきりに先生に會ふことを願つた。

この地震に臺灣では五萬の家がつぶれ、三千餘人が死し、學校兒童が二百六十二人死んだ。公館公學校にも運ばれた重傷者が何百といふ數で、先生たちはすぐ徳坤を見舞ふわけに行かなかつた。夜になつて始めて三人の先生が福基に來て見舞はれたので、徳坤は泣いて喜んだ。

翌二十二日の晝ごろ、徳坤は受持の先生や父や出礦坑からかけつけた母に護られながら苗粟にある醫院に送られた。さうして徳坤が君が代を奉唱しやがて靜かに永眠したのは翌々二十三日の晩であつた。

越えて滿一年、昭和十一年四月二十一日に、公館公學校の校庭には、徳坤少年の銅像が成り、その除幕式が盛大に行はれた。徳坤の崇高な行爲に感激した人々から寄せられた金と好意によつてできたものである。(挿畫はその銅像による。)

美談を世に残す人は稀である。いはんや人生の行路をふみ出したばかりの少年少女に於いては更に稀である。美談といひ佳話といひ偶然に生まれるものでなく、これを生みしめるものは主人公の平素の心掛と行ひとである。死に臨んで君が代を歌ひ得る少年には、かくの如き平素の眞摯な行實があつたことに思ひを致すべきである。

連絡

初等科修身二「能久親王」と連絡がある。

五 靖國神社

教材の趣旨

初等科修身二「靖國神社」と直接に連繋する教材で、それが教材として作成された趣旨も大體修身と同一であるべきであるから、敢へてここに重ねていふ必要はあるまい。ただ國語教材としての特性をいふならば、この護國の英靈を祀る神社を、二行六聯の流麗な韻文とし、尊嚴な靈域を極めて温か味のある兒童の生活的情緒に即して表現したとこ

ろに深い味と意味があるであらう。因みにいふと、靖國神社は東京市麴町區九段三丁目に鎮座し、維新前後國事に盡瘁して命を殞した勤皇烈士の英魂を始め、爾後の戰役事變等、各地の戰爭に於いて身命を賭した忠勇義烈の英靈を合祀する。社前に天下無比の青銅造の大鳥居があることは著名であり、また社側に遊就館があつて、御物、古今の武器、戦利品、乃木將軍の遺品等が陳列してある。

文章

七五調二行六聯の流麗な韻文である。敬體口語によつて表され、全體として童詩的な趣はあるが、しかし感情といひ、表現といひ、相當な深さを持つてゐることに注意すべきである。

春は九段のお社に、

櫻が咲いてをりました。

春の靖國神社といへば、春の例大祭を聯想するが、これは必ずしもさうでない。櫻の花の咲くのは四月上旬で、例大祭は下旬である。祭禮

の如き雑踏の日よりは、むしろ平日のやや閑寂な趣にふさはしい。九段は九段坂の略で靖國神社は九段坂の上に在り、もと「九段の招魂社」といつた。今この坂はだらだら坂となり、段坂の意義を消失し、九段はむしろこの邊の地名のやうに考へられるやうになつた。神社の境内には櫻樹が多く、上野公園などとともに櫻の名所として數へられ、まことに忠魂を祀るにふさはしい感がある。

日本一の大鳥居

かねの鳥居がありました。

九段坂の上にそそり立つ大鳥居は、青銅の鳥居として日本一である。「日本一の大鳥居」といひ、かねの鳥居とくりかへして受けたところにおもしろみがある。

とびらは金の御紋章、

御門を通つて行きました。

大鳥居をくぐつて進む参道は、廣大であり、かつ長い。それを一筋に

進んで神門をくぐる。紫色の幕に菊の御紋章を染め抜いたのが神々しく拜されるが、特にこの神社として尊く拜されるのは、扉に雄大莊嚴に表された金色の菊の御紋章で、その神々しさにはおのづから頭のさがるものがある。「御紋章」と「御門」とが同韻相受けて、表現のおもしろさをなしてゐる。

かしは手うてばこうこうと、

心の底までひびきます。

神門をくぐり、更に眞直ぐに進んで社殿の前に出る。この一聯はいふまでもなく社前の拜禮を主體的に表したのであるが、こうこうと、心の底にひびくのは、まさに敬虔な心の表白である。「こうこう」は、やや古いことばを感覺的に新しく生かしたもので、堅く澄んだ音のひびく形容である。よく大建築に反響する「鳴き龍」でも思はせるやうな響きで、かしは手の音が反響して、心の奥底までひびくといふ物心一如の表現である。

櫻の花の遣族章、

女の人も見えました。

いかに平日とはいへ、参拜者は多い。殊に臨時大祭や、例大祭も間近いころとて、遣族章をつけた遣族の参拜も見受けられる。その遣族章をつけた人々の中には、つましやかな婦人の姿が特に目だつのである。「櫻の花の遣族章」が、第一聯の「櫻が咲いてをりました」と呼應して表現のあやをなしてゐる。「女の人は、女の方」といふのと同じく、見えましたは「ゐました」と同意で、いづれも敬つたいひ方である。靖國社頭に見かける遣族の姿には、特に敬意を表するのが人情である。

遊就館の入口に、

人が並んでをりました。

参拜を終つて右へ曲ると、やがて遊就館の前である。「人が並んでをりました」は、團體が何かの參觀人たちを捉らへたもので、大勢の人が並んで入場を待つ光景と見れば、よくその意が得られるであらう。

この詩に通ずる表現形式は、第一句が「お社に」「大鳥居」「御紋章」、こうこうと「遣族章」「入口に」といつた名詞止め、または名詞副詞が助詞によつて受けとめられた形であること、第二句が「をりました」「ありました」「行きました」「ひびきます」「見えました」「をりました」「等」「ます」「ました」の敬體助動詞で終つてゐること、そこにこの詩の整然たる統一感があり、また極めてあたたかな柔かいふくらみを持つてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。七五の流暢な調子であるから、朗讀を重視して取扱ふやうにする。詩は靖國神社参拜の道順によつてゐるから、各聯を追うて参拜させるやうな心持で讀ませて行く。大和心を象徵する櫻、日本一の大鳥居、尊い御紋章と御門、神々しい拍手の音、遣族章をつけた女の参拜者、武勳を語る遊就館と讀みを進め、靖國神社に對する尊崇の念を養ふやうにする。

讀みを反復させることによつて自然に暗誦に導く。

話すこと 靖國神社について神社のあるところ祭神春秋の大祭臨時大祭等について、児童の既知の事項を次のやうな問により話をさせる。

「靖國神社はどこにありますか。」

「靖國神社にばどういふ人が祀られてゐますか。」

「いつお祭がありますか。」

「春のお祭秋のお祭について知つてゐることを話してごらんさい。」

詩については、参拜の道順によつて歌はれてゐること、その時見聞したことや感じたこと等を問答する。

書くこと 新字を中心として指導する。「櫻」「遺」「族」ともに扁旁等に分けて取扱ひ、暗誦を利用して全文を書寫させる。その際次のカガツカヒに注意する。

春は

とびらは

かしは手

をりました

見えました

注意すべき發音文字ことは等

發音

日本——ニッポンイテ

大鳥居——オートリン

金の御紋章——キンノゴモンショ

御門——ゴモン

入口——イリゲチ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 櫻、遺、族、章

讀替 お社。

語句語法

各聯の第二句に「をりました」「ありました」「行きました」「見えました」「をりました」と脚韻的に反復して調子を調へ第四聯は「びきます」と現在法で變化を與へてゐる點に注意して指導する。また「日本」の大鳥居、かねの鳥居「がありました」とびらは金の御紋章「御門」を通つて行きました」と重韻的の反復があり、「かしは手うてばこうこう」との擬聲的な修辭も施されてゐるから詩の韻律の美をも味ははせることが大切である。

備考

連絡

よみかた四に「いさんの入營、金しくんしやう」病院の兵たいさん、初等科國語一、支那の春、
軍犬利根、同二、軍旗、るもん袋、三、勇士、東京と連絡がある。
初等科修身二、靖國神社、能久親王と連絡して取扱ふ。
初等科音楽二、靖國神社と連絡して取扱ふ。

(以上 四月)

六 光明皇后

教材の趣旨

あをによし奈良の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり

と古人の詠んだ花やかな奈良時代の歴史の繪巻物の中で、光明皇后の御姿は、慈悲の權化としてひときは照り映えていらせられる。殊に施藥悲田兩院をお設けになり、國民をおいたはりになつたことは、かくれもない、けだかい御高德の現れである。

施藥院は、續日本紀によれば、天平二年四月、始めて皇后職に置かれ、諸國から藥草を集められたことが記されてゐる。また當時の藥草は、正倉院に現存してゐるが、施藥院を設けられた場所はずまびらかでない。要するに施藥院は、光明皇后の御心によつて造られた一種の慈善病院の如きものと解される。

本教材は、その施薬院を中心に、世に傳へる薬湯の傳説とからませ、往時を想像して、光明皇后の御慈悲の程を書き表し、兒童の心情にうつたへ、永世變ることなき皇室の御仁慈に深く思ひを致させようとしたものである。殊に女子の兒童には、敬虔な親しみの中に、畏れ多くも、日本婦人の模範としての光明皇后を感得させようとしたものである。随つて、この教材を通して、兒童の一人一人に、

み民われ生けるしるしありあめつちの榮ゆる時にあへらく思へばと、萬葉歌人が歌つたと同じやうな、いつくしみあまねき皇室をいたたくわが國民の衷心からなる悦びを、感銘させようとしたものである。

文章

光明皇后が、聖武天皇の皇后であらせられることから説き起し、堂塔伽藍が、美しい奈良の自然を背景に、薨を並べてゐることを敘して、やがて施薬院を詳述する序としてゐる。

往時の雄大な奈良の都の景觀は、今日奈良を中心とした附近の古代

建築の規模によつても想像される。施薬院も、たぶんそれらの堂々たる建物の中にまじつて立つてゐたことであらう。このやうな想像のもとに、本教材の最初の部分は描かれたものである。

施薬院は、病人を治療する病院であつたことには相違あるまいが、如何なる設備のもとに、如何なる治療を、どこしてゐたかは、つまびらかでない。それで以下の施薬院の有様は、全然想像によつて書かれたものである。

まづ、眼病の子どもに付き添ふ母親と、おなかの病氣で長い間寝てゐた老婆とを點出し、二人の會話を借りて施薬院の治療の効果と、光明皇后の御仁慈を感謝する心持とを表すとともに、光明皇后が、時折施薬院の病人をお見舞ひになり、御仁慈によつて重病人でも治療するうはさが、全國にひろがつたといふことが記述してある。更に、薬湯の一風景を述べ病人たちの會話を通して、光明皇后の御慈悲を一そう詳述してある。

このやうに、教材の大半の敘述は、施藥院の病人を通して、光明皇后の御高德を間接に表してあるが、最後に「光明皇后はこの藥の風呂へもおいでになつて、一人一人をおせわなさいました」と、光明皇后がこの藥湯へ遂にお姿をおあらはしになるやうに書かれてある。さうして、「千人めの病人のおせわをなさつた時、急に病人のからだから光がさし出て、あたりが金色にかがやき渡つたといふこととす」といふ終末の記述によつて、これまで漸層的に述べて來た光明皇后の御仁慈を最高度に達せしめ、全文の結尾としてゐる。その場合、病人のからだから光がさし出て、あたりが金色にかがやき渡つた」といふことは、光明皇后の御名の如き慈悲深き御威徳と、千人の病人のおせわをなさるといふ大願を成就あそばされた御喜びと、おなさけと光榮に感泣する病人の歡喜とで、あたりが金色のやうに、明かるく照り映えたと解すべきで、傳説の如く、千人めの病人は、佛菩薩の化身であつたなどと兒童に示すべきではない。

なほ地の文では、光明皇后と申しあげ會話の文中では「皇后様」と區別して、意識的に用ひられてあることに注意すべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。冒頭の文によつて、光明皇后の御身分と、美しい奈良の都に病院をお建てになつたことを明らかにする。御仁慈としては、

大勢の病人をお救ひになつたこと

時々病院へお見まひになつたこと

藥の風呂をお作りになつたこと

風呂にもおいでになり、病人をおせわになつたこと

などを讀み取らせ、病人たちのことばと結びつけて具體化し、感激させるやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として、光明皇后の御仁慈について話合をさせ、その感銘を深める。

次のことばを用ひて話すことを練習させる。

長い間寝てゐましたが、このごろは、おかげでだいふよくなりました。
やさしいおことばを、たまはることさへありました。
まつたくその通りだ。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「配」湯「願」は、扁または旁を誤り
やすいから注意を要する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

皇后様が、病院をお建てになりました。

目の病で心配しました。

おなかの病氣で、長い間寝てゐました。

あたたかい藥の湯が、あふれてゐました。

千人の病人のおせわをなさるといふ大願をお立てになつたさうです。

病人のからだから光がさし出て、あたりが金色にかがやき渡つたといふこと
です。

次のカナヅカヒに注意させる。

うれしさにいふ。

きつとなほるといふうはさ

せわをなさるといふことだ

せわをなさるといふ大願をお立てになつたさうだ

かがやき渡つたといふことです

注意すべき發音文字ことば等

訛音方言

見えて——「メーテ」の訛音を矯正する。

あたたかい——東京邊では「アツクカイ」といふ。

いただいてゐれば——「イタダイテレバ」といふ地方では注意する。

發音

木立——コダチ

大勢——オーゼー

日本中——ニッポンジュー

御自分——ゴジブン

大願——タイガン

一人一人——ヒトリヒトリ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 心配 寝て 湯

讀替 病(ヤマイ) 大願(ガン) 金色

語句語法

「お恵み、たまはる、あふれて、うはさ、大願、金色」等は、指導を要する語句である。
次の文例により、助詞に注意し、文意を明らかにする。

たまはることさへありました。

この子は、ひどい目の病で、ものが見えなくなり、はしなやかと心配しましたが、毎日、かうして薬をいただいてゐるおかげで、だいそうよくなりました。

私は、おなかの病氣で、長い間、療養してゐましたが、このころは、おかげで、だいぶよくなりました。

備考

參考資料

光明皇后ノ湯ヲ沸シテ、十方ノ衆生ニ浴シ給ヒテ、一日二三人ガ垢ヲ摺リ給ヒケルニ、イブセク怖シ氣ナル乞兒ノ、我が垢摺リテ給ヘト申シケレバ、物憂キ事ニハ思食セドモ行ヲ破ラジトテ、竊ニ垢ヲ摺リ給フガ、我汝ガ垢摺リツト人ニ語ルナト宣ヒケレバ、此ノ乞兒光ヲ放チテ、汝モ亦阿闍佛ノ垢摺リヌト人ニ語ルナト云ヒテ、カイケスヤウニ失セニケリト云ヘリ。(寶物集卷十六)

天平應眞皇太后光明子者。淡海公第二女也。聖武帝儲貳時。納爲妃。天平元年八月。册爲皇后。體良殊麗。似有光耀。故名焉。(中略)聖武帝造園分寺東大寺。皆后之勸發也。又置悲田施藥二院。恤天下饑饉。及東大寺成。(中略)一夕閣裏空中。有聲曰。后莫誇也。妙觸宣明。浴室淨濯。其功不可言而已。后惟喜。乃建溫室。令貴賤取浴。后又誓曰。我親去千人垢。君臣憚之。后壯志不可沮也。既而薨九百九十九人。最後有一人。偏體疥癩。臭氣充室。后難去垢。又自思而言。今滿千數。豈避之哉。忍而揩背。病人言。我受惡病患。此瘡者久。適有良醫。教曰。使人吸膿。必得除愈。而世上無深悲者。故我沉痾至于此。今后行無遮悲濟。又孔貴之。願后有意乎。后不得已。吸瘡吐膿。自頂至踵皆遍。后語病人曰。我吮汝瘡。慎勿語人。于時病人放大光明。告曰。后去阿闍佛垢。又慎勿語人。后驚而視之。妙相端嚴。光耀馥郁。忽然不見。后驚喜無量。就其地構伽藍。號阿闍寺。(元亨釋書)

連絡

初等科國語三「日本武尊」と排列上の關聯がある。

七 苗代のころ

教材の趣旨

よみかた三の「つゆ」初等科國語一の「田植と連繫し、季節の上からいふと、それに前行する苗代の行事を對象とし、田園の自然と人生とを一體として表現したかをりの高い教材である。なほ稻に關する田園行事としては、初等科國語二「稻刈」とも關聯し、苗代田植稻刈と、ほぼその全體を重點的に掲げ得たのであるが、理數科理科と關聯して、その體驗實感を生かすとともに、土に親しむ田園の情景を把握せしめ、國民的感情に培ふべき教材である。

本教材は季節からいふと、春のなかばから田植前まで約二箇月にわたるやや長い時期の敘述で、その間の自然の推移と、これを背景として展開する人生の活動が極めて印象的に描かれてある。全體として一種の敘景ではあるが、それはこの巻の「夕日」の極めて瞬間的な自然の動きをうつしたのと異なり、時間的推移に於いて長く、しかも自然と人生の交錯した、やや複雑な敘述であることに注意を要する。

文章

この文章には、二つの主題が交互に現れてゐる。その一は即ち蛙の聲であり、他の一は田園に於ける人間の活動である。この二つの主題が互ひに發展しながら三度交錯する間に、春は初夏となり、やがて夏となる。かうした表現法は、音樂の作曲手法を思はせる。さうして蛙の聲はいはば獨奏的であり、田園の活動は合唱的である。しかも最初は極めて簡素であつた蛙の主題が、三度目に現れると忽ち田園にひろがり、人間の活動を壓して天地になりひびきながら、この文の終曲をなしてゐる。

「春の少し暖い晩、くく、くくと、蛙の鳴く聲がします——第一に出た蛙の主題である。「くく、くく」といふのは、後の「ころころ」といふのに對して頗るしのびやかで、三月の下旬乃至四月上旬ごろの、やや暖い晩に珍らしくも鳴き出した蛙の聲である。

「そのころから、晝間は廣いたんぼの一部で、もう苗代の仕事が始ります」以下第二主題たる田園行事で、次節はその發展である。種蒔を八十

八夜のころとすれば、苗代の田起しは四月中旬には少くとも始る。

「黒い牛が、ゆつくりと引いて行くからすきのあとには、ほり返された土が、暖い日光に照らされます——悠々たる牛の歩みとともに、土がほりかへされ、新しい黒土が和煦たる春の日に照らされる。田園の春でなくては見られない情景である。「からすき」は土を深く掘り起し、くれ打ちは、からすきで掘り起した土を攪碎する作業であり、まぐは、更に上の表面を細かく耕しながら、かきならすのである。

「夜、遠くの田で鳴く蛙の聲が、ころころ、ころころと、にぎやかに聞え始めます——再び蛙の聲の主題が出る。前の「くくく」にくらべて、やや盛んな聲である。「遠くの田」といふのは、耕された苗代田を意味し、水が張られてゐるので、蛙はそこへ集つて鳴く。しかし苗代田は普通人家から離れた日當りと風通しのよいところに仕立てられるから、夜、聞く聲は遠いのである。

「種まきがすんで十日あまりたつたころ——再び田園の主題が出る。

八十八夜前後に種蒔をすれば、これは既に五月の中旬に入るころであり、次ぎの節の「苗が二十センチぐらゐ」にのびるのは五月下旬以後である。中旬から下旬にかけて、苗代田以外の田といふ田が掘り起され、水がたたへられるのである。

「蛙のすみかが、かうして、たんぼいつばいにひろがるのです——三度蛙の主題が出た。しかも、家の前も、後も、横も、まるで夕立の降るやうに」といひ、「雨戸をしめてから、始めてほつとする」といひ、田園の主題を壓倒し、それを併呑しつつ、交響して、この文の尾部をなしてゐる。田耕がひろがるにつれて、蛙のすみかもひろがり、遂に人間の住居の周囲は、蛙の聲に満ちあふれるのである。「雨戸をしめてから、始めてほつとする」は全く實感の敘述である。

「もうまもなく、田植が始ります——田植を豫想させながら希望と餘情とを以て簡潔に結んである。

取扱の要點

読むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ冒頭の「春の少し云々」と結尾の「もうまもなく田植が始ります」から、その期間を大體想像させ、苗代の仕事と蛙の鳴き聲とを文に即して、次第に忙しく賑はしくなつて行く農村情趣を味はせるやうにする。かうした敘景的な文章では特に讀みを重視し、讀むことによつて文意を深めることが大切で、範讀も注意して行ふやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として、苗代の仕事について話合をさせる。大都市等に於いては、寫眞繪畫等によつて特に苗代について指導する必要がある。田の土がこまかく耕されるころまでのこと、種まきがすんで十日あまりたつたころのこと、苗が二十センチぐらゐのびたころのこと等に分けて話合をさせる。

次のことばを用ひて話すことを練習させる。
汗ばむ 聲をひそめて 自分たちの世界 ほつとする

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導し、字形筆順に注意する。
次の文によつて書取を練習させる。

新しい土が、暖い日光に照らされます。

田の土は、だんだん耕されて行きます。

たんざく形の苗代に種まきをしました。

男も、女も、牛も、泥田の中で働きます。

次のカナヅカヒに注意させる。

三センチぐらゐ。

二十センチぐらゐ。

汗ばむぐらゐ。

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あつ(い)い——アツイ

あつ(い)厚——アツイ

訛音方言

苗代——「ナ—シロ」の訛音を矯正する。

にぎやか——「ニンヤカ」といはいやうに注意する。

三センチぐらゐ——「グライ」といはいやうに注意する。

あそこ——「アスコ」「アッコ」といはいやうに注意する。

七 苗代のころ

七 苗代のころ

後も——「ウシロ」を「ウシト」といふ地方では矯正する。

發音

苗代——ナワシロ

晝間——ヒルマ

行く——イク

夜——ヨル

十日——トーカ

間を置いて——アイダオオイテ

泥田——ドロタ

夕方——ユーガリ

前も後も——マエモウシロモ

夕立——ユーダチ

雨戸——アマド

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 照らされ 泥水 耕され

讀替 苗代 日光(コ) 種まき たんざく形

語句語法

「からすき」まぐは「くれ打ち」種まき「たんざく形」泥田「蛙のすみか」等は繪畫寫眞等によりなるべく具體的に指導する。

次の如きいひ表し方の意味を理會させる。

田に水がなみなみと張られます。

汗ばむくら暑い日ざしを受けて男も女も牛も泥田の中で働きます。

ひたひたと水がたたへられてゐます。

ゑんりよをするやうに聲をひそめてゐます。

さも自分たちの世界だといふやうに、さわぎたてます。

まるで夕立の降るやうに蛙の聲でいつぱいです。

静かだといふなかの夜も、このころは雨戸をしめてから始めてほととするほどです。

次の蛙の鳴聲は互ひに照應させて賑やかになるさまを想像させる。

くくくく。

ころころ、ころころ。

家の前も後も横もまるで夕立の降るやうに、

次の「れ」「られ」などの如き受身の助動詞に留意し、指導する上の心構とすることが大切である。

ほり返された。

照らされます。

水がなみなみと張られます。

七 苗代のころ

耕されて行きます。
水がたへられてゐます。

備考

連絡

初等科國語一「田植」と連絡して取扱ふ。

自然の觀察五「植ゑつけ」と連絡がある。

初等科理科一「モミマキ」「田ノ土」「田植」と連絡して取扱ふ。

初等科音楽一「田植」と連絡する。

八 地鎮祭

教材の趣旨

學校で、新しく講堂が立つことになり、その地鎮祭が行はれる。本教材は、その地鎮祭のありさまを正面から描いて、きよらかておごそかな祭典の雰囲気にとらせ、その感動を通じて敬神の念に培ふとともに、

教師も児童も一つになつて、學校の完成を喜び、その永遠な發展を祈る愛校の精神にめざめしめようとするものである。

神事やお祭に關する教材は、ヨミカタ一以降多數のものが提供されてゐるが、ここでは特に神前の祭祀を取り上げ、修祓降神、獻饌、祝詞、拜禮、撤饌、昇神などの儀式的順序にしたがつて、そのやうすを児童の理會に即するやうに表してある。しかもかくの如き祭祀は遠い神代の神事につながりをもつもので、その點に於いて初等科國語一の「天の岩屋」と關聯して取扱ふことが大切である。

文章

文章は、大體三つの部分から成り立つてゐる。即ち第一の部分は地鎮祭が始まる前のこと、第二の部分は地鎮祭の儀式、第三の部分は式がすんでから後のありさまである。

冒頭に、「私たちの學校では新しい講堂が立つことになりました」とあるが、ここには、待ちに待ったわが校の講堂が、いよいよ建築のはこびに

なつたといふ喜びを、言外に託してをり、最後の「新しいその講堂に、全校の先生も、生徒も、いつしよに集つて並んだ時のことを思つて、うれしさにいつばいになりました」と照應させて、地鎮祭に参列してゐる兒童の喜びと希望とを表し、それを全文の基調としてゐる。

「午前十時に、四年以上の生徒が、そこに集合しました」以下校長先生から、地鎮祭の大切な儀式であることを聞き、その意義を聞くことによつて、まづ嚴肅な祭式を描き出す序たらしめてある。

「敷地の中ほどに、せいの高い竹が四本立てであつて」といふところから、記述は次第に寫實味を帯びて来る。四本の竹は、神籬（かみかき）のことであつて、さか木のかはりに、竹を立てめぐらし、それを假に神のいますところとするのである。

「そこへ神主さんが、三人お見えになりました」――兒童には、神主さんのやうすがものめづらしく、まづ白な着物も、えぼしも、しやくも、くつも、目につくのである。

「氣をつけ」の號令で、あたりが水をうつたやうに靜かになる。校長先生の「今から、地鎮祭が始ります」といふ聲が嚴肅にひびく。

そこで修祓の儀があり、いよいよ降神の儀にうつる。先拂ひの「オ」といふ聲が特別におごそかにひびくのはこの時である。

次は獻饌である。米酒、餅魚をそれぞれ別々の三方に供へ、野菜類を一つの三方に、果物をまた一つの三方に盛り合はせて供へる。このほかに鹽や水なども供へるのであるが、ここには眺めてゐる兒童に特に目立つて見えるものが取り上げてある。なほ、いちごやバナナによつて季節の感じも表してある。きちんと供物が並んだ祭壇に、日光が照り、いかにも美しくすがすがしく、にぎやかに見えるのである。

獻饌が終ると、地鎮祭の祝詞が讀みあげられる。祝詞は、大切な儀であるが、古いことばであるために、兒童たちにはその意味がわからないとしても、あたりまへであらう。しかし「おちついた聲で、うやうやしく讀まれました」といふところに、兒童らしい感動が十分現れてゐる。

それから、うがちぞめの儀があるが、これは地鎮祭として特に意味のあることである。つづいて校長先生が、先生がたを代表して玉ぐしを捧げられ、また高等科の生徒が全校の生徒を代表して玉ぐしを捧げる。これが拜禮の儀である。以下撤饌の儀があり、昇神の儀があつて祭式が終る。

「休め」の號令で、今までのはりつめてゐた嚴肅な氣持に、ゆとりができて、退出する三人の神主さんのやうすがいかにも美しいと感じられる。目近に見た白い着物は、日光を浴びてまぶしいほど光り、汚れのない清らかな姿に見えたのである。

おしまひに、山田先生の音頭によつて校歌を合唱する。先生がたも、兒童たちも、みんな元氣な聲を出して、たのしく校歌を歌ふ。歌ふ心に浮かぶものは、新しい講堂のことであり、その中に參集する人々の晴れ晴れとした顔である。嬉しい思ひは更に飛んで、四大節などの式があげられることを思ひ、學藝會が開かれる時のことも想像されて、うれし

さがこみあがつて来る。

神聖な終典を點出し、その間たえず兒童の心情を寫しながら表現してあるところに、この教材の特色がある。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字・語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みにしたがひ、冒頭に注意させて、講堂の地鎮祭であることをわからせ、講堂の位置、地鎮祭の意義、式場のやうす式の順序、次第を次々と讀み取らせ、結尾の校歌を歌ふところでは、この學校の兒童が、講堂の落成する日のことを想像して喜ぶ氣分に共感させるやうに取扱ふ。

話すこと 文章挿畫を中心として、地鎮祭について、その意義、式場のやうす式の順序、次第等について話をさせる。

次の助動詞を用ひて敬語の用法について練習させる。

ゐられました

歸られました

運ばれました

讀まれました

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。『式』祭『全』は誤りやすい文字であるから、點畫をよく觀察させる必要がある。

次の如き文によつて書取を練習させる。

學校では、新しい講堂が立つことになりました。

今から儀式が始ります。

のりとの意味はわかりませんが、おごそかに感じました。

うがちぞめといふのは、鎮で土をほる儀式であります。

高等科の人が、全校の生徒を代表して拜みました。

次のカナヅカヒに注意させる。

お供へもの

供へられました

お供へしたものと

いはれました

いひました

地鎮祭といふのは

うがちぞめといふのは

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

ふつて(振つて)——フツテ

くは(鋸)——クワ

ふつて(降つて)——フツテ

くは(鋸)——クワ

訛音方言

大根——ダイコといはないやうに注意する。

にんじん——ネンジンの訛音を矯正する。

前——マイと訛らないやうに注意する。

發音

今日——キョー

東側——ヒガシガワ

教室の後——キョーシツノウシロ

せいの高い——セーノタカイ

四本——シホン

神主——カンヌシ

大庭——タイマ

先拂ひ——サキバライ

白木——シラキ

三方——サンボ

地面——ジメン 玉ぐし——タマグシ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 講(コ)室 儀式 鍛(クワ) 高(タカ)等科 全校

讀替 地鎮祭 大根 意味 高(コ)等科

語句語法

「集合」儀式「おほらひ」「日光をあびて」「意味」「代表」「全校の生徒」「記念すべきおめでたい日」等は指導を要する語句である。

本課には「地鎮祭」「先拂ひ」「うちぞめの如く本文中に説明されてある語句がある。また「神主さん」「えぼし」「しゃく」「木のくつ」「大庭」「祭壇」「のりと」「玉ぐし」「校歌」等は文に即して直観的に指導する。なほ「大庭」は初等科國語「参宮だより」及び同三「君が代少年の課の「大庭」と連絡して御破に用ひる大庭であることに注意を要する。また「木のくつ」は木履であるから靴と誤解させないやう「敷地」は「あき地」と比較して理會を確かめる。

次の「られ」「れ」の敬語の助動詞に注意して指導する。

「木のくつをはいてゐられ」ました。

「三方にのせて供へられ」ました。
「先拂ひがとなへられ」ました。

「といはれ」ました。

机の上に運ばれ「ました」。

のりとを讀まれ「ました」。

うやうやしく讀まれ「ました」。

玉ぐしをあげて拜まれ「ました」。

前を通つて歸られ「ました」。

九 笛の名人

教材の趣旨

十訓抄・今鏡等に出てゐる古典の傳説に取材した史的説話であつて、初等科國語二の「田道間守」「養老」「菅原道真」「雪舟」等と一聯の系統をなすものである。古來わが國には、藝術の至妙境と道義の世界とが一致

する説話が多く傳へられてゐるが、本教材もまさにその類であり、かうした説話に親しませ、歴史的感情に培ふとともに、一面情操の陶冶に資するものである。笛の名人用光が死に臨んでの毅然たる態度、人心を感化する至妙の藝術の深さ、強さ、それ等を文章に即しつつ、兒童に理會させることが肝要である。

文章

笛の名人用光が土佐の國から京都へ上る船旅の途中、ある港へ泊つた夜のできごとである。昔のことであるから、海賊の危険が相當にあつたことは、諸種の文獻にも見えてゐるところである。

「どやどやと乗り移つて來て用光をとり圍んでしまつた」は、穩かな冒頭の敘述から一轉して、大事件の出來を簡潔に述べたもので、樂人である用光は、海賊と抗爭するだけの武力もなく、またとつさのこととて武器も間に合はない。しかし、じたばたすることなく死を覺悟した。だ藝術に一生を捧げ來たつた樂人として、最後にもう一度精魂こめて笛を

吹いて死にたいと念願し、海賊どもにそれを要求する。「さうして、こんなこともあつたと世の中に傳へてもらひたい」といふことは、樂人としては無理もないこの世への執着である。海賊どもは、顔を見合はせて「どうしようかと相談したが、まあ、ひとつ聞かうではないか」と半ば嘲侮をこめた優越者の寛大を示す。ここは、後段の海賊の感歎のことばに對し伏線をなすところで、この嘲侮のことばが後の感動を一そう効果的にしてゐるのである。「曲の進むにつれて、用光は、自分の笛の音によつたやうに、ただ一心に吹いた。もうここでは用光は、没我の境地にある。先にいつた世の中に傳へてもらひたい」も何もない、ただ藝道三昧のいはば悟入の境地である。「笛の音によつたやうに吹いたのである。」

この藝道の至妙の世界に對し、始めは嘲侮的であつた海賊も、次第に引き入れられて行く。それを説く前に、皓々と澄み切つた月の美しさを述べて環境を印象的に表し、笛の音が、高く低く、波を越えてひびいた。

と、笛の音の調子を述べるとともに、時間の経過を暗に示したのは巧みな行文である。最早海賊は恍惚として引き入れられ、ただ「じつと耳を傾けて聞くのみである。目には涙さへ浮かべてゐた」——感動の極致である。用光も海賊もなく、ただ一管の笛の音だけが天地を支配してゐる。

やがて、曲が終るや海賊どもは、すぐごと船を漕いで引き上げて行つた。藝術によつて心を醇化された海賊たちの「わるいことなんかできなくなつた」といふことは、またここまで本文を読んで來た兒童おのづからの共感でもあらう。

なほ文章は口語文ではあるが、多分に文語的手法の加味されてゐることに注意すべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みの進むにしたがひ、人物場所時を想定し、説話の筋を讀み取らせ、次第に用光の樂人とし

ての氣持を考へさせるやうにし、海賊どもまでを感激退去させた用光の笛の妙手に感ぜしめるやうに指導する。

本文の如き文章、殊に用光が最後の曲を吹奏するところは、朗讀をよく指導し、範讀にも意を用ひて讀むことによつて味ははせるやうにすることが大切である。

話すこと 文章挿畫を中心として、海賊に圍まれた時の用光の樂人としての覺悟、最後の曲を吹く時の態度、その妙音とこれに感激した海賊どもが退散したことについて話をさせる。

本文の地の部分を敬體口語に直して發表させるのも一法である。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「圍」「覺」「悟」「低」「越」等複雑な漢字が多いから、偏旁等に分けてよく理會させ、筆順にも注意する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

京都へのぼらうとして、船に乗つた。

あやしい船が現れて、海賊がどやどやと乗り移つて來た。

海賊は名人をとり圍んでしまつた。

笛の音は、高く低く、波を越えてひびいた。
次のカナヅカヒに注意させる。

逃げよう。
戦はう。
聞かう。

思ふと
思ひ出
思つて

注意すべき發音文字 ことば等

アクセント。

ふいて吹いて——フイテ

ふいて拭いて——フイテ

訛音方言

恐しい——「オトロシ」等方言が多いから注意する。

逃げよう——「ニギョー」の訛音を矯正する。

發音

とまつた夜——トマツクヨル 思ふと——オモート

戦はう——クツカオー

樂人——ガクニン

一生——イツショー

取り出した——トリダシタ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 現テラワレ 海賊 とり圖んで 覺悟 低く 越えて

讀替 名メー人 京都 命 笛の音

語句語法

「名人」あやしい船「海賊」覺悟「樂人」二生の思ひ出「心残りなく」二曲「笛の音」二心等は指導を要する語句である。

次の如きいひ表し方の意味を理會させ用法に注意させる。

どやどやと乗り移つて來て

逃げようにも逃げられず

戦はうにも武器がなかつた。

とても助らぬ。

とてもかなはない。

まあひとつ聞かうではないか。

じつと耳を傾けて聞いた。

目には涙さへ浮かべてゐた。

次の「それ」などの可能及び受身の助動詞に留意し、指導上の心構とする。

逃げようにも逃げられず (可能)

命をとられるのだから (受身)

名人といはれた (受身)

十 機械

教材の趣旨

本教材は、工場に於けるいろいろな機械の活動を詩に表したもので、特に機械の動きを詩の韻律と一體たらしめ、児童の主體性に即して表現したものである。

随つて、児童にこの詩を朗唱させることによつて、自然に機械に對す

る親しみと興味を起させ、かうした科學の世界にも、また詩のあることに氣附かせるものである。

なほ初等科國語三「夏」同四「大砲」のできるまでなどと連絡して、産業に關する思想の萌芽に培ふ點にも留意すべきである。

文章

四音を基調とした六聯の韻文であり、要するに四音の連續がこの詩の韻律をなしてゐる。

第一聯は、工場にある機械を全體として眺めわたしたときの感じをうたつたものである。工場の中には種々な機械が種々な形をし、しかも種々な音響を發しつつさかんに活動してゐる。それが、みな堅牢な鐵材の組み合わせであり、びかびかと光つた強さうな鋼鐵の勢揃ひである。工場を全身にたとへるならば、機械のあるものはその内臓であり、またあるものは神經であり、手足であつて、その活動はあたかも生きたものの鼓動とも運動とも感じられる。工場だ、機械だ。鐵だよ、音だ

よの「だよ」が、感動的な意義であることに注意を要する。

第二聯以下、第五聯までは機械の部分部分に焦點が向けられてゐる。まづ目につくのは、直線的に動いてゐるピストンである。「がたとん、がたとん」は、前後に烈しく動くピストンの働きを音響的に力強く表したものである。

第三聯は、目まぐるしく廻轉してゐる車輪の活動である。絶え間なき車輪の連續的運動が、「ぐるぐる」の反復によつて、いひ表されてゐる。

「車だ、車輪だ」は、「車輪だ、車輪だ」の意であるが、いひかへてあるところに、大小各種の車輪を思はせるものがある。

第四聯は、車輪と車輪との間に、かけられた皮おびの動きをうたつたのである。その動き方を見つめてゐると、車輪と車輪をしつかり抱きかかへてゐるやうでもあり、一つの車輪が相手の車輪へ話しかけてゐるやうでもある。

第五聯は、齒車である。齒といふ漢字が、四つも並んでゐて、いかにも

齒車が、かみ合つてゐるやうな視覺的感覺を與へる。「齒車、齒車」といつただけで相並んでゐる齒車を思はせ、「ぎりぎり」と呼應して、寸分の隙もなく、かみ合つてゐるやうすが見える。「ぎりぎり」は、齒車のかみ合ふ音ではなく、齒車がお互ひにくひついて動く緊密な運動を擬態的に表現したものである。

第六聯は、第一聯と呼應して全體を綜合的に表し、目にうつるもの、耳にひびくものを交錯させて、表現したのである。即ち「動くよ」「鐵だよ」「ぐるぐる」は見た感じであり、「音だよ」「がたとん」「どどん」は聞いた感じで、かうした端的なことばをたたみかけることによつて、いかにも活動的な機械がお互ひに協力し、正確に、規則正しく働いてゐる状態を見せてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして、確實に讀ませる。特に「讀」すことと結んで寫眞繪畫等によつて工場の豫備知識を與へて讀み

を進める。詩の構成にしたがひ、第一聯の鐵工場の全體觀からピストンの活動、車輪の廻轉、廻轉にしたがつて滑る皮帶、齒と齒と噛み合ふ齒車といふ順序に讀みを進め、これらの機械が全體的に一種の諸詞をもつて活動するさまを想像させ、朗讀によつて韻律感を味はせて行く。

讀みを反復させることにより、自然に暗誦に導く。
話すこと 繪聲寫眞または兒童の見聞に基づき、工場のやうす、機械の運轉するさま、その音響等について話合をさせる。

書くこと 新字を中心として指導し、暗誦を利用して全文を詩の形のまゝに書寫させる。

注意すべき發音文字 ことば等

訛音方言

車——「クーマ」「クイマ」等といふ地方では矯正する。

動く——「イゴク」と訛らないやうに注意する。

發音

工場——コーバ

ぐるぐる——グルグル

皮おび——カワオビ

齒車——ハゲルマ

動くよ——ウゴクヨ

ぎりぎり——ギリギリ

文字

新字 車輪 齒車

語句語法

本教材には、「どとどん」がたとん「ぐるぐる」するする「ぎりぎり」の擬音の反復、工場だ「機械だ」車だ「車輪だ」「鐵だよ」「音だよ」「あつちへ」「こつちへ」「まはるよ」「すべるよ」「動くよ」「音だよ」「鐵だよ」等の脚韻、車輪と車輪に「齒車齒車」「齒と齒とかみ合ひ」等の反復が多く用ひられ、韻律を調へてゐる點を味はせることが大切である。

備考

連絡

初等科音楽二「機械」と連絡して取扱ふ。

(以上 五月)

十一 出航

教材の趣旨

初等科國語一「支那の春」同二「南洋」同三「君が代少年」濱田彌兵衛、同四「船は帆船よ」大連から「早春の満洲」などと連絡し、海外發展の心に培ふ教材である。

四面環海のわが國から、一步海外に出ようとするには、主として汽船によるであらう。汽船に乗つて、海の上を航行することも愉快なことに相違あるまいが、わけても、錨をあげ、ともづなを解いて、これから長い航海をしようと、港を出て行く時の光景は、航海する者の誰しもが最も印象強く感ずることである。本教材は、神戸港にその場面を採り、兒童の心理に即應して表現したものである。既にヨミカタ一以來、兒童の心を海へ海へと向けさせたのであつたが、いよいよ本教材では、兒童を

汽船に乗せて、相共に港を出て行かうとするのである。兒童の中には、まだ海を見ない者も、汽船に乗つた經驗を持たない者もあるであらう。また海を見、汽船に乗つた者もあらうが、いづれの兒童にも、本教材を通して、航海の喜びを感じさせ、海の彼方にあこがれる童心を、焰の如くかきたてようとしたものである。

文章

本教材の文章は、今日、みなさんは、一萬トンの汽船に乗つて、神戸の港をたつのだと考へてくださいといふやうに、兒童にやさしく呼びかけ、筆者と兒童とが一つ心になり、ともに行動し、觀察するやうな態度で書かれてゐる。そこにこの期の兒童の心理に即應した表現上の苦心が拂はれてゐる。随つて、この文章を読む兒童をして、出航の體驗のあるなしにかかはらず、一樣に自分自身が汽船で、今、港を出て行くつもりにならせ、その時の有様や、心持や、四圍の風景などを知らず知らずのうちに心に刻みつけさせるやうにしてある。

まづ「みなさんは」と児童に呼びかけ、「一萬トンの汽船に乗って、神戸の港をたつのだと考へさせ、みなさんに乗せる船」といつて、児童とこの汽船とを親しく結びつけ、「みなさんといつしよに」乗客が乗ることを敍して、児童を汽船に乗せ、甲板に出て並びませうと甲板に並ばせ、みなさんのおとうさんや、おかあさんも、ゐられるはずですよと、上屋の見送りの人を見させ、勇ましい楽隊の音楽が聞えますね、さあ、私たちも、いつしよに歌はうてはありませんか」と、楽隊の音に合はせて歌を歌はせるのである。このやうに、児童を刻々に移り變る眼前の情景にしたがつて行動させるうちに、いつしか児童は文中の人になりきつてしまふのである。即ち、文章は靜的な説明ではなく、常に児童の行動と結んでゐるがために、動的で、主體に即しながら客觀を寫す態度で終始してゐる。

「いよいよ出航」に當つては、あの、うなるやうに大きな汽笛の音をお聞きなさい」といひ、上屋の人たちと別れる場面では、さあ、みなさんもお振

つてまゐります。といつておあげなさい」と児童を全く船客にして、甲板上からほんたうにハンケチや帽子を振つてゐるつもりにならせるのである。このところを文章の山として、見送る人、見送られる人の興奮を中心を描いてある。

大きな汽船が岸壁に着いたり、離れたりする。ことは、汽船の操作上最も注意を要する點で、岸壁を離れる際には、汽船みづからの速力で動き出さず、他の小さな汽船に曳行されて徐々に動き出すのが普通である。そのやうすを「子犬が、象でも引つばつて行くやうですよ」と形容してある。

汽船がだんだん岸壁を離れるにつれて、興奮も次第に鎮まつて行く。ただ、赤い日がさを振つてゐる人の姿が目につくに過ぎない。やがて汽船も、自分の機械を動かしながら、速力を増して進むやうになる。それまで、上屋の見送人に心を奪はれてゐた児童は、始めてわれにかへり、めづらしい港内の景色に眼を移すやうになる。造船所がある。數へ

きれない大小さまざまな貨物船がある。どこへ行くのだらうと児童は思ふに違ひない。そこで、大きいのは満洲や支那や南洋などへ行く船です」と親切にその疑問に答へる。

やがて港口の防波堤へ来る。いよいよ港を出るとなると、うしろを振り返つて見たくなる。振り返ると、神戸の市街がまるで繪のやうに美しく見える。

さて、そこで話題を一轉させて、この汽船が、あすの朝門司へ着いて、正午ごろ門司を出航すると、神戸から門司まで児童を導いて行つて、それから先の航路は、専ら児童の想像と興味とに任せるやうに文を終つてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。範讀には乗船してゐる児童に語るやうな親しみをもつて、讀みを示すことが大切である。まづかりに先生が児童を引率し一萬噸の汽船に乗つて神戸港を出航するに當り、

その児童たちに親しく話しかけてゐる文であることをわからせる。次に出航の際に於ける活氣に満ちた光景を讀み取らせ、児童自身乗船してゐるやうな心持で讀み味ははせるやうにする。結末の「みなさんは、どこへ行きたいと思ひますか」を生かして、児童の希望を述べさせ、出航の楽しい氣分を高めるやうに取扱ふがよい。話すこと 本文に基づき児童自身が乗船して友だちに語る態度で、次のやうに話させる。

今日、私は一萬トンの汽船に乗つて、神戸の港をたちます。

私の乗る船は、今さかんに起重機を動かして荷物を積んでゐます。

あとからあとから、乗客が乗ります。船の出る前は、ほんたうに景氣のいいものです。

甲板に出て並びました。向かふは上屋で、見送りの人が、いっぱい並んでゐます。私たちのおとうさんや、おかあさんも、ゐられるはずですよ。

あ、けたたましいどらの音がします。まもなく出航です。見送りの人や、積荷をしてゐた人たちは、これを合圖に船からおりて行きます。

勇ましい樂隊の音楽が聞えます。軍艦マーチが聞えます。愛國行進曲が聞え

ます。私たちもいつしよに歌ひ出しました。

いよいよ出航です。うなるやうに大きな汽笛の音がします。

船は静かに岸壁をはなれて行きます。

上屋の人たちが、「生けんめいで、ハンケチや帽子を振つてゐます。私たちも振りました。大きな聲で、おとうさん行つてまゐります。」「おかあさん、行つてまゐります。」といひました。

小さな汽船が私たちの大きな船を引つばつて行きます。ちよつと妙なかつかうです。ちやうど子犬が象でも引つばつて行くやうです。

もう、上屋の人は、だれがだれだか、わからなくなりました。それでも、みんな合圖をしてゐます。

だれか女の人が、赤い日がさを振つてゐます。

いよいよ、小さな汽船からはなれて私たちの船は、ひとりで走り始めました。だんだん早くなります。もう、上屋の人は、たいてい歸つて行きました。

右の方に林のやうに見える起重機のあるところは造船所です。今、新しい船を何ぞうか、こしらへてゐるのが見えます。

港内には、ずいぶんたくさんの船がゐます。何ぞうあるか、ちよつと数へきれません。大きいのは、瀬洲や支那や、南洋などへ行く船です。みんな、貨物船のやうです。

港の口の防波堤へ来ました。防波堤を越すと、きれいな瀬戸内海へ出ます。神戸の市街が、まるで繪のやうに美しく見えます。

この船は、あすの朝、門司へ着いて、正午ごろ門司を出航するといふことです。

書くこと 新字、讀替の文字を中心として指導する。新字はなるべく扁旁等に分けて點畫を明らかにし、筆順に注意して正確に書寫させる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

船は、今さかんに起重機を動かして、荷物を積んでゐます。

出航は景氣のいいものです。

上屋の人たちは、ハンケチや帽子を振つてゐます。

大きな船が小さな汽船に引つばられて行くのは、ちよつと、妙なかつかうです。右の方に林のやうに見えるのは、造船所の起重機です。

港の口の防波堤へ来ました。

市街がまるで繪のやうに美しく見えるではありませんか。
次のカナヅカヒに注意させる。

並びませう。
かつかうでせう。
見えるでせう。
何さうあるでせう。
行くでせうか。

歌はうではありませんか
歌ひました
歌ふ聲

注意すべき發音文字ことは等

アゲセント

しがい(市街)——シガイ

しがい(死骸)——シガイ

訛音方言

動かして——イゴカシテと訛らないやうに注意する。

いつしよに——「イッショリー」と長くいはないやうに注意する。
人——「シト」「フト」と訛る地方では矯正する。
路つて——「カイッテ」といはないやうに注意する。
繪——「イエ」といはないやうに注意する。

發音

出航——シュウコー

今日——キョー

乗客——ジョーキヤク

上屋——ウワヤ

どらの音——ドラノオト

歌はう——ウタオー

汽笛の音——キテキノオト

行きます——イキマス

日がさ——ヒガサ

貨物船——カモツセン

正午ころ——シヨーゴゴロ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 (出航^{シュウカウ}) 景^{ケイ}ヶ^ケー^エ氣^キ 振^マつて 妙^{ミョウ}ミョー^ウな 港^{コウ}(ゾー)船所 防波堤^{ボウハチ}テ^ー 市街^{シゲイ}

讀替 起重機 防波堤

語句語法

「出航」起重機「乘客」景氣「甲板」上屋「どらの音」合圖「積荷」樂隊「岸壁」造船所「港内」貨物船「防波堤」市街「正午」等は指導を要する語句である。

次の如きいひ表し方の意味を理會させるやうにする。

いっしょに歌はうではありませんか。

日がさを振つてゐるではありませんか。

給のやうに美しく見えるではありませんか。

本教材には次の如き現在法が多く用ひられ、その刹那の光景を活寫してゐるところが多い。

あけたたましいどらの音がします。

船は靜かに岸壁をはなれて行きます。

本文は船上の兒童に物語るやうな態度をとつてゐるから、次の如き對者を假想した表現が用ひられ、親しみの感じを與へてゐることに注意を要する。

神戸の港をたつのだと考へてください。

甲板に出て並びませう。

あのうなるやうに大きな汽笛の音をお聞きなさい。

さあみなさんもお振りなさい。大きな聲で、「おとうさん、行つてまゐります。」とかあさん、行つてまゐります。」といつておあげなさい。

ごらんなさい。

みなさんはどこへ行きたいと思ひますか。

次の如き比喩による具體的な表現にも注意を要する。

うなるやうに大きな汽笛の音

ちやうど子犬が象でも引つぱつて行くやうですね。

林のやうに見える起重機。

給のやうに美しく見える。

備考

連絡

ヨミカタニ「西ハタヤケ」よみかた四「浦洲の冬」初等科國語一「支那の春」同二「南洋等」と連絡がある。

十二 千早城

教材の趣旨

さきに初等科修身一に於いて、多聞丸として、楠木正成の幼時を學んだのであるが、本教材はそれを受けて武將としての正成が奇策縦横、あくまでも賊の大軍を惱まし、勤皇の志氣を鼓舞し、忠義をつくしたことを敘述したもので、忠君愛國の精神を昂揚しようとするものである。

元弘二年、正成は金剛山に千早城を築いた。このころ、護良親王は吉野に兵をあげさせられ、勤皇の義兵は各地に起つた。北條高時は一族諸將などに命じて、大兵をもつて一舉にこれを陥れようとした。多勢に無勢、わけもなく陥落するであらうと思つたことはすつかり相違して、北條の軍勢はさんざんな目にあはされ、つひに敗北するにいたつた。

この戦の情景を描き、兒童をして當時の戦況をしのび、必勝の信念と、君國に報ずるの念を湧き起させるのが本教材の趣旨である。

なほ本教材は、次の「錦の御旗」とともに、歴史的記述の文體に親しませ、やがて、文語體の文章にいたるべき、一つの橋渡しとしての役目を持つ

てある。

文章

文體は口語文ではあるが、戦記文の趣を傳へ、口調がひきしまつて、きびきびしてゐることに氣がつくであらう。「軍勢もわづか千人ばかり」「こんな山城一つ、何ほどのことがあるものか」「幅が一丈五尺、長さが二十丈」「賊は何千人か死傷した」「百人逃げ、二百人逃げして」などといった句に見られるやうに、表現が簡潔であり、力がこもつてゐる。それは、一面文語文體の呼吸と相通ずるもので、激情的な場面をうつすのにふさわしい文體である。

文章は、冒頭に於いて千早城の戦を全面的に眺め、次に千早城にたてこもつた正成の軍勢の攻防戦のありさまを細敘し、終りに賊軍の敗北を述べてまとめてある。兒童は、この攻防戦の情況にもつとも興味を持ち、感激するであらうが、敘述の順序や、敵味方の關係や、戦場の位置などを混亂しないやうに、はつきりと讀み取らせつつ、文章を味ははせる

ことが大切である。攻防戦は、次のやうな順序によつて展開してゐる。

- 一 大きな石を投げ落してさんさんに射たこと
- 二 敵の番兵をうち破り、旗を奪つて引きあげたこと
- 三 高いがけの上から大木を落したこと
- 四 わら人形を作つて敵を討つたこと
- 五 橋を焼き落して防いだこと

この五つの戦況は、それぞれ原因結果の關係を持つて連絡してをり、それを讀み取らせて、かうした文章の妙味を感得させることが大切である。「まづ、谷川のほとりに」とか、「この上は、ひやうらう攻めにしよう」としてとか、「もうこの上は、何でもかでも攻め落してしまへ」とかいふ句で、戦況が次々と進展し、漸層的に高潮して行く敘述もおもしろく、初めに「まことに小さな城で、軍勢もわづか千人ばかり。これを圍んだ賊は、百萬といふ大軍で」と敘したのに對し、終りに「百人逃げ、二百人逃げして、初め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた」とあつて、首尾相照

應してゐるとともに、その間に一種の諷刺も感じられて興味がある。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、楠木正成が賊軍を討ち惱ました文意を全體的にわからせる。次に金剛山に攻め寄せた賊軍が、正成の奇計によつてさんさんに討ち破られた事實を敘述の順序に讀み取らせ、正成の智謀と忠勇に感じさせるやうに指導する。

話すこと 文に即し、常體口語を敬體によつて發表させ、話しことばを練習させる。次の如きことばをあげさせて、城に關する語を整理する。

山城 城兵 城中 城門 城のやぐら

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「坂」「汲」「危」「餘」「傷」等は點畫を誤りやすいから、特に字形筆順に注意する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

城の附近は、人や馬でうづまつた。

賊は坂からころげ落ちた。

番兵を置いて、城兵が水を汲みに來られないやうにした。

賊を射させて、五千人餘りも殺した。

幅が一丈五尺、長さが二十丈。

千早城も危く見えた。

その上へ油を注がせた。

賊は何千人か死傷した。

次のカナヅカヒに注意させる。

苦しめよう。

これをよけよう。

ひやうらう攻めにしよう。

その上へ油を注がせた。

谷底へ落と落ちた。

注意すべき發音文字 ことば等

アクセント

はた(旗)——ハタ

はた(傍)——ハタ

はし(橋)——ハシ

はし(箸)——ハシ

はし(端)——ハシ

ひ(火)を——ヒオ

ひ(日)を——ヒオ

訛音方言

賊——ドクと訛る地方では矯正する。

人——シトと訛る地方では矯正する。

大きな——オーケナ」の訛音を矯正する。

油——アルバ」といふ地方では注意する。

發音

千早城——チハヤジョー

軍勢——グンゼー

大軍——タイグン

山城——ヤマシロ

谷川——タニガワ

番兵——バンペー

汲みに来られない——クミニコラレナイ

二日——フツカ

三日——ミツカ

わる口——ワルクチ

ひやうらう攻め——ヒョーローゼメ

大木——タイボク

一人——ヒトリ

何でも——ナンドモ

谷底——タニゾコまたはタニソコ

官軍——カンゲン

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 附近 坂 汲み 餘り 幅 五尺 危 アヤウク 油を注がせ
讀替 死傷(シヨウ)

語句語法

「だてこもつた」軍勢「附近」山城「城のやぐら」旗をうばつて「ひやうらう攻め」のがすな」も
てあまして「官軍」道をふさいだ等は指導を要する語句である。

次の如き類例の語句は比較して意味を確實にする。

番兵 城兵

城門 城中 城のやぐら

攻めのぼる 攻め寄せ 攻め落し

次の如き語法的いひ表し方を理會させ、その用法に注意する。

何百人か殺された。

何千人か死傷した。

用意しておいたものがたくさんのだいまつを出して、

さんさんに射た。

だちまち五六千人も死んだ。

「何でもかでも攻め落してしまへ。」

次の「せる」「させる」の如き使役の助動詞に留意して、指導の心構とする。

賊のわる口をいはせた。

その上へ油を注がせた。

大木を落させた。

賊のさわぐところを射させて、

橋の上に投げさせた。

備考

連絡

初等科國語三「日本武尊」「光明皇后」と排列上の關聯がある。

初等科修身一「多聞丸」と連絡して取扱ふ。

初等科音楽二「千早城」と連絡して取扱ふ。

十三 錦の御旗

教材の趣旨

村上彦四郎義光の活躍を敘した文章である。

「文章に即してこの忠烈な行ひを兒童に感銘させ、大義のためには、敢然として立ち、大勇を振るひ起して、不忠不義の徒を膺懲するの精神の自覺に培はうとするものである。」

太平記の記事を基として書かれてはゐるが敢へて原話に拘泥することなく、教材のままを熟讀玩味させて、その趣旨の徹底を期すべきである。なほその際、前課の「千早城」と表裏一體の關係をなし、かつ、初等科國語四の「くりから谷」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」などとともに、軍記物語としての同じ系列の上に立つことを意識して、取扱の上に考慮を拂ふことが大切である。」

文章

雄勁な戦記文學の口調を失はないため、同じ口語文でも文語の趣を傳へた強靱さがあることは前課と同様である。

まづ大塔宮が、北條高時征伐のため兵をお集めにならうとして、大和

の十津川から、高野の方へお向かひになる途中、芋瀬の莊司が、宮を待ちかまへてゐることから説き起し、義光が莊司と出會ふ場面の序としてゐる。

大塔宮の御あとを、急ぎ足で追つてゐた義光の眼に、「日月を金銀で現した錦の御旗がはいつた。はつとした義光は思はずそこへ棒立ちとなつた。たしかに大塔宮の御旗である。その時の義光の心持を、もしや、宮の御身に、何事か起つたのではなからうか。義光は、胸をとどろかした」といひ表してゐるが、そこに義光の忠魂義膽の一端が、まづ描き出されてゐる。

この義光は、芋瀬の莊司が、家來の大男に宮の御旗を持たせて、さもなくいさうに、何か聲高く話してゐるのに、出あつて、不審を懷くとともに、胸中既に義憤を感じた。「見れば尊い錦の御旗、どうしてそれを手に入れたのか」と大喝してつめ寄つた。莊司の不敬な返答に、怒り心頭に發した義光は、火の出るやうなことを莊司に投げつけるとともに、す早

く錦の御旗を奪ひ返し、家來の大男をまりのやうに投げつけたのである。かうした漸層的な描き方によつて、義光の心の動きと、その勇敢な行動とを、目のあたりに見るやうに活寫してあるが、その場面の盛りあげ方が、太平記の敘述とは違つて、主として會話を中心とし、劇的に表現されてゐることに留意して指導すべきである。

最後は、錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、おちつきはらつて、その場をたち去つた義光の忠義を、大塔宮が心からお喜びになる一文で力強く締めくくつてある。全體として省筆の妙を得た線の太い文章から受ける印象を、よく讀ませることによつて、兒童の心に生かすべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みの進むにしたがひ、前課と關聯して、まづ大塔宮の御身分を明らかにし、村上義光が宮の御旗を取り返して忠義をつくしたといふ説話の大意をわからせる。次に文の敘

述にしたがひ、大塔宮が芋瀬の莊司の待ち受けてゐるところをお通りになつて高野の方へお向かひになつたことを讀み取らせ、宮の御身を氣づかはせるやうにし、義光が錦の御旗を見て驚くといふ敘述に進み、莊司の無道を見るや忽ちその手から御旗を奪ひ取り、大塔宮に忠義をつくす話の筋を生かして取扱ふことが大切である。

話すこと 文に即し、常體口語を敬體によつて話させ、話しことばを練習させる。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「錦は緋」は代、「探は深」は、恐の如き既習類似文字があり、筋も誤記しやすい文字であるから、特に注意して取扱ふことが肝要である。

次の如き文によつて書取をさせる。

宮は、高時征伐のため、兵をお集めになつた。

敵は途中に手下の者を配つてゐた。

敵のやうすを探るために、思はず時を過ぎた。

日月を金銀で現した錦の御旗をおし立ててゐる者がある。

家來の大男に御旗を持たせてゐる。

義光はかつと怒つた。

「それはけしからぬ。宮の御道筋をふさいだ上に、錦の御旗をけがしたてまつるとは。」と叫んだ。

宮は、義光の忠義を心からお喜びになつた。

次のカナヅカヒに注意させる。

（お向かひになつた

向かふに

思はず

思ひますか

思ふと

注意すべき發音 文字 ことば等

訛音方言

ならなかつた——「チランカッテ」といはいやうに注意する。

持たせて——「モクシテ」といはいやうに注意する。

手——「テ」と長くないはいやうに注意する。

その場——「ソノバ」といはいやうに注意する。

發音

錦の御旗——ニシキノミハタ 大塔宮——ダイトーノミヤ

十津川——トツガワ

九人——クニン

敵方——テキガタ

日月——ジツゲツ

大男——オオオトコ

何事——ナニゴト

大聲に——オーゴエニ

尊い——トートイ

わうへい——オーヘー

御道筋——オンミチスジ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字

錦

征伐

探る

御道筋

怒つた

叫んで

讀替

配つて

過して

日月

家來

去つた

語句語法

「敵方」手下の者を配つてゐた。思はず時を過して「日月を金銀で現した錦の御旗」さもとく
いさうに「わうへい」に「御道筋」ふさいだ上「かつと怒つた」それはけしからぬ「うばひ取る」
「かの大男」等は、指導を要する語句である。

次の如き修辭的いひ表し方についても、その意味を理會させることが大切である。

ふしんの眉をひそめた。

胸をとどろかした。

まりのやうに投げつけた。

次の敬語に注意して指導する。

けがしたてまつるとは。

追ひつきたてまつつた。

備考

連絡

初等科國語三「日本武尊」光明皇后、千早城と排列上の關係がある。

十四 國旗掲揚臺

教材の趣旨

一年生以來おなじみの勇さん、正男さん、花子さん、春枝さんが、國旗掲

揚臺のところに集つて、その高さを計るのである。一應は目測をしてみるが、四人が四人ともちがふ。そこで何とかして、正確な高さを知りたいものだ、工夫ずきて思索的な正男さんが、素朴ではあるが、正確な測定の方法を考案する。その計り方を他の三人が知つて、みんな感心し、つひに國旗掲揚臺の高さを正しく計ることができたといふ生活を、對話として表現したものである。

本教材はヨミカタ二「カゲエ」、初等科國語一「月と雲、同二「ぼくの望遠鏡」等と關聯して、科學的な工夫製作の態度に培ふものであり、これが更に初等科國語四「グライダー」日本號「大砲のできるまで」「振子時計」などに發展展開するのである。

文章

文章は、四つの場面から成りたつ對話文である。劇的に表現されてゐるので、國旗掲揚臺の高さを計るに至つた動機、その心持の推移、動作などが特に具體的に表されてゐることに注意すべきである。

第一の場面は、まづ國旗掲揚臺の高さの目測をすることにより、何とかして、きちんと高さを計れないものかなと考へ始めるところであつて、序幕にもあたる部分である。

第二の場面は、それから三日ばかりたつて、正男がいろいろと考へてゐるところである。ト書と獨白によつて、おのづから、一つのよい考へに思ひあたつたやうすが、生き生きと描き出されてゐる。

第三の場面は、その考へをみんなに話して納得させるところで、いはば第二の場面で考へたところを具體的に發表するところであり、興味の中心をなす部分である。

第四の場面は、この考へをいよいよ實際に移して、國旗掲揚臺の正確な高さを計り得たところで、おのづから成功の喜びをもつて結んでゐる。なほここに登場して来る四人の子どもたちは、その動作や、ことばによつて、それぞれの性格が、子どもらしく書き表されてゐる。一面からいへば、この四人の子どもは、かうした教材の表現によつて、いよいよ

その特性を發揮しつつあるのである。

取扱の要點

読むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。劇の形であるから、ト書の部分と對話の部分とを區別し、對話の部分は對話らしく讀ませることが大切である。

國旗掲揚臺の高さの計り方については、兒童を登場人物の境地に置いて、文に即してその思考判斷の移行する點を讀み取らせ、兒童にもその計り方を理會させることが肝要である。

話すこと 人物を男女に分つて定め本文を讀ませ、または話させて、劇的に演出させる。

本教材の對話は、男の子どもは常體を用ひ、女の子どもは敬體を用ひてゐる。男女の性別により對話におのづから相違のあることに注意する。

次の如きことばを用ひ話すことを練習させる。

さあ かな あら たまへ

書くこと 新字、略字を中心として指導する。「變」「刻」「端」等は點畫の複雑な文字であ

るから、字形筆順に注意して指導する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

あの臺の高さを計れないものかな。

せいの高さに變りはないのに、かげだけが、あんなに變る。

同じ時刻に計ればよい。

かげの端に、しるしをつけてくれたまへ。

次のカナヅカヒに注意させる。

待ちたまへ。

計つてくれたまへ。

しるしをつけてくれたまへ。

さう。

さうださうだ。

注意すべき發音文字 ことば等

アクセント

はし(橋)——ハシ

はし(橋)——ハシ

はし(箸)——ハシ

訛音方言

短く——「ミチカク」と清音ではないやうに注意する。

端——「ハジ」と濁らないやうに注意する。

いつしよに——「イッショ」ニと長くいふ地方では矯正する。

發音

國旗掲揚臺——コッキケーヨーダイ 旗竿——ハタザオ

思ふ——オモ

何とか——ナントカ

十四メートル——ジューシ(またはヨン)メートル

三日——ミツカ

ある間に——イルアイダニ

巻尺——マキジャク

聲を出して——コエオダシテ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 計れ

變(変)カワリ

時刻

端

語句語法

「さあ」「かな」「あら」「な」等の如き感動詞が多く用ひられてゐる。その會話の意味、心持をよく理會させるやうにし、用法にも馴れさせる。

次の用例はよつて、たまへ」の用法について指導する。

まあ待ちたまへ。

計つてくれたまへ。

しるしをつけてくれたまへ。

次のいひ表し方を比較して、その意味の異同を知らせる。

わかつた、ほんたうにわかつた。

わかつた、やつとわかつた。

さう。

さう、さう。

さうだ、さうだ。

備考

連絡

初等科國語一「月と雲と連絡がある。

初等科算數三「木ノ高サ」と連絡して取扱ふ。

(以上 六月)

十五 夏

教材の趣旨

眞夏の明かるく盛んな光景を、主として感覺的な印象によつて敘した韻文である。

夏は、いふまでもなく暑い。暑いから避けようとするのが人情であり、多くの文學は、樹蔭の涼味を慕ひ、夕立を敘し、夕涼みを捉らへ、山谷水景等を主題とするのであるが、これらは一面に於いて夏そのものから逃避し、夏そのものの感覺を否定するものではなからうか。本教材はむしろそれを逆に行つたといへる。酷熱の夏をじつと見つめながら、その感覺を捉らへ、その感情に生きようとするものである。

夏に鍛へようとすれば、まづ夏そのものの特色を把握し、生氣潑刺たる感情を肯定し、これと共感する心がなくてはなるまい。初等科國語

「夏やすみ」が、既にやや幼いながら夏を慕ひ、夏に鍛へようとすることをめざしてゐた。本教材は更に一步深く夏の實感にたち入つてそれに共鳴し、強烈な夏に直面しつつ、そこに詩境を發見しようとするものにほかならない。

文章

四行五聯の詩で、各行は長短句いろいろの自由な體をなしてゐるが、各聯の初行が「じりじりと」「カーン、カーン、カーン」「くろぐろと」「びつしよ」と「暑いなあ」の如く、擬態擬聲もしくは對話語によつて突如として句が起してゐるのと、末句が「トラックが通る」「その庭に、日まはりが咲いてゐる」「油を煮るやうに鳴きたてる」「さかんなものはあるまい」の如く、平敘的な、ゆとりのある敘法で結ばれてゐることによつて、全體に統一感と與へてゐる。第四聯のみが、「兵隊さん」が通る、「一中隊ばかり」と倒置に終つてゐるのは、敘述の變化として効果がある。

各聯は、眞夏の光景を感覺的な印象によつて捉らへようとしてゐる。

見方によつては實に殺風景だともいへる。例へば、第一聯は空にはじりじりと強烈な太陽が照つてゐる。そこには、やけつくやうな砂ぼこりの凸凹の道がある。炎天つづきて、乾ききつてゐるのである。そこをもものもあらうに、大きなトラックが通る。通つた後には、あたり一面塵埃が立ちこめるであらう。しかし、この殺風景な世界に夏の新しい感覺を捉らへようとするのが、この詩である。

第二聯は鐵工場の前である。さつきのトラックも、この工場に出は入りするものと見れば、前後有機的につながりを持つ。まづ「カーン、カーン、カーン」といふ鐵工場のけたたましいの聽感覺が、カタカナの寫音によつて表され、一そう盛んで強烈な夏の印象が描かれてゐるが、その工場の前に日まはりが咲いてゐるのは、自然の一點景としてふさはしいものがある。日まはりには優美な花でもなければ、特に詩的な花でもないが、自然味に乏しい工場の花としてふさはしく、また盛んな夏を象徴する花としてふさはしいのである。「けたたましい響きだ、鐵工場の前」

は、倒置の形で、鐵工場の前は、けたたましい響きだの意である。

第三聯は、今までの人生的活動から一轉して自然にはいつてをり、その轉機として、前聯の「日まはり」がきかせてある。しかもその自然が、暑熱をやはらげるのに役だつやうな自然でなく、むしろ、夏そのものを見せつけるやうな自然である。そこには身の丈より高く茂つた夏草があり、高い木立がある。萬緑の候の草木は、黒ずんで見えるほど、緑も濃厚である。さうしてその木立には、無數の蟬が耳を聳するばかりかまびすしく鳴いてゐる。油を煮るやうな聲の油蟬が盛んに鳴いてゐるところに、暑熱の聽覺的な印象が表されてゐる。

第四聯は路上の光景である。兵隊さんが一中隊ばかり、びつしよりと軍服に汗をにじませて通る。街上などで、よく見かける圖であり、非常時局にふさはしい一點景でもある。夏に鍛へる精神の具象化として、この詩の中心をなすものとも見られるが、しかしさうした理念の現れてなく、どこまでも生きた夏の印象として點出されてゐるところに

詩がある。

第五聯は、いはば全體の光景を統一する感情の表出である。「暑いなあ——それは誰もがもらす歎聲である。道行く人のことばでもあれば、働いてゐる人の獨語でもあり、人と人の出あひがしらの挨拶でもある。かうした生きたことばを捉らへて、以上四聯に通ずる感じとした。しかしそれは一つの感じ方であつて、それが一轉すれば次の「夏ほど明かるくて、さかんなものはあるまい」になる。暑い夏を明かるいと感じ、盛んだと感じるのは、潑刺たる生氣を積極的に受け入れて、これを讚美する心であり、夏に鍛へるものの根柢となる心構である。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。自由詩の形になつてゐるが、その間にもおのづからなる韻律があるから注意して讀みを指導する。讀みが進むにしたがひ、詩に表された場所と時とを想定させ、ごみつばいでこぼこ道を通るトラック、けたたましい響きのする鐵工場蟬の鳴きたてる木立

汗をにじませて通る軍隊を想像させ、盛んで明かい真夏の情趣を感得させるやうに指導する。

讀みを反復させることにより、自然に暗誦に導く。

話すこと かういふ詩の指導に於いては、なるべく讀ませることを本體とし、話すことは詩を味ははせるに必要な程度に止める。

書くこと 新字を中心として指導する。「煮」は字義に注意して「似」と區別させ、「響」は「郷」の字形に注意する。

全文を詩の形のまゝに書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

でこぼこの道を

日まはりが咲いてゐる

木立には

油を煮るやうに

軍服を汗ににじませて

だれもがさういふ

さかなものはあるまい

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あつい(暑い)——アツイ

あつい(厚い)——アツイ

發音

鐵工場——テツコージョー

夏草——ナツクサ

木立——コダチ

軍服——グンブク

一中隊——イチチュウタイ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 響き 煮る

語句語法

この詩には、次のやうに印象的に、または感覺的に表現されてゐるところが多い。表現に即して理會に資するやうに指導する。

じりじりと照りつける太陽

こみつばいでこぼこの道を

「カーン、カーン、カーン」けたたましい響きだ、

その庭に、日まはりが咲いてゐる。
くろぐろと茂つた夏草。
蟬が、油を煮るやうに鳴きたてる。
びつしよりと、軍服を汗ににじませて、

備考

連絡

初等科國語一「夏の午後」「夏やすみ」と連絡して取扱ふ。
初等科音楽二「水泳の歌」と連絡する。

十六 兵營だより

教材の趣旨

入營した從兄新一から、從弟の武男に宛てた手紙として表され、兵營生活のやうすが描き出されてゐる。
國民皆兵のわが國に於いては、子どもの時から、兵營生活に親しみを

持たせることが大切である。既によみかた三「軍かん」、同四「海軍のいさん」に、いさんの入營、病院の兵たいさん、初等科國語一「いさんの愛馬」「カッターの競争」「軍大利根」、同二「潜水艦」「もん袋」「三勇士」などの諸教材に於いて、わが陸海軍の種々相に觸れさせ、軍隊生活に親しみを持たせて來たのであるが、本教材に於いても、これらの諸教材と連絡して、他日兵營生活に身を置くべき國民の一人一人に、剛健にして規則正しい兵營生活のやうすを読み取らせようとするものである。もとより國語教材であるから、どこまでも文章に即して思考し感動せしめつつ、國防精神の根柢に培ふべきである。

文章

相手に呼びかける手紙の形式で表し、徐々に兵營生活の敘述に筆を進めつつ、いつのまにか兒童を兵營生活の中に誘ひこむやうに書かれてある。

兵營生活の記述は、まづ一日中の經過を、朝晝夜の順序にしたがつて

書いてある。即ち朝は起床ラッパで起き、寢床をかたづけ、乾布摩擦をし、點呼を受け、體操をすることが敘してある。なほ點呼のあとで、兵營によつては、めいめい遙拜をさせてゐるところもあるから、適當に補説してもよい。

教練で、「氣をつけ」の姿勢、敬禮、步調を取つての行進、「をりしけ」や「ふせ」の姿勢での小銃射撃などは、入營當初、營庭や、練兵場に於いて行はれる基礎的な教練のやうすを書いたものであり、それと對照させて、野外教練の有様も具體的に示してある。

演習終了後の食事と、入浴と酒保で「お汁粉や、大福餅をたべながら、お園じまんの話に」花を咲かせることは、一日の生活に、休養とうるほひを與へるものである。アルミニウムの食器で御飯をたべることも、めづらしいことであらうし、夕闇について軍歌の練習をすることも、勇ましいことである。

夜の點呼、勅諭の奉讀、消燈ラッパによる就寢と、規定の日課を追つて

一日の兵營生活を記述し、次に兵室内のやうすに筆を進め、「いざといふ場合には、暗がりでも、すぐ武裝することができるほど、整頓が行きとどいてゐることや、夜中に時々行はれる非常呼集のことなどが述べてある。

かうして、大體一日の生活を敘した後で、「寒い風が吹きまくる營庭で」の教練や、食器洗ひや、洗濯のことなど、入營當初、兵營生活に馴れない時の骨の折れるやうすが述べられてあるが、それも馴れてしまへば、おもしろくなつて來ることをいつて、兵營生活に親しみを持たせるやうにしてある。それは、初等科國語一「にいさんの愛馬」の「入營したてのところは、馬のそばへ近寄ることが、こはかつた」もう、今では、なれてしまつて、そんなことは何でもなくなつてしまつた」の記述とその軌を一にするものである。

更にその親しみの心持を強調する意味に於いて、中隊が一つの大きな家庭であることをいひ、武勇くんたちも、やがては、かういふ兵營生活

をするやうになるのですから、今のうちから、しつかりやるやうにしてください」と、兒童の將來の生活と結んで、自覺を促してゐる。

最後の「手紙を書いてゐる間に、いつのまにか九時前になりました。ちき消燈ランプが鳴りますから、これでやめますは、前の兵營生活の夜の記述と結んで結末としたもので、一面この長い手紙を夢中で書き、時間のたつのも忘れてゐたことを表してゐる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。新字や難語句が多いから、特に讀みに力を注ぎ、範讀等に注意して困難な部分を懇切に指導することが肝要である。今年入營した新一が従弟の武男から送られた手紙の返事として、兵營生活のやうすを知らせたことをわからせ、兵營生活の中に養はれて行く軍人精神にも觸れて指導し、なほ愉快に軍務に服してゐる氣持を讀み取らせることが大切である。

話すこと 文章、挿畫を中心として朝の起床、教練、演習、夕食後の時間、夜の點呼、軍人勅

諭の奉讀室の整頓、非常呼集、兵營で軍人精神が養はれること等について話合をさせる。

本課に現れてゐる「兵營」「兵舎」「兵器」などと關聯して、既出の語「兵隊」「歩兵」「工兵」「ハツ兵」「センシャ兵」「カウクツ兵」「水兵」等を思ひ起させ、語彙を整理する。この際戰車」「航空等の漢字を用ひさせるやうにする。

また同様に「軍人」「軍服」に關聯して「軍隊」「賊軍」「官軍」「敵軍」「軍勢」「大軍」等の語彙を整理する。

書くこと 新字、讀替の文字を中心として指導する。新字も多く、字形の複雑なものも少なくないから、訓みとともに字義、字形、筆順に注意することが大切である。中には「拭」「練」「敵」「整」「總」「報」「燈」「壁」「養」等は誤りやすいから、扁旁等に分けて理會させ、書寫を正確にさせる必要がある。

次の如き文によつて書取を練習させる。

すつかり兵營生活になれて、毎日楽しい日を送つてゐます。

手拭でからだか赤くなるほどこすります。

教練は午前と午後にあります。

姿勢をきちんとして、手をあげて敬禮をします。
整列して週番士官殿の來られるのを待ちます。

「第一班總員三十名、事故なし」と人員の報告をされます。

點呼が終ると、聲をそろへて、軍人ちよくゆを奉讀します。

消燈ラッパが鳴り渡ります。

室の壁ぎには、銃を立て掛けておくところがあります。

兩側には寢臺があります。

入營當初は營庭で教練をしました。

軍人としてのりつばな精神を養つて行くのです。

次のカナヅカヒに注意させる。

いはれます

いひました

いふ心持で

何ともいへないよい氣持です

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

なる(鳴る)——ナル

なる(生る)——ナル

たいさう(體操)——クイソー

たいそう(大層)——グイソー

訛音方言

つめたい——「ツベタイ」「チノタイ」等と訛らないやうに注意する。

御飯——「ゴアン」といふ地方では注意する。

せんたく——「センダク」と濁らないやうに注意する。

勉強——「メンキョ」と短くいはないやうに注意する。

發音

兵營——ヘーエー

寢床——ネドコ

手拭——テスグイ

掛簾——カケゴエ

何とも——ナントモ

くわつばつ——カッパツ

敬禮——ケーレ

胃臺——ハイノ

斥候——セツコー

大聲——オーゴエ

夕飯——ユーハン

夕食後——ユーシヨクゴ

夜の點呼——ヨルノテンコ

週番士官殿——シューパーンシカンドノ

来られる——コラレル

今日——キョー

静かな夜——シズカナヨル

朝夕——アサユイ

夜中——ヨナカ

ゆくわい——ユカイ

ある間に——イルアイダニ

九時前——クジマエ

年月日——ネンガツビ

新——シンイチ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字

生活(カッ) 手拭(スグイ) 教練(ゲイ) 整(セ) 列(リ) 總(ツ) 員 事故

讀替

報(ホ) 告 奉(ホ) 讀 消燈(ト) 壁 精(セ) 神 養(ツ) 武男 班長殿 點呼 姿勢 步調(チョー) 小(ショ) 銃 最も 無事 奉讀

注

(チュ) 意 寢臺 當(ト) 初 營庭(デー)

語句語法

班長「入營以來、兵營生活、起床ラッパ、いつせい、點呼、教練、午後、くわつばつ、小銃、斥候、機關銃、突撃、兵器、かくべつ、食器、山もりにした御飯、お汁粉、大福餅、整列、せいとん、週番士官、總員、事故なし、人員、報告、無事、おごそかな氣持、軍人勅諭、奉讀、注意、消燈ラッパ、寢臺、背囊、武裝、入營當初、營庭、ゆくわい、いはば、中隊長、軍人としての精神等は、指導を要する

語句である。

次の如き「たり」の用法について理會させる。

氣をつけ、の姿勢をきちんとしたり、大きな目を見はつて、くわつばつに手をあげて敬禮をしたり、背囊と銃を肩に、步調を合はせて勇ましく行進したり、をりしけ、や、ふせ、の姿勢で、小銃を撃つけいこをしたりします。

斥候になつて森や林の中をかけまはつたり、バンバンバンバン、と、小銃や機關銃を撃つたり、相手の陣地に、わあつ、と大聲をあげて、はげしく突撃したりします。

次の如きいひ表し方については、その轉義をよく理會させることが大切である。

山もりにした御飯を見るまに平けてしまひます。

お國じまんの話に花を咲かせたりします。

「一二三四五六」と大きな聲で次々に番號を送つて行きます。

備考

連絡

ヨミカタニ「ヘイタイゴツコ、よみかた四」にいさんの入營、初等科國語「支那の春」にいさんの愛馬、同「軍旗」三勇士、同「靖國神社と連絡がある。初等科修身二、靖國神社」と連絡がある。

十七 油蟬の一生

教材の趣旨

油蟬の一生を科學的に觀察し、記述した教材である。この種の教材は、決して理科的な知識を注入しようとして存在するものでなく、科學的な觀察によつて新しく發見される自然に對する驚異を表したもので、そこに國語教材としての意義があるのである。しかも、兒童に科學の大切な意義を悟らせ、自然に對する興味を喚起することも、かうした教材の一つの目的でもあり、そこに理數科理科と相提携するものがあり得るのである。

動物の生態に關する觀察記述を素材としたものには、卷一に「おたまじやくし」があり、本教材はそれと直接のつながりを持ちつつ更に高い水準に發展したものと云へる。「おたまじやくし」は、兒童の主體的態度

に即して著しく童話的に表したものであつたが、それに比べると本教材は、もつと觀察を觀察として記述する科學性がある。

といつて、この教材は、決して單なる觀察の記載ではない。觀察の記載を素材とした作品である。特に油蟬の幼虫を主人公とし、その生育する姿に即して、その一生を記述した形であり、その根柢には絶えず人間の主觀が支配し、それが表現にまづはりついでゐる。その點に於いて、「おたまじやくし」と共通なものがあるのである。

文章

最初に「油蟬の子」の地中に於ける生活をやや具體的に敘し、一轉してそれがいつどこから來たかといふ觀點に即して發生的に敘述し、三轉して地下生活から地上へ移つて行くところを最も精細に敘して興味の頂點とし、結末にその地上地下の生活から來る感慨が述べられてこの文が終つてゐる。

冒頭の「油蟬の子は、土の中に住んでゐます」以下この一節は、油蟬の子

の地中生活の敘述である。「油蟬の子」といふのは、一般的な捉らへ方であるが、それが行文の間に次第に感情が移入され、擬人的になつて行くのも文章としておもしろいところである。

「木の細い根をぢくにして、まるい穴をほり」——正確にいへば、穴は球形であり、木の細い根を球の軸、即ち直径として穴を掘つてゐるのである。

「それにしても、この油蟬の子は、いつどこで生まれたのでせうか」——

地中の生活から一轉して、それが、いつどこから來たかと注意を促し、卵から幼虫への變化と、幼虫そのものが地中に於いて次第に成長するところが述べてある。「二ミリぐらゐの小さな、白いうじのやうなものです」——これが第一期幼虫で、その期間はほんの数日である。「最初は、浅いところにあつますが、年を取るにつれて、だんだん深いところへはいつて行きます」——第二期乃至第五期幼虫時代で、第三期ごろから次第に地中深くはいつて行つたのが、第五期の終りごろになるとまた浅いところへ行つて、地上へ出るのを待つ。その期間は、第二期二年、第三期二年、第四期一年、第五期二年とされてゐる。(第一齡から第六齡まで分ける分け方もある。)

「天氣のよい夏の夕方、油蟬の子は、今日こそと——以下地上生活にうつる経過は、頗る精細羅如たるものがあつて、いはばこの文章の興味の中心をなしてゐる。殊に「今日こそと穴から地上へはひ出します」「油蟬の子は用心して、木とか草とかにのぼつて安心だと思ふと」等、動物の本能が擬人化され、油蟬の子はこの文の主人公となり、結局全文が「油蟬の子生ひ立ちの記」といつた形になるのである。

「もう鳥などはいたいてい寝てゐますが——鳥の寝てしまつた夕方に油蟬の子が地上にはひ出す、不思議な天の配劑に氣づかせるべきである。

「堅いせなかの皮が縦に割れて——以下脱皮の方法がきびきびと順序よく書かれてある。多數の兒童の中には實際にそれを見てゐるも

のもあるであらう。少くとも誰でも見ることのできるせみのぬけがらによつて、以下の敘述を體驗的に理會させるがよい。

「もう、蟬の子ではありません——これまで『油蟬の子』として敘述して來たこの文章は、脱皮とともにもう『蟬の子でない』といひ、りつばな親蟬といひ、丈夫さうな油蟬といつてゐることに注意すべきである。

「滿六年といふ長い地下生活にくらべて、なんといふ短い地上の命でせう——蟬の子生ひ立ちの記」を終る最後の簡單な、しかし人間的な感慨であり、更にアメリカの十七年蟬を引き合ひに出してこの感慨を深くし、この文の餘韻としたのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、それにしても、この油蟬の子は、いつ、どこで生まれたのでせうかといふ疑問を手がかりとして讀ませ、地下の生活と地上の生活とに分つて、その興味深き形態や生態の變化するやうすを讀み取らせる。さらに結尾の「十何年も、土の

中にもぐつてゐる蟬があるといふことで、によつて興味を深めるやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として油蟬の卵が孵化すること、孵化した油蟬の子の地下の生活と地上に出て脱皮するやうすなどについて話をさせる。また蟬取りの體驗について話をさせ、綴り方への關心を深める。

次のことばを比較させてその意義を明らかにし、これらのことばを用ひて話させる。

最初 最中 最後

書くこと 新字を中心として指導する。「末」「管」「柔」「縦」「割」等は注意して、字形筆順を明らかにすることが肝要である。

次の如き文によつて書取を練習させる。

針のやうな管を木の根にさしこんで、汁を吸つて生きてゐます。

夏の末に卵を生みます。

柔かい土の中にもぐりこみ、最初は、淺いところにゐます。

堅いせなかの皮が縦に割れます。

起き直つたと思ふと、からだは完全に抜け出します。

次のカナヅカヒに注意させる。

丈夫さう

弱々しさう

楽しさう

さうして

生れたのでせうか

命でせう

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

かへる(歸)——カエル

かへる(變)——カエル

訛音方言

日——「ビ」と長くいふ地方では矯正する。

木——「キ」と長くいふ地方では矯正する。

場所——「バシヨ」と長くいふ地方では矯正する。

發音

行きます——イキマス

七年め——シチネンメ

夕方——ユーガタ

はひ出します——ハイグシマス

頭を出る——アタマガデル

頭を後へ——アタマオウシロエ

夜風——ヨカゼ

文字

新字 管 末(スエ) 柔(ヤワラ)かい 縦に割れて 直(ナオ)つた 完(カン)全

語句語法

「けら」もぐら「白いうじ」等は、貨物または標本を示して理會に資するやうにする。

「地下生活は地下の生活及び地上の命」と關係づけ、「もぐつて行きます」「もぐりこんでしまひます」「もぐつてゐる」は、互ひに比較して意義を明らかにする。「最初は「最後」「最中」と、滿六年は「七年め」と關聯して取扱ふ。

その他「はひ出します」「用心」「安全な場所」「しがみつきます」「みつみつしい」「しわくちや」「完全」等の語句は指導を要する。

備考

連絡

初等科國語「おたまじやくし」夏の午後、同三「夏」と連絡がある。

十八 とびこみ臺

教材の趣旨

夏期に於ける兒童の生活に取材した。このころ、兒童は——殊に男子の兒童は、好んで水に親しみ、水に戯れて遊ぶであらうが、その遊びの中にも、知らず知らずのうちに、心身を鍛鍊して行くのである。

本教材は、とびこみの練習の際、青々とした水面をめがけてとびこむことの爽快さと、その悦びとを、兒童の心理に即して描いたものである。随つて、兒童に本教材を読ませつつ、自然に勇氣と決斷心と呼びさまし、その精神を、あらゆる實踐の場合に生かすやうに仕向けて行かうと

するものである。

文章

五年生の山本君と、例の本田勇君と、渡邊正男君とが、とびこみ臺の上からとびこみの練習をすることを、渡邊君が書いたといふ仕組になつてゐる。水泳の場所は、土地によつて海とも湖とも、川とも適當に解釋してよからう。

この文は、渡邊君がとびこみ臺の上段からとびこむまでの氣持を中心にして敘し、その前後のやうすが添へて書かれてある。

まづ、渡邊君と、本田君と、とびこみ臺へ泳いで行き、とびこみ臺の中段から、とびこみの練習をしてゐると、五年生の山本君が、その上の段から鮮かなとびこみ振りを見せてゐる。これがきつかけとなつて、わたなべくん、上の段からとばうよと本田君がさそふ。渡邊君は自信はないが、上の段へあがる。すると、中段からとぶのとは、勝手が違つて、下を見ると、何だかこはいやうな氣持がしたのである。これは兒童の氣持と

しては極めて自然で、以下専ら正男の心理の推移を中心に筆が運ばれてゐる。

ためらつて、あたりを見まはすと、夏の太陽と、青い波が眼を射る。「早くとびたまへ。きみがとばなければ、ぼくがとべないぢやないか」と促す本田君のことばで追ひ立てられ、よし、とぼうと決心はしてみたものの、やはり「足がびつたり板について、離れないやうな」氣がしてとびこめない。この臆した心を、大きな入道雲が笑ひ、「弱虫、早くとびたまへ」と、山本君がはげますことによつて、最後の勇氣と決斷力とを得るのである。さうして、さきの失敗にこりて、今度は、下を見ないで、向かふの山をじつと見つめ、心を落ちつけて、「えいつ」と掛聲もろともとびこむ。思はず、「あつ」と心に叫んだ時には、からだはもう水の中へもぐつてゐたのである。その時、空と水が、ひっくり返つたやうに感じたのは、まつさかさまになつた時の感じをいつたもので、こゝで文は頂點に達してゐる。

それ以下は、とびこんだ後のやうすを敘したいはば文の餘韻をなす部分である。臺の上で笑つて、とびこみの成功を喜ぶ本田・山本兩君が、「おうい、ぼくのとび方は、どうだつたい」と不安と得意とを同時に感じながらたづねる渡邊君に、「よかつた、よかつた。うまかつたよ」とほめてやつたので、渡邊君は安心し、自信を持つて再びとびこみ臺の方へ、悠々ととつてかへすのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、とびこみの練習に行つた子ども等を想像させ、今まで中段からとんでゐた渡邊君が上の段からとぼうとして氣おくれし、本田君に促されて一そうかたくなり、山本君から激勵されて思ひ切つてとびこんだ心持の變化を、表現を通してそのやうすと心持を讀み味はせ、夏のかんかん照る太陽や波の光笑つてゐる入道雲、空と水とがひっくり返る情景をも併せて讀ませ、とびこみの興趣を感得させるやうに指導する。

話すこと

水泳について兒童の體驗に基づき話をさせる。文章挿畫を中心に、友

だちに勵まされてとびこみをした子どものやうすや、心持について話をさせる。
かうして綴り方への關心を深めるやうにする。

書くこと 新字を中心として指導する。新字は少いがいづれも誤りやすい文字で

あるから、肩旁等に分けて字形筆順に注意する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

水の中へすぷりとはいつて行くのは、いかにも愉快さうでした。

足がびつたり板について、離れないやうな氣がします。

空では大きな入道雲が笑つてゐます。

思ひきつて、兩足で臺をけりました。

水の上へ顔を出すと、本田くんと山本くんが臺の上で笑つてゐました。

次のカナヅカヒ等に注意させる。

泳いで行かう

泳いで行きました

はいつて行くのは

行け。

とばう

とびたまへ

とぶ

とべないぢやないか

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

いちばん(副詞の場合)——イチバン

いちばん(一番 數詞の場合)——イチバン

訛音方言

こはい——方言が多い。疲労の意味に使用する地方では注意を要する。
からだ——「カダラ」と訛らないやうに注意する。

水——「ミル」と訛る地方では矯正する。

發音

行かう——イコー

中段——チューゲン

上のいちばん——ウエノイチバン

上の段——ウエノダン

下を見ると——シタオミルト

何だか——ナンダカ

頭の上では——アタマノウエデワ えいつ——エイッ

兩足——リョーアシ 顔を出す——カオオダス

二人——フタリ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 愉快(カイ) 離れ

語句語法

中段は上の段と比較して指導する。「練習」入道雲「弱虫」等も指導を要する語句である。「よし」は承諾の意味、「えいつ」は掛聲、「あつ」は驚きの意味を表してゐる。

次の如きいひ表し方を指導し、文意を理會させるやうにする。

夏の太陽がかんかんとして照つてゐます。

青い波はきらきらと光つて目が痛いやうです。

足がびつたり板について離れないやうな氣がします。

空では大きな入道雲が笑つてゐます。

空と水がひつくり返つて、からだはもう水の中へもぐつてゐました。

次の如きことばつかひは、親しい朋輩などに用ひられることばとして指導する。

おい早くとびたまへ。

きみがとばなければ、ぼくがとべないぢやないか。

おうい、ぼくのとび方はどうだったい。

備考

連絡

ヨミカタ「イケニフネ」川アツビ、よみかた三「海」、初等科國語一「ふなつり」夏の午後「夏やすみ」と連絡がある。

初等科音楽二「水泳の歌」と連絡して取扱ふ。

十九 母馬子馬

教材の趣旨

本教材は、夏の夕暮の沼に近い放牧風景を歌つた韻文で、靜寂そのもののやうな自然を背景に、母馬と子馬の動作をうつし、兒童をしてあたたかな情愛を感じ得せしめながら、清らかな詩心を喚起させるものである。

る。

なほ、國防的見地からすれば、愛馬の精神に培ひ、教育的見地からすれば、動物愛護の念を育てる點に於いて、よみかた三、子馬、初等科國語一に「いさんの愛馬」と關聯がある。

文章

七五調を基調とした五聯の韻文で、各聯が獨立した形に見えるが、その實詩情は初めから終りまで一貫し、あたかもただ一聯の韻文のやうな感じを與へる。

しかも、用語は極めて平易で、淡々と歌ひながら、そこに盛られた詩的感情は、隅々にまであふれてゐる。

初めに、夏の夕暮であることを印象づけ、沼の岸の柳かげにゐる母馬子馬を點出して、全體としての情景を歌ひ、次に、子馬が水を飲むさまを敘し、つづいて水面にひろがる波紋を描き、三日月のかけの動きを眺めおしまひに沼の岸が次第に夕闇に沒して行く有様を述べてまとめてある。

このやうに本教材は、一面に空間的なひろがりを見せながら、また時間的な推移を表し、あたかも映畫風の動きを詩の形に定着したやうなものである。兒童はこの鮮明にしておだやかな放牧風景を味はふことによつて、ゆたかな詩境をしみじみと感ずることができ、であらう。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。七五の流麗な調子で詩形が整へられてゐるから、特に朗讀に注意し、讀みにしたがつて牧場の沼の岸を想像させ、折りから暮れて行く夏の夕景の中に番をする母馬と水を飲む子馬とをわからせ、まるくひろがる水の輪にゆられながら、さらさらと碎ける三日月の光に包まれてゐる母馬の情愛を、感得させるやうに指導する。

讀みを反復させることによつて、自然に暗誦に導く。

話すこと 馬を飼育する地方では、放牧の實況について話合をさせ、詩の理會に資するやうにする。詩については次の如き問によつて詩情の理會に資する。

「親子の馬は、どんなところにゐると思ひますか。」
「それはいつごろですか。」

「母馬と子馬は今どうしてゐるのですか。」

「子馬が水を飲む時の沼の景色を話してごらんさい。」

「夏のゆふがたは次第にどうなつて行きますか。」

なほ放牧について體驗のある兒童には、その見聞の話をさせる。

書くこと 新字・讀替の文字を中心として指導する。「柳」「春」「輪」は、いづれも複雑な文

字であるから字形・筆順に注意を要する。

全文を詩の形のまゝに、暗誦を利用して書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

子の馬は、水を飲む

いくつも出ては消えるたび

ゆらゆら見えたり

注意すべき發音文字ことは等

訛音方言

ひろがる——シロガキと訛る地方では矯正する。

いくつ——「ナンボ」の方言を使用しないやうに注意する。

消える——「ケール」と訛らないやうに注意する。

見えたり——「メーター」と訛らないやうに注意する。

發音

母馬——ハハシマ

子馬——コンマ

三日月——ミカズキ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 柳 暮れて

讀替 輪

語句語法

第一聯の「夏のゆふべの柳かげ」は、第五聯の「柳のかげが暮れて行く」に照應して、時間の推移を表すとともに詩情を深めてゐる。また第二・三・四聯の「ゆつくりゆつくり水を飲む」「いくつも出ては消えるたび」「ゆらゆら見えたりかくれたり」は、いづれも情趣に富んだ表現であるから取扱に注意して詩の理會に資する。

備考

連絡

ヨミカタニケンチャン、よみかた三子馬、同四にいさんの入替、初等科國語一にいさんの愛馬と連絡する。

(以上 七月)

二十 東郷元帥

教材の趣旨

初等科國語三に於いては、上古より現代に至るまでの國史上の人物を中心とした教材を、時代の順序にしたがつて排列し、やがて初等科第五學年で、國史に分科する母胎、たらしめたのであるが、本教材もその一つである。

随つて、本來ならば、排列の順序は、卷末に位すべきものであるが、關東大震災記念日と結んでここに置いたのである。

東郷元帥は、晩年に於いては、殊に兒童の敬愛の的となられた方である。この世界的英雄の大震災當日に於ける行動を、活寫したものであるから、兒童にとつては、親しみ易く、かつ深い感銘を與へることであらう。

元來元帥の如き眞の英雄は、平時の生活はどちらかといへば平淡であつて、一朝事ある時でない、その眞價が出て來ない。さればといつて、日露の役に於けるやうな元帥の活躍は、餘りにも多面的であり、かつ複雑過ぎるから、この學年の兒童の理會には困難が伴ふ。その意味に於いて、本教材は、元帥の眞面目が最も躍如として現れた大震災當日に取材し、突發的非常時に際しての元帥の忠誠と沈着とを表したものである。

故に、本教材を通して、元帥の忠誠にして沈着な精神を兒童に感得せしめるとともに、わが國の如くしばしば地震に見舞はれ、震火災の難にあふことが豫想される國に於いては、突發的な震災に處するの心構をも養ふべきである。況んや、今日の如く、防空は即ち防火である現狀にかんがみ、元帥がみづから防火につとめ、沈着な指揮により、つひに延焼を食ひとめられた活模範によつて、防火の念に培ふことは、國防的見地からして肝要である。

文章

まづ、關東大震災の時であつたといふ力強い短文を冒頭に、大震災當日のやうすを活寫して、本文に入る序としてゐる。

元帥が軍服に着かへ、赤坂離宮へ攝政殿下をお見舞ひ申されたこと、お寫眞を庭へお移し申しあげたこと、人々を指圖しながら、みづから防火につとめられたことを敘し、全篇が元帥の沈着な行動によつて貫ぬかれてゐる。

「はげしい震動がひとまづ過ぎると、すぐに居間へとつて返した。たんすをあけて、みづから軍服を取り出し、手早く着かへた。さうして、胸には、うやうやしく勳章をつけた」——地震直後に於ける元帥の沈着な行動を書き表し、それを受けて、元帥はおごそかに、「赤坂離宮へ。」と答へた。元帥が第一に赤坂離宮にいらせられた攝政殿下のことを念頭に置かれたその忠誠の精神が、端的に表出されてゐる。

「ひきつづき起る餘震に、家は震ひ、地はゆれ、市民があわてふためいて

ゐる中を、七十七歳の老元帥は、赤坂離宮へと急いだ——氣も顛倒して、あわてふためいてゐる市民と、落ちついて赤坂離宮へ急がれる老元帥の姿が、對照して描かれ、端然たる元帥の風采が、眼前に浮かぶやうである。その場合、七十七歳といふ元帥の年齢が印象強く響く。

「攝政殿下の御無事でいらつしやるのを拜した」元帥は、胸をなでおろしながら——これは元帥の當時の心境にまで立ち入つて敘したもので、この一句によつて、元帥の心意の内面を描き出し、ここまでの文章をまとめるかなめとしてある。

次に、お寫眞を庭の中央に安置されたのであつたが、このやうな突發時にも行動の順序を誤らない沈着さを、元帥の行動のうちに見いだすのである。

やがて、火は近くの家に起り、元帥の家の自動車小屋が見るまに焼けたので、元帥は家に残つてゐた人々を指圖しながら、みづから防火にとめられたのである。火災の際、家を焼かないやうに防火にとめる

ことは、國民のだれしもが、心がけかつ實行しなければならないことであるが、元帥はそれを身を以て實踐されたのである。この生ける模範を通して、兒童の一人一人に防火の精神を感得させ、自分の家を焼くのは、近所の家々へ、めい、わくをかけることになる。守られるだけは、守らなければならぬといふ元帥の心を心とするやうに敘述されてゐる。「火は前後二回おそつたが、元帥の指圖と集つて來た人々の働きによつて、消しとめられた。かうして、家は最後まで無事であつた」の最後の文章により、國民科修身二の「焼けなかつた町」と相提携して、表裏兩面より非常時に處するの心構に培はうとするものである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、關東大震災の時に於ける東郷元帥の說話であることをわからせ、文に即して震災當日のやうすを想像させ、わが身を忘れて攝政殿下をお見舞ひ申しあげ、歸宅後直ちに天皇陛下のお寫眞を庭の中央に安置された老元帥の忠誠と、防火にとめられた沈着な態度を感得させるやうに指導する。

話すこと 東郷元帥について兒童の見聞したことにつき話をさせ、本文の理會に資する。本文については、關東大震災と、東郷元帥の忠誠と防火のことを、話題として話をさせる。

次の如きことばは、比較對照させて語意を明確にする。

震災 震動 餘震

火事 火災 防火

市民 市中 市街

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。『災』『垣』『質』『素』『對』『震』等は誤りやすいから、肩旁等に分けて字形筆順を明らかにする。

次の如き文によつて書取を練習させる。

關東大震災の時であつた。

窓ガラスが飛ぶ、石垣がくづれる。

市民は、まつたく生きた氣持もなかつた。

家人の間に對しておごそかに答へた。

家は質素な木造建であつた。

七十七歳の老元すゐは自宅へ歸つた。
、陛下のお寫眞は、庭の中央に安置された。
次のカナヅカヒに注意させる。

庭へ出たが

居間へとつて返した

赤坂離宮へ

自宅へ歸つた

庭へお移し申せ

その方へかけつけて行つた

家々へ、めいわくをかけることになる

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

ひ(ハ)は——ヒワ

ひ(日)は——ヒワ

訛音方言

庭——方言では土間を「ニワ」といふところがあるから注意を要する。
歸る——「カイル」と訛らないやうに注意する。

火——「ビ」と長くいふ地方では矯正する。

發音

關東——カントー

地響き——ジヒビキ

一度——イチド

下敷き——シタジキ

木造建——モクゾーグテ

屋根瓦——ヤネガワラ

居間——イマ

取り出し——トリグシ

手早く——テバヤク

家人——カジン

七十七歳——シチジューシチサイ

御無事——ゴブジ

手傳ひ——テツグイ

自動車小屋——ジドーシャゴヤ

あぶなう——アブノー

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 震災 石垣 市民 質素 對して 老ロー元帥 自宅 中央オー

讀替 餘震 震ひ

語句語法

「關東大震災」ものすごい地響き「震動」石垣「市民」生きた氣持「命からがら」餘震「あれ、あれ

と」下敷き「質素」木造建「食事中」居間「たんす」あわてふためいて「老元帥」當時「攝政殿下」
「おいとまを申しあげて」自宅「火災」中央安置「おそつた」指圖「防火につとめた」等は指導を
要する語句である。

次の如き用例により副詞に注意して理會を深め用法に馴れさせる。

まづたく生きた氣持もなかつた。

ましてけがをした者や、つぶれた家の下敷きになつた者はどんな氣持であつたらう。

たちまち壁はくづれ、屋根瓦はたいてい落ちてしまつた。

震動がひとまづ過ぎると、すぐに居間へとつて返した。

みづから軍服を取り出し、手早く着かへた。

火はたちまち元帥の家をおそつた。

また次の如き用例に注意させる。

家人の間に對して、

守られるだけは守らなければならない。

備考

連絡

初等科國語三「日本武尊」光明皇后「千早、橘の御旗」と排列上の關聯がある。

二十一 くものす

教材の趣旨

くもが尻から細い糸を出してりつばな巣を張るのを見てみると、誰でも今更のやうに造化の神秘に心を打たれるものであるが、本教材も児童が日常生活の間にふとこの自然の神秘にふれ、おのづから興味を誘發されて、くもの巣をつくるやうすを仔細に觀察する過程を、児童の主體性に即して敘したものである。即ち觀察する児童の行動や感想を骨子として文を進め、児童の日常生活に即し、児童の心理と興味にしたがひつつ、科學的な心構に培はうとするものである。

また本教材は児童自身が、自然の不思議に對する觀察の結果を、注意深くかつ順序だてて敘述したやうな文章であるから、綴り方への橋渡しとすることもできるであらう。

文章

最初くもの突然の出現による驚きを述べ、ついでくもに興味を誘發されてから觀察に入り、最後にその感想を述べるといふ順序に書かれてある。

「二階の窓から見ると」——讀む児童は、この冒頭の一文によつて、くもがまさに眼前にぶら下つてゐる如く、その場の情景に引き入れられるであらう。

そのくもは、雨どひから糸を引いてぶら下つて來たのであるが、じつとして動かうともしない。「何をしようとするのか」といふ疑問がここで當然湧き、一體これからどうしようとするのだらうか、ひとつよく見てやらうと觀察への興味を誘發される。「急におもしろくなつて來ました」といふ運びは、この児童の心理の推移をよく表してゐる。

「くもは、やがて後の方の足を動かして、おしりのところから、たくさんの細い糸を引き出し始めました」は細かい觀察であり、一生懸命見つめ

てゐる兒童の心持も暗に想像される。次の、白い糸が空中にただよふといふのは、無數の細い糸を空中に放出することであつて、その中の一本でもが向かふの適當なものに附着すれば、それを基本にして、巢を張るのである。くもがその一本のくつついた糸を引つぱつたり動かしたりしてゐるといふのは、精細な觀察であり、次の「風にゆられながら」「向かふへ渡り」始めたといふ描寫は、本文中最も緊張したところである。さうして、たどりついたくもは、ほつと一安心したやうで、なほ、この子どもの心持が表されてゐる。

なほ見つめてゐると、くもがその糸をたぐつたので、雨どひと柿の木との間に、一筋の糸が、空中にびんと張り渡された。最初の基礎工事ができたわけで、「びんと」といふことは、いかにもよくきいてゐる。つづいて、くもはその基礎工事の上に、着々仕事を進めて行くのであるが、それは時間を要する作業であるから、敘述を省略して、「いそがしさうに行つたり來たりして」と簡略に述べてある。

最後の「晩になつて」といふのは、さきに省いたくもの巢の営みの結果を述べるため、網の完成を確認し、觀察の文章として首尾一貫せしめたのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。全體的にくもが巢を張つてゐるのを見て書いた文であることをわからせ、表現に即して目の前にふらさがつて來たくもに興味を感じて、巢の張り方を綿密に觀察して行くところを讀み取らせる。かうして觀察に對する興味を感じさせつつ、綴り方へ發展するやうな態度を養ふやうにつとめる。

話すこと 文章、挿畫を中心として體驗と結び、くもの巢の張り方について話合をさせる。更に、くもが網で昆虫を捕獲したことなどについて體驗を話させ、綴り方への關心を持たせるやうにする。

書くこと 讀替文字と困難な漢字について指導し、次の如き文によつて書取を練習させる。なほ時間に餘裕があれば、カナヅカヒ等に注意して全文を書寫させる。何十本とも知れない細い、白い糸が、夕風にゆられながら、ふはふはと空中にただ

よつてゐるのは、ほんたうにきれいでした。

風にゆられながら、やつと柿の木にたどり着きました。

くもは、ほつと一安心したやうでした。

今度は、前の方の足をしきりに動かして、この糸を自分の方へたぐり始めました。

今までたるんでゐた糸が、だんだんまつ直になりました。

一筋の糸が、空中にびんと張り渡されました。

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

くも(蜘蛛・雲)——クモ

訛音方言

くも——「クボ」「コブ」等方言が多いから注意する。

雨どひ——「アマドヨ」と訛る地方では矯正する。

しよう——「シヨ」といはいやうに注意する。

す巢——「ス」と長くいふ地方では矯正する。

發音

後の方——ウシロノホー

引き出し——ヒキダシ

何十本——ナンジッボン

向かふ——ムコー

一安心——ヒトアンシン

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

讀替 まつ直

語句語法

次の如きことばは、くもの動作と結びつけて直觀的に理會させるやうにする。

何十本とも知れない細い、白い糸

ふはふはと空中にただよつてゐる。

風にゆられながら、

たどり着きました。

ほつと一安心、

足をしきりに動かして、

たぐり始めました。

たるんでゐる糸、

空中にぴんと張り渡されました。

備考

連絡

初等理科一「夕」と連絡して取扱ふ。

二十二 夕 日

教材の趣旨

落日の莊嚴と美しさを、繪畫的寫實的に描寫した文章である。精細な觀察によつて、時々刻々と沈み行く落日の大觀を生き生きと今眼の前にあるやうに寫し出してある。それもことさらに美辭麗句を弄することなく、感動的な印象に即してそのままを傳へてゐることが、かへつて深い實感と呼び起し、讀む者に感銘を與へる。既にヨミカタ一「ユフヤケ」に於いて、夕やけに對する兒童の憧憬的な氣持が述べられ、同二

「西ハタヤケ」には滿洲の夕やけの美しさが説かれ、同三「長い道」にも夕日の赤い長い道の情景が敍されてゐるが、こゝではじめて落日そのものの莊嚴さと美しさが、正面から述べられるのであつて、精彩ある行文を通し、兒童をして自然の美を味得せしめることが肝要であらう。

文章

冒頭の一句によつて、簡潔に全體の情景を表現し、次に直ちに夕日そのものの印象を述べて、「焼けきつた鐵のやうにまつかです」と大膽にいひ切つてある。さうして、なほよく見るとまつか大きな圓の中に動くやうなもののある感じを述べて、壯大な神祕感を與へ、一轉してこれと對蹠的に地土の緑が夕陽に映え、遠い木立、家、煙突が夕空に浮かび出てゐることを表す。これはいはば落日の前景である。日は地平線に近づくにしたがつて更に速度を増して沈み行く如く感じられる。遂に地平線にかかつた。見てゐる間に半圓となり、櫛のやうになり、やがて沈んでしまつた。その過程の描寫は極めて簡潔で、大膽で、極度の省

略法を用ひながら要點がおさへてある。

以下は落日の餘情である。「いく百筋の金の矢とは、落日の後、よく見かける雲間から探照燈のやうに幅廣く放射するものをいふのではなく、金糸のやうに細かく美しい幾百千筋の細線である。その光線の大空への射出を傳つて、視線は上へ上へと迎つて行つてゐることが、この文章によつて察せられる。そこで、

あちらこちらに、眞綿を引き延したやうな雲が、金色に、くれなるに、色づき始めます。

といふ雲の位置は、決して地平線に近い空ではなく、ほとんど頭上の大空に浮かぶ卷雲の類である。眞綿を引き延したやうといふ具體的な表現によつて、それをうかがふべきである。

最後は、この一大畫幅に對する感歎の句で、短文を二度重ねて深い感動を表し、文の餘韻ある結末としてある。

取扱の要點

讀むこと

文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。表現が彈力性を帯び韻律的になつてゐるから、特に朗讀の指導に力を注ぎ、讀むことにより文章の表現を味ははせるやうにつとめることが大切である。讀みが進むにしたがひ、夕日の美觀が書いてあることをわからせ、表現に即して刻々に變化する夕空や地上の景觀を讀み味ははせて行き、文末の「美しい空です。はなやかな空です」の感激におのづから共感させるやうに指導する。

なほ、かくの如き文章では齊讀を利用して暗誦させるがよい。

話すこと 夕日の美しさについて體驗の話をさせ、本文の理會に資する。

次のことばを用ひ話すことを練習させる。

くつきり あざやかな しだいに

ぐんぐん すんすん などといふ

書くこと 新字、讀替文字、略字を中心とし、字形筆順に注意して指導する。かくの如き文に於いては、全文を書寫させ、理會を深めることも、一つの方法である。

注意すべき發音文字 ことば等

訛音方言

動いて——「イゴイテ」と訛らないやうに注意する。
沈んで——「スズンデ」と訛る地方では矯正する。
かくれて——「カクネテ」と訛る地方では矯正する。

發音

木立——コダチ
浮き出して——ウキダシテ
圖の下の端——エンノシタノハシ
ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 圓(四)(エン)
讀替 刻んで 眞綿

語句語法

現在法を始め修辭的表現が多く用ひられてゐることに注意させ文の理會を深めるやうに指導する。
次の如き比喩を用ひた表現に注意させる。
焼けきつた鐵のやうにまつかです。

たらひほどに見える大きな圓
中には何かとどろとどろとけた物が動いてゐるやうに見えます。
あちらこちらに眞綿を引き延したやうな雲が金色にくれなるに色づき始めます。
次の如き漸層的または連鎖的な表現に注意させる。
圓は、しだいに半圓となりました。楕ほどになりました。あととうとうかくれてしまひました。(漸層的)
さし出たいく百筋のこまかい金の矢が夕空を染めて、空は赤から金に金からうす青にぼかしあげたやうです。(連鎖的)
次の如き修飾語を用ひた表現にも注意させる。
赤い大きな夕日が今、西の遠い遠い地平線に落ちて行くところです。
遠くの木立や家や煙突がくつきりと夕空に浮き出しています。
日はぐんぐんと落ちて行きます。
すんずん沈んで行きます。
美しい空です。はなやかな空です。

二十三 秋の空

教材の趣旨

九月の終りごろともなれば、澄みきつた秋の空が、児童の頭上をおほふ日が續くであらう。このやうな時期に、前課で、落日の美しさをつぶさに眺めさせた児童の眼を、澄み透つた眞晝の秋の高空に向けさせ、悠悠として明澄な高空から、秋そのものを感じさせようとするのである。

文章

各聯の冒頭は、「どこまでも」の共通した句で始まり、第二句を「高い空だ」「青い空だ」「さえた空だ」と、「空だ」のことはを繰り返して統一感を與へてゐる。この各々の句は、ただ單に空を説明してゐるのではなく、「高い空だなあ」「青い空だなあ」「さえた空だなあ」と、空を見上げた児童の感情を見も織り込んだ表現である。このやうに、毎聯第二句で多少の變化を見

せ、第三、第四句で各聯の内容的な差違を表してゐる。

第一聯の「煙突やアンテナが、せいのびをしてゐる」で、まづ高空を仰いだ児童の眼に、最もはいりやすい具體的な大きな事物——煙突やアンテナ塔を捉らへ、それらが、高空に突つ立つてゐる有様を、せいのびをしてゐる」と擬人化して主體的に表現してゐる。この最後の句によつて、第一聯の表す一つの風景を、單なる敘景に終らしめないうで、児童の心に結びつけ、児童のものたらしめてゐる。

第二聯は、煙突やアンテナ塔から、更に児童の眼を、まっさをな秋の空にきはだつて白い「電柱の碍子」に移し、目で見たままの印象を、「くつきりと白い」といふことばで表現してゐる。それは秋の空に浮かぶ電柱の碍子を見た者のたれしもが感ずることであらうが、電柱の碍子に着眼した點に透徹した詩眼がうかがはれる。随つて、このやうな表現に即して、自然の對象の中から、秋を具體的に表してゐるものを發見させるやうに、児童を仕向けて行くことが大切である。

第三聯は、「どこまでもさえた空だ」を受けて、たなければ、かんかん音のする空だと結んでゐるが、前二聯が秋の氣分を具體的に表してゐる事物に即して、感じを述べてゐるのとやや趣を異にし、たなければ、かんかん音のする空といふやうに、澄み渡つた空全體から受ける感覺を、主體的にいひ表してゐる。どこまでもまつさをに澄みわたつた空を、青い寶石で張りつめたもののやうに感じ、たいてみれば、かんかんと澄んだ音がするやうだといふのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。讀みを指導しながら、次第に秋空のすつきりした氣分を感得させるやうにする。第一聯は、高い空に煙突とアンテナとを空間的に捉らへたことを第二聯は、青い空に白い碍子が表してゐる色彩の美を第三聯はさえた空を音威的に表現してゐることを讀み取らせて、秋の空の詩情を味はせて行くやうにする。讀みを反復させることによつて、自然に暗誦に導く。

話すこと 秋の空について兒童の體驗を話させ、詩の理會に資するやうにする。

書くこと 暗誦を利用して全文を詩の形で書寫させる。

注意すべきことは等

語句語法

「アンテナ」電柱の碍子「さえた空」等は指導を要する語句である。

次のやうに、毎聯反復的に敍して、まづ秋の空の特性を捉らへてゐる點に注意させる。

どこまでも 高い空だ。

どこまでも 青い空だ。

どこまでも さえた空だ。

また、せいのびをしてゐる「くつきりと白い」たなければ、かんかん音のする等のいひ表し方に注意して指導する。

備考

連絡

初等科國語一「秋、同三「夕日」と連絡して取扱ふ。

初等科音楽二「青い空」と連絡して取扱ふ。

(以上 九月)

二十四 濱田彌兵衛

教材の趣旨

鎖國以前に於いて、わが國民が如何に積極的に海外に發展し、めざましく活躍したか。これが代表としてまづ初等科修身二に「山田長政」を掲げ、それと關聯して本書には濱田彌兵衛の活動を敘して、昔來わが國民精神の發展的であつたことを具體化するとともに、これを現代に活かして大東亞建設の覺悟を固からしめようとするものである。

彌兵衛の一件は、決して當時のわが貿易船の一行が、出先に於いてたまたま惹起した私闘的な騷擾でなく、實に臺灣に於ける日本とオランダの勢力の衝突が、彌兵衛によつて破裂したのであつて、本教材の精神もこの見地に立つて解されなければならない。

あるひはかういふ疑問も起るであらう。オランダ人が臺灣安平を

占領し、輸出入品に一割の税を課したのに對し、日本人がこれに應じようとしなかつたのが既に不穩當でなからうかと。これについて當時の日本人は、古參者たる日本人が新參者のオランダ人に課税されるはずがないと主張した。オランダ人はこれに手をやき、寛永四年、バタビヤ總督はノイツを日本に遣はして、オランダが臺灣の一角を占領した顛末を告げ、また日本人が朱印を得て臺灣に渡來することを中止するやう申し出させたに對し、幕府は臺灣に於ける日本貿易が壓迫されてゐることを聞いて大いに怒り、蘭使ノイツを逐ひかへしたのであつて、幕府はオランダの臺灣占領を承認せず、況んやその課税權をも認めないのであるから、結局オランダ人の臺灣に於ける課税は、日本の承認しない勝手な行爲に過ぎない。（なほこのことについては備考に掲げるノイツの書にも見えるやうに、當のオランダ人さへ不合理だといつてゐる。）

またあるひはかういふ疑問も起るであらう。彌兵衛等のノイツに對して行つたところは、不法な直接行動でありはしないか。——この種

の疑問こそ、彌兵衛の行動を一片の私闘と見なし、その根柢に日蘭勢力の衝突といふ國際的重大問題が横たはつてゐることに目を蔽はうとするものにほかならない。これより先き彌兵衛は、オランダ人の暴狀を憤り、寛永四年臺灣の住民十六人を伴なつて歸國し、末次平藏をして事情を訴へしめ、臺灣を日本の保護の下におくことを願はしめたほどであつて、その意氣實に壯とすべきものがある。寛永五年、彼が末次船二艘の船長として臺灣へ渡つたとき、船が完全に武装されてゐたのは、單に海賊に備へるためのみであつたかは俄に判斷しがたく、ノイツがそれを沒收したのは、彼としてあるひは無理のない處置とするも、徒にその歸國を許さず、飲料水も與へないで、日本人を死地に陥れようとし、剩へ威嚇無禮至らざるなきに對し、日本人たる濱田彌兵衛等が隱忍自重、交渉二箇月に及び遂に生きて恥をさらすより、戰つて死なうと覺悟を定めたのは、むしろ當然すぎるほど當然のことである。況んやこの事件に關し、幕府は絶対に彌兵衛の行動を是認し、彌兵衛の連れ歸つた

オランダの人質及び乗員を獄に下し、平戸の蘭館を閉ぢ、碇泊中の蘭船の船具や砲をおろさせたばかりか、その後バタビヤから來た特使も上府をさしとめ、ノイツ自身また日本に送られて監禁されるなど、終始強硬な態度を取つてゐるに於いてをやである。この事件は、寛永十三年、東印度會社から青銅の大燭臺を日光廟に獻じ、使者をしてノイツの赦免を乞はしめたので、始めて許され、萬事が解決したのである。

顧みれば彌兵衛の一件は、當時世界の最強國として、勢を東洋に張りつつあつた和蘭をして、その心膽を寒からしめ、遂に頭を垂れてわが國に陳謝せしめたほどの大事件であつて、ためにわが國威を海外に發揚するところは決して尠少でなかつたのである。聖恩枯骨に及んで、大正十四年には彌兵衛に従五位を追贈あらせられた。

文章

臺灣に於ける日蘭勢力の衝突の歸結として描かれてゐる彌兵衛事件であるだけに、表現にはやや複雑な面がある。ただ、できるだけ背景

的敘述を簡明にし、彌兵衛の活動を劇的に表すとともに、つとめてその行動の正義性が具體化してあるから、教材に即して指導すれば、兒童には敢へて不必要な疑問は起らないであらう。

文章は、大體、二つの場面を中心とし、この場面を導き出すための道行的な敘述と、極めて簡潔な餘收的結尾とから成り立つてゐる。

「末次船の船長濱田彌兵衛は、臺灣のオランダの長官ノイツの不法な仕打に、腹が立つて腹が立つて、たまりませんでした」——冒頭は頗る唐突で、しかも頗る具體的である。この文は百十一頁の「濱田彌兵衛は、長崎の貿易商末次平藏の船長として、いつも臺灣から南支那へ通つてゐました」及び百十二頁の「彌兵衛が、末次船二さうを仕立て、荷物や武器を積んで、臺灣に着いた時、オランダの長官ノイツは、すぐ役人に命じてその船を調べさせ、一時彌兵衛を一室にとちこめておいて、武器や船具を沒收させてしまひました。彌兵衛が腹を立てたのは、それがためであります」と三者相應じて、次第に内容を明らかにしながら、次の彌兵衛ノ

イツ對談の場に導く序となしてゐることに注意すべきである。末次船は長崎の末次平藏の所有する船で、幕府は平藏に對し、朱印狀を出してゐた。

「臺灣は、明治以來日本の領土になりましたが、今から三百二十年ぐらゐる前までは、まだどの國のものともきまつてゐませんでした」——以下の文章は、一轉して當時の臺灣事情をのべ、續いて日本人の海外發展の事情を敘してゐるが、その歸結として「濱田彌兵衛は……臺灣から南支那へ通つてゐました」が導き出され、更にまたオランダ人の臺灣占領のことから日本人との摩擦を敘し、その歸結として「彌兵衛が、末次船二さうを仕立て……彌兵衛が腹を立てたのは、それがためであります」が導き出され、文章の構成が頗る組織的であることに注意を要する。なほオランダ人が臺灣の一角を占領したのは寛永元年のことと、昭和十七年から三百十八年前に當る。當時、支那は澎湖島をその治下とし、臺灣を治外としてゐた。即ち三百二十年前までは、臺灣はこの領土で

もなかつたのである。

「今日、高砂族といつてゐる島の人」——嘗つて生蕃といはれた臺灣の住民は、今日高砂族と呼ぶことになつてゐる。「高砂」は臺灣の古稱で、高山國から次第に「高砂」といひ、主として日本人の間に通用した名稱である。

「その以前から、日本人は、さかんに南方へ船で出かけ」——文祿元年、豊臣秀吉は長崎堺京都の商人に始めて朱印狀を與へ、それら商人の船は安南東埔塞東京六昆高砂呂宋天河暹羅等へ往來した。江戸時代に入り、いはゆる御朱印船として多數の船が東亞諸國へ出掛けたのである。しかし、秀吉以前といへども、わが國人のこれら地方へ進出したものは頗る多く、日本人が臺灣に居住してゐたことは、それより更に三十年前、永祿六年に既に證據があるといはれてゐる。

「長崎の貿易商末次平藏」——秀吉が始めて朱印狀を與へて以來、江戸時代に於いてもこの名を世襲してゐる。

「ところで、そのころ、ひよつこりと臺灣へ現れたのが、オランダ人です」——オランダ人は、寛永元年臺灣の砂島安平に來たが、そこに多數の支那船が碇泊し、また日本商人が、多數の獸皮や砂糖を積み出してゐるのを見て大いに喜び、砂島の上に城砦を築いた。この砦をオランダ城といひ、やがてゼーランジャ城と改めた。

「日本船を取り調べたり荷物を沒收したりして」——日本人はオランダ人より古參だといふので關稅を拂はず、これにはオランダ人も手をやいたが何時までもそのままにしておくわけに行かず、初代の長官ソックが寛永二年一千五百斤の絹を沒收したのを始め、しばしばさうしたことを繰り返した。

「彌兵衛が、末次船二さうを仕立て」——これは寛永五年のこと、彌兵衛はその四月末に臺灣に着いた。彌兵衛はその前年、即ち寛永四年にも南支及び臺灣に赴き、二萬斤の絹と獸皮を仕入れて歸らうとしたが、支那海賊一官鄭芝龍のために邪魔されて歸ることができず、また臺灣

に於ける日本貿易が、オランダ人に壓迫されてゐる事情を知つて憤慨し、住民十六人を連れて歸國、臺灣を日本の治下に置くやう幕府に畫策してゐる。

さて以上を序として、次にノイツと彌兵衛の交渉の場面が描き出されてゐる。この交渉は約二箇月にわたつて、何回か試みられたのであるが、ここではいはばその最初と最後とが大きく描かれて、興味の中心をなしてゐる。

「何のために、武器を積んで來たか」——彌兵衛の船二艘は完全に武装され、一行四百七十人が乗組んでゐた。ノイツがそれに警戒を加へたのは、あながち無理ではなかつた。

「海賊にそなへるためです」——前年彌兵衛は海賊一官に悩まされてゐるから、これも當然のいひふんである。

「もうこのへんに、海賊はゐないはずだ」——これは明らかにノイツの詭辯で、この海賊一官の子鄭成功のために、三十年後オランダ人は臺灣

から驅逐されたのである。

「かういふかけ合ひをしてゐる間に、むなしく月日が過ぎて行きました」——彌兵衛が臺灣に着いたのは四月の末で、オランダ人をこらしめたのは六月二十九日である。約二箇月交渉は續いたのであり、彌兵衛の隱忍自重を認むべきである。しかもノイツの態度は頗る傲慢不遜で、彼が高い椅子にふんぞりかへり、足をもう一つの椅子の背にのせて、ままて面會したことは、オランダ人の記事に見えてゐる。

「彌兵衛は部下の者といつしよに、ノイツに最後の面會を求めました」——六月二十九日のことである。以下戰鬪の場面は、日本に傳ふる記事はすべて後世の聞き傳へて頗る粗略であるが、オランダ人の記するところは甚だ詳細である。この戰鬪に彌兵衛の弟小左衛門、子新藏はもとより十數人が参加して、館の内外の護衛兵と戦ひ、蘭人の殺されたもの六人、日本人の死する者三人あつたといひ、オランダ兵士は城砦を固めて發砲し、更に日本人百數十人が集つて來たといふ次第であるら

しいが、本教材の文章は、焦點を彌兵衛とノイツに置き、すべてが重點的に、しかも劇的に表現してある。指導に際しては、敢へて補説する要なく、文章に即して理會せしむべきである。

「それから彌兵衛は、ノイツをしりあげたままで、長い間だんばんをつづけました」——この談判は六月二十九日から七月四日まで續き、その間オランダ人側では評議會をしりば開き、種々威嚇や押し問答が行はれたが、彌兵衛はどこまでも強硬で、遂にすべての要求を容れさせて解決した。

「數日のうち、彌兵衛を船長とする二さうの日本船は——この一節は事件の結末を簡明に敘したもので、次の節と併せて餘韻ある結尾をなしてある。七月六日には、すべての積み込みを終つた。出發の日は明らかでないが、多分その日か、翌日ぐらゐであつたらう。なほこの談判の結果、オランダ・日本兩方が人質を交換したので、蘭船一艘が長崎まで随伴したのである。

「ヤヒョーエドノといふ名が、そのうち、オランダ人の間に響き渡りました」——和蘭ヘーグ文書館の文書によれば、彌兵衛は當時 Jaffoyedono の名を以て知られてゐる。日本語の敬稱「ドノ」を附けて呼んでゐるところに、その名が如何に蘭人を壓したかが考へられる。この一節を以て本文の最後とし、すべてを餘韻に託して終りとしたのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。長文であるから適當に分節して取扱つてよい。新字及び難語句が多く、事件も錯綜してゐるから、特に讀みの指導に力を注ぐことが大切である。

文に即してまづその時代と當時の臺灣事情とを明らかにし、遠く南方へ渡航した日本人の中で、濱田彌兵衛がその大立物であつたことを讀み取らせる。

冒頭の三行は本教材の中心を突く伏線となつてゐるから、これを讀ませてまづ疑問と興味とを起させる。

次に彌兵衛はオランダ人の横暴を詰責し、よく彼等を屈服させて、沒收された武器や船具を取り返し、日本人の意氣を示した精神を感得するやう讀みを指導する。

結末の五行は彌兵衛の愉快な事績をもの語る場面、冒頭と照應して意氣揚々凱歌をあげる彌兵衛を想像するやうに讀ませて行く。
 話すこと 文章挿畫を中心として當時の臺灣の事情、わが國人の南方發展、オランダ人の不法と干渉、彌兵衛の詰責最後の談判等について大東亞戦争と關係づけて話合をさせる。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。字數が多い上に複雑な文字も少くないから、肩旁等に分けて觀察を周密にし、字形筆順を明らかにすることが大切である。「未」は末、「往」は住、「商」は敵の左部商、「具」は貝等の既習文字と區別して確實に指導する。

次の如き文によつて書取を練習させる。

不法な仕打に腹を立てました。

たいわんは明治以來日本の領土になりました。

島の人々が未開の生活をしてゐました。

早くから往來し、兵力を以て占領しました。

一割といふ高い關稅を拂ふことを命じました。

新參者が古參の日本人をじやまあつかひにしました。

日本人はなかなか承知しませんでした。

「何のために武器を積んで來たのか」と責めます。

日本の恥をたいわんにさらしたくありませんでした。

ノイツに最後の面會を求めました。

出航を許可していただきましたうございます。

ノイツは背をむけたまま返事をしません。

「そんなに歸りたければ歸れ」と吐き出すやうにいひました。

武器船具、そのほかすべての物を返すことを約束しました。

數日のもち堂々と港を出航しました。

次のカナヅカヒ等に注意させる。

日本へ歸らう

日本へ歸りたい

歸ることは許さん

歸りたければ歸れ

〔彌兵衛は答へました。
わうへいに答へました。〕

注意すべき發音文字ことは等

訛音方言

拂ふ——「ハロ」といはいやうに注意する。
しよう——「ショ」といはいやうに注意する。

しらはくれて——東京では「シラバククレテ」などといふが「シラバクレテ」を標準とする。

發音

末次船——スエツグブネ
今日(百十頁)——コンニチ
南方——ナンボ
来る船——クルフネ
支那船——シナセン
新参者——シンザンモノ
何のため——ナンノタメ
頭の上——アタマノウエ
仕打——シウチ
日本人——ニッポンジン
南支那——ミナミシナ
日本船——ニッポンセン
拂ふ——ハラウ
一時——イチジ
わうへい——オーヘー
何とか——ナントカ

申し出ました——モーシデマシタ 今日(百十六七頁)——キョー
行く——イク 何も——ナニモ

胸ぐら——ムナグラ 刀を抜き——カタナオヌキ
逃げ出して——ニゲダシテ 數日——スージツ

オランダ船——オランダブネ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 不法(ホー) 領(リョー)土 未開(オー)來 貿易商(ショー) 占領 關稅(ゼー)
船具 責め 背 恥(ハジ) 求め 許可 吐き 約束
讀替 未開 兵力 以て 古参 承(ショー)知 許可 返事 都合 加(クワ)へ
短刀(ト) 屋(オク)内 約束

語句語法

本課には「オランダ」「フィリピン」「佛印」「タイ」「ジャワ」「スマトラ」「南支那」等地名が少くない。
これらは地圖を利用して適當に説明する。
本課には難語句がかなり多いがなるべく關係のある語と比較して指導することが大切である。

末次船の船長―末次平藏の船の船長 以來―以前 貿易―貿易商

新参者―古参 長官―部下 一割―一時―一室―一國

今日―今日 城外―城内―屋内 數日―數人

その他指導を要するものには、不法な仕打、領土、高砂族、未開、進出、往來、占領、關稅、承知、沒收、さんざん、いやがらせ、仕立て、船具、おだやか、かけ合ひ、このへん、むなしく、月日が過ぎ、ふんぞり返り、面會、むしろ、城外の別館、通譯、許可、都合、氣味わるく、短刀、談判、堂々、等がある。

また次の如きいひ表し方についても指導し、理會を確實にする。

貿易をしてゐました。したがつて、その途中にある臺灣へも早くから往來して、

ノイツは、武器や船具を返さないばかりか、日本船に水さへもくれません。

この上がまんして、日本の恥を臺灣にさらしたくありませんでした。

むしろオランダ人と戦つて死んだ方がましだとさへ思ひました。

どうか今日はぜひとも。

備考

参考資料

本教材の作成については辻善之助著『海外交通史話常原坦著』南方文化の建設へ等に負ふところが多い。なほ後者に掲げられてゐるバタビヤの總督カルベンチールに送つた貿易報告書（二六二）中のノイツの書は彌兵衛の當の敵であるにかかはらず排日の非なることを論じてゐる。これを以て見ても、幕府が彌兵衛の一件を是認したのは決して偏見でないことがわかる。

和蘭に取つて極めて有利にして必要な貿易の華主たる日本の惡感を起すことなくして、日本人の自由通商を拒み得るであらうか。自分は思ふに、日本人には税を課しないで、直ちに彼等をして適當に貿易に参加せしめるのを以て得策とする。たとひ課税しようと努めても、彼等はもはや之に従はないであらう。この問題は急速に處理しなければ、我が對日貿易の利を失墜するものとなるであらう。皇帝（寶曆）及び一部高官への僅少なる贈物の外我等は何等の課税をも受けずして日本に於ける通商上完全なる自由を與へられてゐるに拘らず、その國民に對して我等から納税を要求するのは合理といふべきであらうか。況や、先住者には優先權ありとの諺は、我等がこゝに來る前から既に日本人が、多年土蕃と交易をしてゐた事實に徴して、彼等に適合する諺である。さうして見ると、彼等こそ我等に課税する正當な權利を有する者で、我等は寧ろこの口實に乏しい。それでゐるのに、彼等は、未だ嘗て我等に對して何等の要求をした事も無いではないか。

故に飽くまでも閣下の命令を遂行しようとするならば和蘭は遂に日本を退去するの止むなきこととなるであらう。さうしてその勢ひ兩國が戦端でも開いたならばこのクイワン及びキールン(何れこゝも蘭領となるとせばをば果して何人が防禦し得べしと保證が出来るであらうか。又たとひ兩地を維持し得るとするも失費が多くして保持の利益はないであらう。(幣原坦著「南方文化の建設」)

連絡

初等科國語二「南洋」同三「君が代少年と連絡がある。同三「日本武尊」光明皇后「千早城」錦の御旗「東郷元帥」と排列上の關聯がある。

初等科修身二「山田長政」と密接に連絡して取扱ふやうに注意する。

新出讀替文字一覽表

〔左傍ニ一ヲ附シタモノハ讀替文字〕

課		課	
頁	行	頁	行
一 四	二	三 一五	一 五
潮風	潮銀	少女	奥の間
二 六	潮汗狩	一〇	座敷
七 一	お調べ	一六	お給仕
八 六	拂つて	七	突き
一〇	標本	一七	汝
一四	朝廷	六	計て
六	附長	七	勅
九	お親ひ	一〇	失禮

新出讀替文字一覽表

三									
一八	三	九	一	二	三	四	二〇	二二	二四
絶え	坪げ	お祈り	仕へて	大任	特に大切	身の丈	方角	地震	固めて
傷	大丈夫	大任	大任	大任	大任	大任	大任	大任	大任
四									
二五	三	九	二	三	四	五	二〇	二二	二四
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
五									
二五	三	九	二	三	四	五	二〇	二二	二四
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族

七									
三七	四	七	一〇	八	三九	四〇	四二	四三	四五
耕され	圃まき	たんざく彫	地盤	講堂	儀式	大眼	意味	鐵	高等科
現れ	京都	現れ	現れ	現れ	現れ	現れ	現れ	現れ	現れ
八									
二五	三	九	二	三	四	五	二〇	二二	二四
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
九									
二五	三	九	二	三	四	五	二〇	二二	二四
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族
泥水	日光	苗代	金色	大願	湯	寝て	心配	病	遺族

二二	五六	二	防破堤
二二	四	四	市街
二二	五七	八	附近
二二	五八	四	坂
二二	五九	五	餘り
二二	六〇	八	幅五尺
二二	六一	九	危く
二二	六二	二	油を注がせ
二二	六二	三	死傷
二二	六二	九	錦
二二	六二	一	征伐
二二	六二	五	配つて
一三	六二	九	探る 隠して
一三	六二	一〇	旧月
一三	六三	五	家来
一三	六四	二	御道筋
一三	六四	五	怒つた
一三	六五	一〇	叫んで
一三	六七	八	計れ
一三	六八	四	變(ま)り
一三	七一	七	時刻
一三	七二	八	端
一三	七五	二	煮る
一三	八	八	煮る

一六	七七	二	武男 班長殿
一六	七八	九	兵營生活
一六	七八	一	手拭
一六	七八	六	教練
一六	七八	七	姿勢
一六	七八	八	敬禮
一六	七八	九	歩調
一六	七九	一	小銃
一六	八〇	一	限も
一六	八〇	四	整列
一六	八〇	七	總員 事故
一六	八〇	八	報告
一六	八〇	一〇	撫事
一六	八一	四	奉讀
一六	八一	八	注意
一六	八二	一〇	消燈
一六	八二	四	壁
一六	八三	四	腰臺
一六	八四	二	精神 養つて
一六	八五	六	管
一六	八六	二	末
一六	八七	一〇	縦に割れて
一六	八八	七	直つた

一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇
八八	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三
八	一	六	三	八	七	二	四	七	八	九	一〇	一一	一二
完全	愉快	離れ	柳	輪	暮れて	關東大震災	石垣	市民	餘震	實素	對して	震ひ	
二〇	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一
六	一	七	四	五	一	〇	二	四	六	一	六	一	二
老元帥	自宅	中央	まつ直	圓(円)	剛んで	廣綿	不法	領土	未開	往來	貿易商	兵力	以て占領

二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七
三	五	一〇	三	八	一	〇	三	六	三	〇	一	三	九
關稅	估參	豚肉	船具	責め	背	恥	求め	許可	返事	吐き	加へ	短刀	
二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七
八	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
堀内	約陳												

運筆順序 (特に筆順の誤り易いもの、又は二様以上あるものについで、藝能科習字と連絡して掲げた。)

銀	狩	調	拂	廷	從	座	奧	給	遺	族	寢	耕	講	式	歛	全	現	賊
ハニーツ ハニ 言 月 コ 川	ニ 上 チ ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人
絶	任	特	震	麻	傷	術	當	櫻	園	覺	悟	低	越	輪	齒	妙	振	造
ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人	ハ ニ 人

堤	街	汲	餘	幅	油	注	錦	伐	變	壁	精	養	管	縱	割	愉	離	柳	暮
ー 旦 ー 人	イ ー 正 子	シ ノ フ 又	ハ ヲ ト 人 エ ー ハ	ロ ー ー ロ ー ニ	シ ノ ー ニ	シ 、 ー ニ	ハ ー ミ ー ツ ー 白 ー ロ ー	イ ー ー ー ー	言 々 々 又	コ ノ ロ 立 ー ー 上	シ ー ハ ー ー 二 月 上	兰 人 ヲ レ 人	竹 ー ー ー	タ ー ハ ー ー ー 人	ハ ー ミ ー ー ー	ハ ー ー 人 ー 月 ー	タ ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー 一 八 日
刻	煮	拭	練	敬	整	總	報	告	燈	災	垣	民	素	對	法	往	占	具	責
タ ノ ス ー	ー ー ノ 日 、 心	ー ー ー ー ー ー ー	タ ー ハ ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー ー ー	タ ー ハ ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー	タ ー 人	ー ー ー ー ー ー ー	コ ー レ ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー	リ ー ー ー ー ー ー ー	シ ー ー ー ー ー ー ー	イ ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー ー ー	ー ー ー ー 一 二 日 三 八

背 恥 求

こし月

リシ心

ーシく、

可 吐 約

ーロ

ロー

エーハク、

綴り方指導要項

指導の發展段階

第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。

第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などにつき、見方考へ方を指導して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。

第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。

第四期 第三期に準じてそれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第四學年

一 指導要項

初等科第四學年の綴り方は、前學年から次第に芽生えてゐた科學的・道德的・藝術的な見方考へ方が、その分化の度を増して來た。随つてその表現も、單に生活事實をそのまま無雜作に再現するばかりでなく、書かうとする主題を自覺して、それに適合したものを、生活事實の中から選擇して書くといふ態度が生じて來る。

故に本學年の綴り方指導は、他科目他教科の指導中でも郷土の觀察と相俟つて、自己中心の生活環境から一步ふみ出して、廣く自然や世の中のできごとなどを注意して觀察するやうに導く。一方家事の手傳ひ、飼育栽培、工作、遊戲などの實際經驗を盛んにさせることによつて、兒童の生活を正しく豊かに培養することにつとめる。その表現については、醇正な

國語によつて徐々にまとまりのある文を書くやうに導くことが肝要である。

綴り方と話し方とは、不即不離の關聯をもつてゐるので、綴り方指導のあらゆる機會に話し方の修鍊とすべきである。そのため毎週の國語の授業時間のうち、約三時間を割いて、綴り方話し方を併せて指導する心構が大切である。

上述の要旨に基づき、左に本學年の指導要項、毎學期の指導要項例並びに参考文題を掲げて、指導の指針とすることにした。

○兒童の見聞する事物現象・日常の行動などを、次第に文の目的や用途によつて的確に書くことができるやうに見方考へ方を指導する。

(イ) 見聞する事物、日常の行動などを、的確に書くことができるやうに、事物現象を確實に觀察する態度を養ふことにつとめる。

(ロ) 事柄がくはしく書いてゐるだけでなく、心持がもりこまれてゐるので、文には値うちがあることをさとらせ、事物現象をよく考へてみる。

やうな態度を養ふことにつとめる。

(ハ) 他科目他教科諸行事と緊密な關聯を考へ、取材の範圍を廣くするとともに、事物現象の見方考へ方を健全に導くことにつとめる。眞實を書くこと、自分の心持を正直に表すことは、文を書く上に大切ではあるが、それがために不健全な見方考へ方の萌芽を助長するが如きことを戒め、常に明朗にして、積極的建設的な兒童性を伸ばすことにつとめる。

○綴り方を書くことの自信と興味を養ひ、表現の意欲を旺盛ならしめる。

(イ) 珍しいこと、變つたことだけでなく、日常の極めてありふれた事柄でも、見方考へ方書き表し方がすぐれてゐれば、よい文になることをさとり、常に題材を豊富に持つやうに導く。

(ロ) 學級兒童の綴り方や適當な文例について讀ませたり、話合などをさせて、どんなのがよい文であるかをおのづからさとらせ、表現の意欲を旺盛ならしめることにつとめる。

(ニ) 機會ある毎に、實際に手紙や日記や報告などを書くことを奨励して、自分の書いたものが何かの役にたつといふ喜びを味ははせる。

○正しい國語による書き表し方に馴れさせるやうに留意する。

(イ) ことば、ことばづかひは、醇正な國語によるやうにつとめさせる。

(ロ) 濁音、鼻音、拗音、促音その他必要なカナツカヒを正しく書くやうに、常に努力させる。

(ハ) 句讀點鈎改行などは、讀み方の教材に準じて書くやうにさせる。

○自分の文は、自分で十分仕上げるといふ態度を養ふ。

(イ) 自分の文は必ず讀み返して、誤字や脱字を正し、句讀點に注意する習慣をつける。

(ロ) 時には自分で直した文を、更に淨書させることによつて、推敲の興味と方法を體得させるやうにする。

(ハ) 自分の文を、他人に讀んで聞かせることは、お話をして聞かせるのだといふ心持をもつて、よく人にわかるやうに讀ませ、これによつて讀

むこととともに、話すことの修練をさせる。

二 指導要項例

第一學期

○ゆたかな敘述

- (イ) 日常の遊び、仕事、いろいろな行事などについて、自分のしたこと、見たこと、聞いたことを、その順序にしたがつて書かせるとともに、心に強く感じたこと、考へたことなどを、特にくはしく書くやうに導く。
- (ロ) そのために、どの場面をくはしく書くべきかを考へるやうに導く。
- (ハ) 場面をよく想ひ起して、行動や對話や背景などをとり合はせて書くことの修練をさせる。

- (ニ) 時には、對話のみで書かせたり、韻文で書かせたりすることもよい。

○感想の記述

- (イ) 読み方、修身諸行事と關聯して、家庭や學校や社會のできごとなどをよく觀察して、くはしく書かせるとともに、意見や感想などを書くやうに指導する。

- (ロ) 意見や感想は、常に素直で、明朗な心持で書くやうに導く。

○正確な記述

- (イ) 理數科、藝能科等と關聯して、春から夏にかけての動植物の生長、氣象の變化等、自然物や自然現象などについてよく觀察させ、それを細かに、正確に記述させる。時には、それを日記の形で書かせられるのもよい。
- (ロ) 郷土の觀察に於いて見聞したところを整理して書かせる。

- (ハ) 必要に應じては、圖を入れて具體的に説明する手法を、修練させる。

○手紙

手紙では、相手により、目的や用途によつて書く事柄や書き表し方に差違のあることを知らせて、それを修練させる。

○用語用字符號

(イ) 読み方教材と關聯して、漢字まじりのひらがなで、正確に書くことに馴れさせる。

(ロ) ことばやいひまはしむつとめて、醇正な國語によるやうに導く。

(ハ) 敬體口語と常體口語とを混同しないやうに留意する。

(ニ) 句讀點鉤改行などの表記法は、読み方教材に準じて正しく書く習慣を養ふことにつとめる。

○ 自分の文は自分で十分に仕上げる態度を養ふ。

(イ) 自分の書いた文は、必ず読み返して、誤字や脱字を正し、句讀點や鉤に注意する習慣をつける。

(ロ) 読む人によくわからせることを考へて、書き足りないところを補ふやうにさせる。

(ハ) 時には自分で直した文を更に淨書させることによつて、推敲の興味と方法に氣づかせるやうにする。

○ 話し方の修練に留意する。

(イ) 綴り方の朗讀發表は、話し方修練の機會であるから、これを獎勵し、聞く人によくわかるやうに讀ませることに留意する。

(ロ) 他人の朗讀する綴り方をよく聞いて、何が書いてあるかを捉らへ、またそれについての感想を述べさせるなどして、話し方の修練につとめる。

第二學期

○ 勞作作業を題材とした敘述

(イ) 物を製作したこと、家事の手傳ひをしたことなど、働いたことについて、その仕事の順序や作つた物の説明を正確にさせる。

(ロ) 必要に応じては、圖を入れて具體的に説明する手法を修練させる。

(ハ) 事實の記載にとどまらず、感じたこと、考へたことを述べるやうに獎勵する。

○ 感想の記述

- (イ) 第一學期に準じ、次第に、日常の行動、見聞する事物現象等に對する心持を中心として書かせるやうに指導する。
- (ロ) 珍しいことに限らず、手近なことでも、新しい角度から觀察し、考察し、想像をめぐらして書けばよい文になることをさとらせ、その表現の修練をさせる。

○正確な記述以下の各項目については、第一學期に準じて指導する。

第三學期

○希望やあこがれの敘述

- (イ) 春を迎へる喜び、新年の覺悟、五年生になる喜びなど、將來のことについて想像したこと、考へたことを書かせる。
- (ロ) 想像を豊かにするとともに、想をよく練つて、筋道の通つた表現をするやうに導く。
- (ハ) 材料に應じて、韻文や對話や手紙などに表現させる。

○場面の描寫

- (イ) 特に心に強く感じた場面を捉らへて、そのやうすと心持とを、ありありと描き出すやうに仕向ける。
- (ロ) 場面をよく想ひ起して、見たこと、聞いたこと、考へたこと、感じたことなどを、いきいきと書く手法を指導する。
- 正確な記述以下の各項目については、第一學期に準じて指導する。

三 参 考 文 題

(次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。)

第一學期

四月

四月はじめの學校

新しい學年を迎へた感想喜びかはられた先生など、兒童生活上の變化を、學校に即して記述させる。

春のけしき

うちの庭や、田園や、海べや、學校園や、通學途上の春景色などを書かせる。詩の形で表現させるのもよい。

私のうち

家族のこと、家業のことなどを説明的に書かせる。家畜などを書かせてもよい。

郷土出の兵隊さん

大東亞戰爭に参加してゐる郷土出身の兵隊さんのこと、その家族のことなど。郷土出身の偉人について書かせてもよい。

五月

自分のからだ

身體検査に因んで自分のからだについて説明と感想を述べさせる。小さい時からの發育狀況などを考へ合はせて書かせるのもよい。

種まき

理數科理科と關聯して、學校やうちで種まきをしたことをくはしく書かせる。

このごろ

五月の學校園、田園、通學途上の景色等について、主として自然の有様を書かせる。詩の形で書かせるのもよい。

あんそく

潮干狩や遠足などのやうすを、地圖や説明圖を入れてくはしく書かせる。

六月

このごろの仕事

家業の手傳ひについて、どんなことをどんなにしてゐるか、またその時に感じたことを書かせる。自分のしてゐる仕事について書かせてもよい。

うちのとけい

時の記念日に因んで、うちの時計のこと、時間を大切にすること、時刻をよく守ることなどについて、なるべく自分の體驗をもととして書かせる。

忠義な人

本で讀んだり、話で聞いた、りした忠義な人のことについて、どんな時にどんなことをしたか、それに對してどう思つたかなどを書かせる。最近に戦死した人についてでもよい。

七 月
このごろの天候

梅雨期の天気や温度や自然などについて自分の調べたこと、
感じたことを書かせる。

夏 の や さ い

じやがいも、トマト、なす、きゅうりなどについて、各自の経験を書
かせる。栽培や採取のことを入れて書かせるのもよい。

兵 營 に ゐ る 兄 へ

読み方と關聯して、兵營にゐるにいさん、または知人にあてて
書かせる。戦地病院の兵隊さんにあてたものでもよい。

水 泳 ぎ

水泳の楽しいやうすを書かせる。できるだけ背景を取り入
れて、川遊び、魚つりなどを書かせてもよい。

第 二 學 期

九 月

私たちの調べたこ
と
飼つてゐる生きもの

夏やすみ中に調べたことについて、その調べ方の順序や、その
時感じたことなどを書かせる。
うちで飼つてゐる馬や、牛や、鶏や、犬や、猫や、小鳥などのやうす
をよく觀察して、くはしく書かせる。學校で飼つてあるもの
を書かせてもよい。

私の作ったもの

紙、鐵砲、水鐵砲、模型、飛行機、お人形、手さげなどの製作について、
順序だてて正確に書かせる。

氏神様のお祭

氏神様のお祭のやうすをくはしく書かせる。郷土の觀察と
關聯して、氏神様について調べたことなども入れて、
戦地の兵隊さんなどに知らせる手紙としてもよい。

十 月

ニュースを聞いて

ラジオのニュースを聞いたり、新聞の記事を読んだり、ニュー
ス映畫を見たりして、感じたこと、考へたこと、特に國民の覺悟
を固めたことなどを書かせる。

日 記

稲刈の手傳ひをしたこと、働いたこと、留守番をしたことなど
を中心にして書かせる。

秋の一日

遠足や運動會など、秋の一日を楽しく暮した日のことをくは
しく書かせる。

人のことば

人々のことばのくせや、よいことばとわるいことばなどにつ
いて、自分の聞いたこと、失敗したことなどを書かせる。

十一 月

秋の運動

このごろしてゐる運動について、どんなことをどんな順序で
するか、どんな心持がするかなど、山遊びなどについて書か
せてもよい。

げき

修身や國語などで習つたこと、その他聞いたこと、讀んだこと
について劇風に作らせる。

私たちの村(町)

郷土の觀察と關聯して自分の村や町のことを説明的に書か
せる。

秋の終りごろ

晩秋の自然の景色を書かせる。詩の形で表現させるのもよ
い。

十二月

自分の長所と短所(自分の性質の長所と短所をなるべく具體的に書かせる。

年の暮

年末の家の行事、村や町のやうす、人の動きなどについて、觀察
とそれに對する感想をくはしく書かせる。

今年あつたおもな
こと

この一年間を回顧し、國家として學校として家庭として、また
自分自身に起つた主なことについての感想を書かせる。兵
隊さんにあてた手紙にするのもよい。

第三學期

一月

ぐわんじつの朝

元日の朝の行事と、その心持をくはしく書かせる。

入營を送る

入營する兄又は郷土の人を送つた時のやうすと、その時の感
想を書かせる。

冬の遊び

スキーや雪合戦や雪だるまなどはとびその他冬の寒さとたた
かつた勇ましい遊びのやうすをくはしく書かせる。

二月

私の工夫したもの

自分が工夫して作つたものについて、どんな動機で、どんな順
序で、どんなものを作つたかを書かせる。

大陸の友だちへ

滿洲支那その他大東亞各地の子どもに、日本はどんな國柄か、
日本にはどんな名所があるか、今日本人はどんな決心である
かを知らせる手紙。

楽しい夕飯

夕飯の時、または夕飯後の一家團樂のやうすを書かせる。
對話だけで書かせるのもよい。

見學したこと

〔動物園植物園博物館その他を見學したことを順序だてて正確に書かせる。〕

三月

父母の恩

〔父母の恩について、深く感じてゐることを具體的に書かせる。〕

陸軍記念日

〔陸軍記念日の學校の行事や聞いた話や調べたことなどを順序だてて書かせる。〕

春を迎へる喜び

〔このごろの氣候、動植物の有様、春らしくなつて來た自然、五年生になる喜びなどを綴りませて書かせる。〕

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、ヨミカタで得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。また人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聞いたことなどについて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聞く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、また男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。
なほ、話をしたり聞いたるときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心構を養ふ。

初等科第四學年

指導要項

初等科第四學年の話し方指導は、他科目他教科の指導と同様指導の發展的段階に於ける第二期の後をうけて、いよいよ第三期の指導段階にはいつたのである。

第二期即ち第三學年の話し方指導では順序だてて話をするやうに導くこと、ことばづかひや、いひまはしなどを正すことなど、話の仕方について積極的に指導することを企圖してはゐるものの、やはり過渡期であるために読み方指導に即して日常の話しことばを新しく習得させ、その使ひ方に馴れさせることを本體としたのである。

第四學年に於いても、読み方指導に際し、前學年と同様な心構をもつて臨むことは勿論であるが、指導の發展段階にも示したやうに、自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導くのであるから、それに適した機會を作つて、その指導を行ふことを考へる必要がある。

そのため國語の毎週の授業時數の中、約三時間を綴り方と話し方にあ

て、その中の一時間を時に話し方の修練にあてるやうにするがよい。
以上の要旨に基づき、左記要項によつて本學年の話し方を指導する。

(一) 話し方は、綴り方と緊密な關聯のもとに、話しことばを指導し、かつ、これを醇正ならしめるやうに修練することに、つとめる。

(1) 綴らうとする題材を中心にして話合をさせ、言語發表の修練をさせる。時には、言語發表だけの時間を置いて、發音やことばづかひや、敬語のつかひ方について指導する。

(2) 綴り方に於いては、文の目的や用途によつて的確に書くやうに指導するのであるが、話し方に於いても、それと同じやうな心掛が大切なことをさとらせ、要領よく話すことができるやうに導くことにつとめる。

(3) 綴り方の朗讀は、まとまつたお話をする修練の機會と考へさせ、はつきりとお話をする心持で讀むやうに導き、言語發表の修練に資する。なほ常體で書き表したのもだんだん多くなるであらうから、その

常體で書いた文を、話す草稿として、敬體の話しことばで發表させることも、話し方修練の一方法である。

(4) 綴り方の朗讀を聞く場合には、どんな事柄がどう表してあるかに注意させて聞くやうに仕向ける。

(5) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、書き表されてゐる事柄や、表し方や、ことばづかひについて適正に指導する。

(二) 話し方は、讀み方と緊密な關聯のもとに指導する。そのため、特に左のことに留意して取扱ふやうにする。

(1) 讀み方指導に於いて行はれる話合は、讀み方教材たる文章をよく讀み、挿畫などをよく見させ、表現に即して具體的に發表させることにつとめる。

文章や挿畫などに關聯して、兒童の體驗を發表させる場合にも、つとめて、順序だてて、要領よく發表するやうに仕向ける。

(2) 讀み方の教材に親しませ、正しく讀むことに馴れさせて、正しいこと

ばづかひや、いひまはしに習熟させるとともに、それを話すことばとして發表させるやうにつとめる。

(3) 問答に於いては、問の出し方に注意し、教材のことばや、いひまはしを取り入れて答へさせるやうにする。なほ読み方教材の進むにつれて、文章語としての語彙や語法も出て来るから、それらは適切な話したことばによつて身につけさせるやうにつとめる。

(4) 教材中の對話や、人物の言行について敍した文章には、相手と場合によつて、おのづからことばづかひに相違のあることをさとらせ、その使ひ方に修練させる。

(5) 問答や話合に現れる児童の誤つた發音方言訛音等は、機會ある毎に矯正して、醇正な言語に導くやうにつとめる。

(三) 他科目他教科の指導と關聯して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身禮法と關聯して、相手と場合に應じたことばづかひ姿勢態度等

の儀をなす。

(2) 音楽と關聯して、發音を正すことにつとめる。

(3) 郷土の觀察理科諸行事等と關聯して、事物現象の觀察や作業等を整理して發表させる場合にも、つとめて正確なことばを使用させ、要領を明確に話すやうに導く。

(4) お話會學藝會等に於いて他科目他教科で學習したこと、自分で調べたこと、諸行事で經驗したこと、讀物等を話題として、大勢の前で、筋道をたてて話すことの修練をさせる。

(四) 話し方の指導は、児童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場に於ける言語修練に留意する。

(1) 教室に於ける問答話合はもとより、教室外に於けることばづかひについても常に留意して、一般的また個人的に指導することは、全學年を通じて大切なことである。とりわけ教室外のことばづかひは、粗野になりがちであるから、常に注意することが大切である。

K131.8-5-7a

話し方指導要項

三一四

- (2) 教師はつとめて正しいことばを使用して、児童をして、知らず知らずそれにならばせるやうにする。
- (3) レコードラジオ等を選択利用して、発音や話しぶりなどに關心を持たせ、正しいことばに馴れさせることにつとめる。
- (4) 家庭と協力して、挨拶その他日常のことばを正しく使ふやうに導く。
- (5) 話し上手は聞き上手であることをさとらせ、他の人の發表する話を氣持よく聞く態度を養ひ、その話の要點を的確に捉らへるやう、聞き方の指導に留意する。

昭和十七年四月六日印刷
昭和十七年四月九日發行
昭和十七年五月十五日翻刻發行

初等科國語三教師用

定價金五拾參錢

著作權所有

著者

文

部

省

翻刻發行
兼印刷者

日本書籍株式會社

代表者 大 橋 光 吉

東京市小石川區久堅町百八番地 32

印刷所 日本書籍株式會社工場

昭和十七年四月十四日
文部省檢査済



發行所

日本書籍株式會社

K/31.8-5-7a

話し方指導要項

三一四

- (2) 教師はつとめて正しいことばを使用して、児童をして、知らず知らずそれにならばせるやうにする。
- (3) レコードラジオ等を選択利用して、発音や話しぶりなどに關心を持たせ、正しいことばに馴れさせることにつとめる。
- (4) 家庭と協力して、挨拶その他日常のことばを正しく使ふやうに導く。
- (5) 話し上手は聞き上手であることをさとらせ、他の人の發表する話を氣持よく聞く態度を養ひ、その話の要點を的確に捉らへるやう、聞き方の指導に留意する。

昭和十七年四月六日
昭和十七年四月九日
昭和十七年五月十五日
翻刻發行
翻刻發行
翻刻發行

初等科國語三教師用
定價金五拾參錢

著作權所有 發行者 文部省

翻刻發行 日本書籍株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地 32

代表者 大橋 光吉

印刷所 日本書籍株式會社工場
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 日本書籍株式會社

昭和十七年四月十四日
文部省檢査済



欽定四庫全書